

3. 8 甲殻類

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

カテゴリー 分類群	絶滅 (EX)	野生 絶滅 (EW)	絶滅危惧 I 類		絶滅危惧 II 類 (VU)	準絶滅 危惧 (NT)	絶滅のおそれ ある地域個体群 (LP)	情報 不足 (DD)	合 計	
			I A 類 (CR)	I B 類 (EN)						
初版 1996	0		3	—	—	8	46	1	0	58
改訂第2版 2005	0	0	17	5	12	23	32	0	4	76
改訂第3版 2017	0	0	21	7	14	29	68	0	19	137

※初版のカテゴリーのうち、絶滅種は現行のカテゴリー名の絶滅と野生絶滅を集約することで示し、このほか絶滅危惧種は絶滅危惧 I 類、危急種は絶滅危惧 II 類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー名に変換して示した。

(1) 本改訂でのおもな留意点

甲殻類は非常に多様化し、様々な環境に進出したグループである。沖縄県内における多様な甲殻類の生息状況をより良く把握する為に、野外での調査を普段から多く行っている、甲殻類に詳しい7名で分科会を組織した。沖縄県の十脚目を中心とする甲殻類相の情報は、前回改訂版が発行された2005年から比べると飛躍的に増加している。本改訂では、前回改訂版に掲載された種に加え、前回改訂で掲載されなかった種、新たに新種記載されたり県内での分布が判明した種も含めて、掲載候補種を選定した。その後、掲載候補種各種の現況を分科会委員のあいだで共有しつつ、絶滅の危険性を検討し、掲載の可否及びランクの決定をした。

本改訂版での掲載種は、前回改訂に比べて61種増えて137種に上った。この増加は研究の進展によるところが大きく、絶滅の可能性が高い種が急激に増加したとは言えない半面、各種の生息環境が向上しているとも言えず、沖縄県内における甲殻類の絶滅のリスクが高い種が多いことをより良く示す結果となった。沖縄県は多様であるがそれぞれの規模は小さな環境がモザイク状に分布する島嶼の集合であり、例えランクが低い種であっても絶滅の可能性が急激に高まったり、多くの種が生息する環境が容易に悪化する可能性があることにも留意して頂きたい。

(2) 本改訂で明らかになったこと

本改訂版での掲載種は、前回改訂に比べて61種増えて137種と大幅に増加した。これは、沖縄県における十脚目を中心とする甲殻類相の研究の飛躍的な進展が大きな理由の一つである。前改訂からのランクの変更は、上昇したのが3種で、下降が20種、リストから除外されたのが14種であった。これら変化の要因として、調査研究の結果、新たな生息場所が発見されたなど、知見の増加によるところが大きい。一方、各ランクの構成種数はすべてのランクで増えた。絶滅危惧 IA 類 (CR) と IB 類 (EN) に新たに加えられた甲殻類は、慶良間諸島や久米島固有のサワガニ類、かつて県内の4島に分布するとされた *Geothelphusa levicervix* が島ごとに別種に分けられたオオサワガニ類3種に加え、地下水域に生息するダイトウコオイエビやドウトツモクズガニ、などである。絶滅危惧 II 類 (VU) と準絶滅危惧 (NT) に新たに加えられた甲殻類は、干潟やマングローブ、汽水域などに生息する様々な分類群に属する種がほとんどであった。このように、全体で見ると絶滅の可能性が高い種の生息環境は、陸上から淡水、汽水域と様々な環境に渡っており、沖縄県の生物多様性の保全対策には、個々の種や環境への対応はもちろん、さらなる総合的な対策も必要であることが分かる。

執筆者 成瀬 貫 (琉球大学熱帯生物圏研究センター・准教授)

(3) 掲載種の解説

1) 絶滅危惧 I A 類 (CR)

和名 : **ダイトウコオイエビ (新称)**
 分類 : テルモスバエナ目 ハロスバエナ科
 学名 : *Halosbaena daitoensis* Shimomura & Fujita, 2009
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 体長約 2.2 mm。背甲長は体長の 0.24~0.29 倍。眼葉の内側は丸みを帯びる。複眼は欠如している。第 1 胸脚の前節腹側に 4 本の剛毛が生じる。第 2 胸脚外肢は 2 節から成る。

近似種との区別 : *Halosbaena* 属には、本種を含めて世界から 4 種が知られる。本種は、形態的には、オーストラリア西部に分布する *Halosbaena tulki* Poore & Humphreys, 1992 に最も似るが、第 1 触角の鞭部が 12~14 節であること (*H. tulki* は 7~9 節)、第 2~5 胸脚の外肢に 8 本の羽状剛毛が生じること (*H. tulki* は 6 本)、尾肢の外肢の第 2 節に 9 本の羽状剛毛が生じること (*H. tulki* は 7 本)、尾節の幅は長さの約 0.6 倍であること (*H. tulki* は約 0.9 倍)、雄のペニスは先端にいくにしたがって細くなり、その基部に小突起を持つこと (*H. tulki* では先端にいくにしたがって太くなり、基部に突起を持たない) などから区別することができる。

分布の概要 : 南大東島。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : *Halosbaena* 属は世界から 4 種が知られ、南大東島に分布する本種の他に、カリブ海に *H. acanthura* Stock, 1976、カナリア諸島に *H. fortunata* Bowman & Iliffe, 1986、オーストラリア西部に *H. tulki* が分布している。

生態的特徴 : 本種の繁殖や生活史については不明な点が多い。飼育下では、水槽の底面や壁面を歩くように泳ぐ様子が観察される。

生息地の条件 : 塩分の混じる洞窟地下水域 (陸封潮溜り)。
 現在の生息状況 : 本種のタイプ産地の洞窟では、洞窟周辺の貯水池や道路の側溝 (雨水溝) からの水が流入するようになっており、その結果、貯水池に生息する外来魚であるカワスズメの一種 (ティラピア)、オオヒキガエル、ヤゴ類などの洞穴地下水内への迷入が確認されている。

学術的意義・評価 : 本種は、テルモスバエナ類の太平洋上からの初めての記録となる。大東諸島は、約 4800 万年前に南半球 (現在のニューギニア近海) で火山島として誕生し、フィリピン海プレートに乗って、島の沈降とサンゴ礁の隆起を経ながら現在の位置に移動してきたとされる。テルモスバエナ目は、背甲と胸節背側との間で卵を保育し、直達発生で浮遊幼生を持たないことが知られている。今回発見された種は、形態的にオーストラリアの種に最も類似しており、大東諸島移動説を裏付ける“歴史の生き証人”となる可能性も考えられる。今後、本種的生活史研究や分子遺伝学研究的進展が待たれる。

生存に対する脅威 : 土地改良等による洞窟の消失、洞穴地下水域への生活排水や農薬などの流入、捕食者となりえる外来生物等の洞穴地下水域への迷入などが挙げられる。

特記事項 : 南大東島固有種。本種にはこれまで標準和名が提唱されていなかったため、本種の新標準和名としてダイトウコオイエビを提唱する。今回の新標準和名提唱の基準標本として、北九州市立自然史・歴史博物館に収蔵されているホロタイプ標本を指定する (KMNH IvR 500,239)。

原記載 : Shimomura, M. & Y. Fujita, 2009. First record of the thermosbaenacean genus *Halosbaena* from Asia: *H. daitoensis* sp. nov. (Peracarida: Thermosbaenacea: Halosbaenidae) from an anchialine cave of Minamidaito-jima Is., in Okinawa, southern Japan. *Zootaxa*, 1990: 55-64.

執筆者名 : 藤田喜久

和名 : **カクレサワガニ**
 分類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
 学名 : *Amamiku occulta* Naruse, Segawa & Aotsuka, 2007
 カテゴリ : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態 : 最大甲幅 22 mm。甲は後方が狭くなる台形に近く、背面は凹凸が多く、あまり背方に膨らまない。眼窩外歯の後ろに 1 歯を有する。眼窩後縁を背面から見ると、その窪みは比較的深い。雄の第 1 腹肢は硬く、基節には外縁に広い凹みがあり、また先端節は先端に向かって徐々に細くなる。末節先端部は瓶首状にはならないが、先端節内縁に低い葉状の突起があり、内縁が波打っているようにみえる。

近似種との区別 : アマミナミサワガニに最も似るが、カクレサワガニは背面から見た時の眼窩後縁の凹みがより深く、また雄の第 1 腹肢先端節内縁が波状になるのに対し、アマミナミサワガニでは滑らかに外側に曲がるのみで波状にならないことから、両種を区別できる。カクレサワガニは、同じく渡嘉敷島に生息するトカシキミナミサワガニの小型個体にも酷似する。両種のほぼ同サイズの雌を比較した際、カクレサワガニの成熟サイズが小さいために腹節がより広がっていることから区別できる。また、

<甲殻類>

雄の場合は第1腹肢の発達具合と形状（カクレサワガニの第1腹肢先端は尖るのに対し、トカシキミナミサワガニでは瓶首状になる）により、それぞれ区別できる。

分布の概要： 渡嘉敷島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 唯一の同属種であるアマミミナミサワガニが奄美大島と徳之島に分布する。

生態的特徴： 他のサワガニ類と同様、大きな卵を少なく産む大卵少産型の生活史である。

生息地の条件： 保水能力がある森林内の、上方を木々に覆われて暗がりになった、川幅が狭く流れが緩やかな沢に生息している。

現在の生息状況： 本種が生息する渡嘉敷島はその面積がわずか 15.8 km² と非常に小さく、さらに生息環境が特殊な上に、生息密度も非常に小さい。

学術的意義・評価： 面積わずか 15.8 km² の渡嘉敷島には 4 種のサワガニ類が生息しており、非常に限られた資源をどのように利用してきたのか、生態的に非常に興味深い。本種も完全な陸封種であり、琉球列島の地史考える上で重要な種である。

生存に対する脅威： 森林伐採や河川開発、あるいは台風などの自然災害により、生息地が攪乱され、渡嘉敷島固有の本種が簡単に絶滅する可能性がある。また、ペット用に捕獲され売買される可能性があるが、生息地が非常に限られ、個体数も非常に少ないことから、そのような利用は厳に避けるべきである。

特記事項： 渡嘉敷島固有種。国内希少野生動物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー： Data Deficient(DD)。
原記載： Naruse, T., R. D. Segawa & T. Aotsuka, 2007. Two new species of freshwater crab (Crustacea: Decapoda: Potamidae) from Tokashiki Island, central Ryukyu Islands, Japan. Systematics and Biodiversity, 5(4): 409-415.

参考文献： 鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニー淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執筆者名： 成瀬 貫

和名： トカシキオオサワガニ

分類： 十脚目 短尾下目 サワガニ科

学名： *Geothelphusa levicervix* (Rathbun, 1898)

カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態： 最大甲幅 63 mm。大型個体では甲の中央前方が強く膨らむ。眼窩後方に稜線はなく、後方に向けてなだらかに膨らむ。額の幅は比較的狭い。前側縁はかすかな隆起で縁取られるが、顆粒は目立たない。雄の大型個体では片方の鉗部が非常に大きくなる。小型個体では、甲の膨らみが顕著でなく、額の幅がやや広く、前側縁の顆粒が顕著である。雄の第 1 腹肢は細長く、基節が中部より先端にかけて徐々に狭くなり、基節先端部内角は瘤状にならない。

近似種との区別： 形態的にオキナワオオサワガニに最も似るが、トカシキオオサワガニの雄の第1腹肢の基節が中部より先端にかけて徐々に狭くなり、基節先端部内角は瘤状にならないのに対し、オキナワオオサワガニでは基節の中部と先端縁の幅はほぼ同じであり、基節先端部内角が瘤状になることから、両種を区別できる。

分布の概要： 渡嘉敷島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： かつて、渡嘉敷・沖繩・久米・伊平屋島すべての集団が「オオサワガニ」1種とされてきたが、詳細な研究により各島の集団がそれぞれ独立種であることが分かり、渡嘉敷島の集団はトカシキオオサワガニと命名された。渡嘉敷以外の 3 島の種に加え、ミヤコサワガニも本種に比較的近縁な種である。

生態的特徴： 他のサワガニ類と同様、大きな卵を少なく産む大卵少産型の生活史である。

生息地の条件： 保水能力がある森林内の、上方を木々に覆われて暗がりになった、川幅が狭く流れが緩やかな沢や、湿った場所に見られる。

現在の生息状況： 本種が生息する渡嘉敷島はその面積がわずか 15.8 km² と非常に小さく、さらに生息環境が特殊な上に、生息密度も非常に小さい。

学術的意義・評価： サワガニ類のなかでも大型な種である。完全な陸封種であり、琉球列島の地史考える上で重要な種である。

生存に対する脅威： 森林伐採や河川開発、あるいは台風などの自然災害により、生息地が攪乱され、渡嘉敷島固有の本種が簡単に絶滅する可能性がある。また、ペット用に捕獲され売買される可能性があるが、生息地が非常に限られ、個体数も非常に少ないことから、そのような利用は厳に避けるべきである。

特記事項： 渡嘉敷島固有種。国内希少野生動物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー： Endangered(EN)。
原記載： Rathbun, M. J., 1898. Description of three new species of fresh-water crabs of the genus *Potamon*. Proceedings of the Biological Society of Washington, 12: 27-30, Pls.1, 2.

参考文献： Naruse, T., S. Shokita & P. K. L. Ng, 2006. A revision of the *Geothelphusa levicervix* species group (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Potamidae), with descriptions of three new species. Journal of Natural History, 40(13/14): 759-781.

鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニー淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執筆者名： 成瀬 貫

和名： ミヤコサワガニ

分類： 十脚目 短尾下目 サワガニ科

学 名 : *Geothelphusa miyakoensis* Shokita, Naruse & Fujii, 2002
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形 態 : 最大甲幅 37 mm。甲背面は滑らか。甲の前側縁はわずかに隆起で縁取られ、小さな顆粒が並ぶ。雄の第 1 腹肢は比較的細く、その先端節がやや外側に曲がる。

近似種との区別 : 形態的にイヘヤオオサワガニに最も似るが、ミヤコサワガニの雄の第 1 腹肢は比較的細く、その先端節がやや外側に曲がっているのに対し、イヘヤオオサワガニの雄の第 1 腹肢は比較的太く、その先端節が鋭く外側に曲がる点から、両種を区別できる。

分布の概要 : 宮古島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ミヤコサワガニは中琉球に分布するオオサワガニ類（トカシキオオサワガニ、オキナワオオサワガニ、クメジマオオサワガニ、イヘヤオオサワガニ）に近縁であることが示唆されている。

生態的特徴 : 湧水の中に入ることがよく観察されるが、湧水周辺の石の下や、水路の土手に穴を掘って潜んでいることも多い。主に夜行性であるが、薄暗い場所では日中も活動している。雑食性で、植物の茎や葉、落葉、落実、緑藻類、陸産貝類、昆虫類などを食べている。本種は、他のサワガニ類と同様に大卵小産で、直達（直接）発生型の繁殖様式を持つ。抱卵および抱稚ガニは 6 月～10 月に確認されており、卵数は 37～87 粒（藤田, 未発表）。

生息地の条件 : 湧水および周辺水路の水中、周辺陸地に穴を掘って生息する。

現在の生息状況 : 宮古島の 4 箇所の湧水地およびその周辺の水路にのみ生息しており、個体群の維持が危ぶまれる。また、ヤエヤママイシガメ（宮古島では外来種）による捕食を受けていることが明らかとなっている。

学術的意義・評価 : 本種を含むサワガニ類は陸水もしくは陸上のみで全生活史を全うし、海中では生息できない。宮古島は、陸上の大部分が琉球石灰岩で構成されていることから、かつて島が海面下に没し、由来の古い陸棲生物は一扫されたと考えられて来た。ミヤコサワガニの発見は、宮古島の地史および生物相の成立過程の再考を促す大きなきっかけとなった。

生存に対する脅威 : 生息地周辺の開墾や圃場整備ならびに農薬汚染、あるいは道路開発などの影響を受ける可能性がある。また上記のように外来種による捕食も脅威となっている。

特記事項 : 宮古島固有種。沖縄県指定天然記念物（2010 年）。国内希少野生動植物種（2017 年）。本種が生息する湧水のうちの 1 カ所は、本種の保全のために、地域行政（城辺町：当時）によって周辺の土地が購入されている。また、宮古島市では、現在、ミヤコサワガニ保護監視員を置き、捕食動物の駆除や監視などの保全対策を実施している。IUCN カテゴリー：Vulnerable(VU)。

原 記 載 : Shokita, S., T. Naruse, & H. Fujii, 2002. *Geothelphusa miyakoensis*, a new species of freshwater crab (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Potamidae) from Miyako Island, Southern Ryukyus, Japan. *Raffles Bulletin of Zoology*, 50(2): 443-448.

参 考 文 献 : 藤田喜久, 2007. 宮古島の湧水に生息する十脚甲殻類. 宮古島市総合博物館紀要, 11: 89-110.
 藤田喜久, 2009. 宮古島におけるミヤコサワガニの新たな生息地について. 宮古島市総合博物館紀要, 13: 71-76.
 藤田喜久・笹井隆秀, 2014. 宮古島に定着したヤエヤママイシガメによるミヤコサワガニの捕食. 沖縄生物学会誌, 52: 53-58.

執 筆 者 名 : 藤田喜久・成瀬 貫

和 名 : センカクサワガニ
 分 類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
 学 名 : *Geothelphusa shokitai* Shy & Ng, 1998
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形 態 : 最大甲幅約 30 mm。甲は比較的平たく、前側縁は筋状の隆起となり、顕著な顆粒に縁取られる。歩脚には主に前節に長い毛が生える。

近似種との区別 : ムラサキサワガニとカシヨクサワガニに似るが、両種は前側縁の顆粒が小さい点や、甲がより膨らむことから本種と容易に区別できる。

分布の概要 : 魚釣島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ミヤザキサワガニが台湾北部に、ムラサキサワガニとカシヨクサワガニがそれぞれ石垣島と西表島に分布する。

生態的特徴 : 他のサワガニ類と同様、大きな卵を少なく産む大卵少産型の生活史である。

学術的意義・評価 : センカクサワガニは、台湾北部のミヤザキサワガニと八重山のムラサキサワガニ・カシヨクサワガニに比較的近縁であると考えられ、南琉球・尖閣諸島・台湾の生物地理的つながりを示し得る大変貴重な種である。

生存に対する脅威 : 野生化しているヤギによる植生の減少が島の保水能力の低下を招き、土砂崩れなどを引き起こし、またサワガニ類が一般に必要とする、上方を植生に覆われた高温にならないきれいな水場が減少し、本種の生存が脅かされていると考えられる。

特記事項 : 魚釣島固有種。IUCN カテゴリー：Least Concern(LC)。

原 記 載 : Shy, J.-Y. & P. K. L. Ng, 1998. On two new species of *Geothelphusa* Stimpson, 1858 (Decapoda, Brachyura, Potamidae) from the Ryukyu Island, Japan. *Crustaceana*, 71(7): 778-784.

参 考 文 献 : 鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

<甲殻類>

執筆者名： 成瀬 貫

和名： ヒメユリサワガニ
分類： 十脚目 短尾下目 サワガニ科
学名： *Geothelphusa tenuimanus* (Miyake & Minei, 1965)
方言名： ターピサガイ (沖縄県今帰仁村)
カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態： 最大甲幅 38 mm。甲背面は滑らか。甲、鉗部共に平圧され、歩脚が著しく細長い。
近似種との区別： 形態的には、敢えて言えばオキナワオオサワガニやトカシキオオサワガニに近い。しかし、本種の第 2 胸脚全長が甲長に対し約 3 倍と長いのに対し、オオサワガニでは約 2.3 倍と短く、また本種の頭甲部が薄いのに対し、オオサワガニは背面が膨らむ事から、容易に区別できる。

分布の概要： 沖縄島。
生態的特徴： 繁殖期は 7~9 月。日本産サワガニ類のうちで最も大きな卵 (4.1~5.1 mm) を数少なく (約 25 粒) 産み、孵化した稚ガニも大きい。多くのサワガニ類は水中で稚ガニを孵化させるが、本種は直接陸上に子供を放し、ほとんど陸域に適応している。

生息地の条件： 洞穴から、石灰岩が発達する山地の上方が樹木などに覆われた、乾きすぎない場所の岩の下などに、局所的に生息する。

現在の生息状況： 生息地が局所的の上、生息密度は低い。もとより特異な環境に生息するが、山地開発等が生息地のさらなる分断を促している。沖縄島南部の洞窟を含む自然環境は戦時中に大変な攪乱を受け、それに続く農地開発や土地造成、あるいは洞窟の消失や生活雑排水の流入による環境の悪化により、本種の生息地は多く消失あるいは悪化し、大きく分断されていると考えられる。

学術的意義・評価： 水界を離れて陸上生活に最も適応しているサワガニ類の一種である。その適応の度合いはサワガニ類において非常に珍しく、東アジアにおいてはこの他に例がない。カニ類の水界から陸域への移行進化を考えるのに格好の研究材料である。またサワガニ類の化石は世界でも数例しか報告がないが、最近ヒメユリサワガニの化石が見つかり、その学術的意義は増すばかりである。

生存に対する脅威： 森林伐採、石灰採掘、農地開発、土地造成などがあげられる。また、ペット用に捕獲され売買されるケースがあるが、生息地の減少と個体数の少なさを鑑みてそのような利用は避けるべきである。

特記事項： 沖縄島固有種。国内希少野生動物種 (2017 年)。IUCN カテゴリー： Near Threatened (NT)。

原記載： Miyake, S. & H. Minei, 1965. A new fresh-water crab, *Potamon (Geothelphusa) tenuimanus* sp. nov. from Okinawa-jima, the Ryukyu Islands. Science Bulletin of the Faculty of Agriculture, Kyushu University, 21(4): 377-382, pl.21.

参考文献： 諸喜田茂充, 1996. 第 VII 部 甲殻類 10. ヒメユリサワガニ *Geothelphusa tenuimana* (Miyake & Chiu, 1965). “平成 7 年度希少水生生物保存対策試験事業 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (III)”, 社団法人 日本水産資源保護協会 (編), 464-466, pl. 10.
鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ-淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執筆者名： 成瀬 貫

和名： シオマネキ
分類： 十脚目 短尾下目 スナガニ科
学名： *Tubuca arcuata* (De Haan, 1835)
カテゴリー： 絶滅危惧 I A 類 (CR) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態： 最大甲幅 30 mm 程度。甲は台形状で、額域は狭い。眼後棘は小さく、斜め前方に向く。甲の前側縁には明瞭な稜線があり、後縁に達する。雄の大鉗脚の掌部は大きく、指節とほぼ同長。甲背面は、乳白色の甲前半に濃紫色の網目斑紋がある。

近似種との区別： 沖縄県下には 10 種のシオマネキ類 [シオマネキ、ヤエヤマシオマネキ、リュウキュウシオマネキ、ベニシオマネキ、シモフリシオマネキ、オキナワハクセンシオマネキ、ルリマダラシオマネキ、ヒメシオマネキ、ミナミヒメシオマネキ、*Paraleptuca splendida* (Stimpson, 1858)] が生息しているが、本種は、甲の前側縁が長いこと、前側縁には明瞭な稜線があり後縁に達すること、眼後棘が小さく斜め前方に向くこと、生時には甲背面に濃紫色の網目斑紋があることなどから他種と容易に区別することができる。

分布の概要： 沖縄県下における本種の分布は、沖縄島の中城湾沿岸と金武湾沿岸 (億首川河口) である。国内では他に、鹿児島県 (種子島)、熊本県、福岡県、佐賀県、宮崎県、長崎県、香川県、山口県、岡山県、高知県、徳島県、三重県、和歌山県、静岡県等で報告例がある。国外では、韓国、中国、台湾、香港、ベトナムに分布。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 本種の生息が確認されている中城湾には、本種の他に 8 種のシオマネキ類 (*P. splendida* を除く) が生息しているが、特にヤエヤマシオマネキは本種と混生することが知られている。

生態的特徴： 近年、沖縄島中城湾沿岸個体群の繁殖生態や生活史特性について詳細な研究が行われた。沖縄島個体群では、雌雄共に一年を通じて摂餌行動が観察されるが、摂餌行動を示す雌個体の割合は年間を通して雄個体の割合よりも高く、雄では雌に比べて摂餌以外の行動に時間を費やす。ウェービング行動は、10~11月を除くすべての月で観察されるが、6~8月と2月に特に高い頻度で観察される。

<甲殻類>

- 生態的特徴 : 生息場所は河川淡水域の主に中流域から上流域。抱卵個体は 2~11 月にかけて出現し、大卵 (1.07mm×0.67mm) を数少なく (平均 31 粒) 産む。孵化幼生は尾節以外成体に似る。幼生は海中では死に、河川だけで一生を過ごす河川性のエビである。
- 生息地の条件 : 河川の中・上流域の、上方を木々に覆われて暗がりになった環境に生息する。水量が多くゆるやかに流れる場所から、川幅が狭く水深も浅い沢のようなところまで生息している。
- 現在の生息状況 : 生息地周辺の開墾や圃場整備ならびに農薬汚染、あるいは道路開発などの影響を受ける可能性がある。
- 学術的意義・評価 : 本種は、小卵多産種から大卵少産種への分化、両側回遊性から河川陸封性への進化、および琉球列島と大陸との地史を考える際に貴重な種である。
- 生存に対する脅威 : 森林伐採などを伴うダム建設や山地・河川開発、道路建設、あるいは生息地周辺の開墾や圃場整備ならびに農薬汚染、などの影響を受ける可能性がある。また、本種の生息地に近縁種が外来種として放された場合には、競争や交雑が懸念される。
- 特記事項 : 石垣島固有種。IUCN カテゴリー : Least Concern(LC)。
- 原記載 : Fujino, T. & S. Shokita, 1975. Report on some new atyid shrimps (Crustacea, Decapoda, Caridea) from the Ryukyu Islands. Bulletin of Science & Engineering Division, University of Ryukyus. Mathematics & Natural Sciences, 18: 93-113.
- 参考文献 : 諸喜田茂充, 1979. 琉球列島の陸水エビ類の分布と種分化について - II. 琉球大学理学部紀要, 28: 193-278.
Shih, H.-T. & Y. Cai, 2007. Two New Species of the Land-Locked Freshwater Shrimps Genus, *Neocaridina* Kubo, 1938 (Decapoda: Caridea: Atyidae), from Taiwan, with Notes on Speciation on the Island. Zoological Studies, 46(6): 680-694.
- 執筆者名 : 諸喜田茂充*・成瀬 貫(追補) *前回改訂版 (2005) における諸喜田による記載内容を一部見直した。

和名 : ウリガーテナガエビ
分類 : 十脚目 コエビ下目 テナガエビ科
学名 : *Macrobrachium miyakoense* Komai & Fujita, 2005
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態 : 最大甲長 20 mm に達する。体色は白色またはやや赤みを帯びた白色を呈し、眼が小さく退化傾向を示している。額角は細長く、第 1 触角柄部の第 3 節を超えるが、触角鱗の先端には届かない。額角上縁に 10~13 歯 (内、眼窩後方の甲上に 4 歯)、下縁に 3~8 歯を備える。第 2 胸脚は左右ほぼ同形であるが、成体雄では左右で多さが著しく異なる。また、成熟個体では第 2 胸脚の表面に多数の小棘と剛毛が生じる。

近似種との区別 : 本種は、眼が小さく退化傾向を示すことで、日本産のテナガエビ属の他種とは容易に区別することができる。本種に最も形態的に類似する種は、インド洋のクリスマス島の洞窟地下水域に生息する *M. xmas* Fujita, Davie & Ng, 2015 であるが、*M. xmas* は、本種に比べて額角が細長いことと、眼がより小さいことで区別することができる。

分布の概要 : 本種の成体は、宮古島の 2 カ所の洞窟地下水域からのみ記録されている。ごく近年、沖縄島の塩川で採集された流下幼生の遺伝子解析により、本種が生息していることが明らかとなった。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本産の地下水性テナガエビ類は、本種のみである。

生態的特徴 : 繁殖や生活史などの詳しい生態は不明。近年、沖縄島の塩川から本種幼生 (ゾエア幼生) が 8 月に採集されていることから、少なくとも夏期には繁殖しているようである。

生息地の条件 : 塩分の混じる洞窟地下水域 (陸封潮溜り)。

現在の生息状況 : 本種の生息が確認されている洞窟は、宮古島市指定史跡となっており、洞窟そのものは比較的良好的な状態である。ただし、洞窟周辺ではリゾート開発などが進んでおり、今後注意を要する。また、沖縄島の塩川は、後背地が採石場になっているため、降雨時には赤土などの濁水が流れており、生息環境が悪化している。

学術的意義・評価 : テナガエビ属は約 250 種が含まれるが、地下水域に生息し、眼が退化的な形態的特徴を有する種は僅か 12 種程度であり、世界的にも珍しい。眼が退格的であるので、系統関係や暗環境への適応を調べるのによい研究素材と考えられる。

生存に対する脅威 : 洞窟や井戸の埋め立てや、周辺の開発、地下水の過剰なくみ上げや工事などによる水脈の分断や改変、農薬や生活排水等による地下水汚染などが本種の生存の大きな脅威となる。また、日本では唯一の地下水性のテナガエビ類であるため愛好家 (マニア) による捕獲も懸念される。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Data Deficient (DD)。

原記載 : Komai, T. & Y. Fujita, 2005. A new stygiobiont species of *Macrobrachium* (Crustacea: Decapoda: Caridea: Palaemonidae) from an anchialine cave on Miyako Island, Ryukyu Islands. Zootaxa, 1021: 13-27.

参考文献 : Fujita, Y., P. J. F. Davie & P. K. L. Ng, 2015. A new stygobitic prawn of the genus *Macrobrachium* Spence Bate, 1864, from anchialine caves in Christmas Island, Indian Ocean; with a rediagnosis of *M. miyakoense* Komai & Fujita, 2005 (Crustacea: Decapoda: Caridea: Palaemonidae). Raffles Bulletin of Zoology, 63: 610-625.

Weese, D., Y. Fujita & S. R. Santos, 2016. Looking for needles in a haystack: Molecular identification of anchialine crustacean larvae (Decapoda: Caridea) from the Shiokawa Spring, Okinawa Island, Ryukyu Islands, Japan. Journal of Crustacean Biology, 36: 61-67.

執筆者名 : 藤田喜久

- 和名 : イボテカニダマシ
 分類 : 十脚目 異尾下目 カニダマシ科
 学名 : *Novorostrum decorocrus* Osawa, 1998
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態 : 甲および胸脚は平たい。甲は台形状で、鰓域と胃域が溝や窪みで区分され、凹凸が顕著。額角は 3 葉からなる。鉗脚の掌部および歩脚の腕節と前節の前縁に、鈍形の歯（突起）を多数備える。歩脚は比較的短い。
- 近似種との区別 : 同属のインドカニダマシ *N. indicum* (De Man, 1893)、*N. phuketensis* Osawa, 1998、*N. securiger* (Melin, 1939) から、鉗脚の掌部および歩脚の腕節と前節の外縁に鈍形の歯（突起）を備えることにより容易に識別できる。インドカニダマシ属（新称）*Novorostrum* は、イソカニダマシ属 *Petrolisthes* に似ているが、頭胸甲の鰓域と胃域が溝や窪みで区分され、凹凸が顕著であること、額角が 3 葉に分かれ、中葉の側部が盛り上がること、眼柄が角膜より幅広いことによって、後者から容易に識別できる。
- 分布の概要 : 国内では西表島のみから確認されている。未報告であるが、国外ではインドネシアから確認されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属のインドカニダマシは、国内では千葉県、鹿児島県、沖縄県（沖縄島）から記録されており、国外ではインドネシア、フィリピン、台湾に分布する。*Novorostrum phuketensis* は、タイのブーケットのみから知られる。*Novorostrum securiger* は、国内では沖縄県（沖縄島）および小笠原諸島から、国外では台湾から記録されている。
- 生態的特徴 : 室内飼育下において、本種の初期生活史が明らかになっている。水温 28.0～28.5℃の条件下で、ゾエア 2 期（浮遊幼生期間）を経て、孵化後 12～14 日でメガロパ（デカポディド）幼生へと変態し、着底する。繁殖期やその他の生態については不明。
- 生息地の条件 : 潮間帯の砂泥岩の転石域。西表島では同所的に、アジアアカハラ *Petrolisthes asiaticus* (Leach, 1820) やミナミカニダマシ *P. hastatus* Stimpson, 1858 などのイソカニダマシ属の数種を確認できる。
- 現在の生息状況 : 現在の所、西表島の 2 か所のみで生息が確認されている。極めて局所的に分布し、生息範囲も狭い。本種が記載された 1998 年以降、生息海岸の 1 つは砂泥質の地盤で脆いことから、護岸工事が進められた。そのため海岸沿いは現在、コンクリート壁と敷石で固められ、生息場所の転石帯の範囲や本種の個体数は、以前に比べて減少している。
- 生存に対する脅威 : 護岸工事等の自然海岸の改変、破壊。転石域の消失。
- 特記事項 : イボテカニダマシが属する *Novorostrum* には標準和名がないため、本属の種の甲の特徴にちなみ、「ウネモチカニダマシ属」の新称を与える。
- 原記載 : Osawa, M., 1998. *Novorostrum*, new genus (Decapoda: Anomura: Porcellanidae), with descriptions of three related species. *Journal of Crustacean Biology*, 18(1): 161-176.
- 執筆者名 : Fujita, Y., & M. Osawa, 2005. Complete larval development of the rare porcellanid crab, *Novorostrum decorocrus* Osawa, 1998 (Crustacea: Decapoda: Anomura: Porcellanidae), reared under laboratory conditions. *Journal of Natural History*, 10: 763-778.
- Osawa, M. & T.-Y. Chan, 2010. Part III. Porcellanidae (Porcelain crabs). “Crustacean Fauna of Taiwan: Crab-like Anomurans (Hippoidea, Lithodoidea and Porcellanidae)”, T.-Y. Chan (ed.), National Taiwan Ocean University, Keelung, 67-181.
- 大澤正幸, 2012. イボテカニダマシ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 187.
- 執筆者名 : 大澤正幸・藤田喜久

- 和名 : ウチノミカニダマシ
 分類 : 十脚目 異尾下目 カニダマシ科
 学名 : *Polyonyx utinomii* Miyake, 1943
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態 : 甲および胸脚の背面はやや膨らみ、多数の細い横溝を持つ。甲は横長の楕円形。鉗脚の長節の前縁に丸みを帯びた大きな突出部を持つ。歩脚の指節の末端は二叉し、上の爪の方が下の爪より明らかに短い。
- 近似種との区別 : 国内で記録されているヤドリカニダマシ属 *Polyonyx* の種の中では、ヤドリカニダマシ *P. sinensis* Stimpson, 1858 に形態が類似しているが、甲および鉗脚の背面に多数の細い横溝を持つこと、そして鉗脚の長節の前縁に大きな突出部を持つことにより容易に識別できる。インドー西太平洋から報告されている同属種の中では、*P. boucheti* Osawa, 2007 に形態が最もよく似ているが、額角の中央葉の先端がより突出すること、そして鉗脚の長節の前縁の突出部が角ばらず、丸みを帯びていることにより識別できる。
- 分布の概要 : 国内では、静岡県、和歌山県、瀬戸内海、高知県、有明海、沖縄県から記録されている。ただし、沖縄県（久米島、西表島）の個体群は、別の未記載種の可能性がある。国外では、モルジブから記録されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ヤドリカニダマシは、国内では愛知県、和歌山県、瀬戸内海、高知県、有明海から、国外では中国沿岸および台湾から記録されている。一方、*P. boucheti* は南西太平洋のロイヤル

〈甲殻類〉

- 生態的特徴 : ティー諸島および西部インド洋のコモロ諸島から記録されている。砂泥底に埋るツバサゴカイ属 *Chaetopterus* の種の U 字型の棲管内に棲む。1 つの棲管内から雌雄ペアで見いだされることがしばしばある。一方ヤドリカニダマシは、ツバサゴカイ科のムギワラムシ *Mesochaetopterus japonicus* Fujiwara, 1934 の棲管内に棲む。国内では、ムギワラムシは関東から九州地方で記録されている一方、沖縄県内からの記録はない。
- 生息地の条件 : 砂泥底。潮間帯～潮下帯浅部。
- 個体数の動向 : 沖縄県での過去と現在の個体数の増減については不明。
- 現在の生息状況 : 沖縄県では、西表島の干潟において比較的多くの個体が確認されているが、宿主に対する共生率は低く、10%以下であると推察される。
- 生存に対する脅威 : 干潟の汚染、攪乱、埋め立て。宿主であるツバサゴカイ類の減少。
- 原 記 載 : Miyake, S., 1943. Studies on the crab-shaped Anomura of Nippon and adjacent waters. Journal of the Department of Agriculture, Kyushu Imperial University, 7: 49-158.
- 参 考 文 献 : 岡田祐也・邊見由美・伊谷 行, 2016. 高知県浦ノ内湾におけるヤドリカニダマシおよびウチノミカニダマシの記録. 四国自然科学研究, 9: 31-34.
- Osawa, M. & J. Poupin, 2013. First record of the porcellanid crab, *Polyonyx boucheti* (Crustacea: Decapoda: Anomura) from the Indian Ocean. Marine Biodiversity Records, 6, e72: 1-5.
- 西 浩孝・北河紗衣, 2016. 三河湾の干潟で絶滅危惧種のヤドリカニダマシ (十脚目: 異尾下目: カニダマシ科) を発見. 豊橋市自然史博物館研究報告, 26: 17-18.
- 渡部哲也, 2012. ヤドリカニダマシ、ウチノミカニダマシ (ウチノミヤドリカニダマシ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 188.
- 執 筆 者 名 : 大澤正幸

和 名 : トカシキミナミサワガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
学 名 : *Candidiopotamon tokashikense* Naruse, Segawa & Aotsuka, 2007
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形 態 : 最大甲幅 49 mm。甲は後方が狭くなる台形に近く、背面は凹凸が多く、あまり背方に膨らまない。眼窩外歯の後ろに 1 歯を有する。雄の第 1 腹肢は硬く、また太く、基節には外縁に大きな凹みがあり、また先端節の先端近くは瓶首状である。
- 近似種との区別 : 本種は、オキナワミナミサワガニとクメジマミナミサワガニに最も似る。本種のオキナワミナミサワガニからの識別点として、額縁の外縁が第 2 触角内肢の第 1 節に接触している点あげられる。また、クメジマミナミサワガニからは、第 2 歩脚前節外側上縁に棘の列があることから区別できる。トカシキミナミサワガニの小型個体は、同じく渡嘉敷島に生息するカクレサワガニに酷似するが、両種の識別点については、カクレサワガニの記述を参照のこと。
- 分布の概要 : 渡嘉敷島。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属種であるオキナワミナミサワガニとクメジマミナミサワガニがそれぞれ沖縄島北部と久米島に、*Candidiopotamon rathbunae* (De Man 1914) が台湾、*C. guangdongense* Dai, 1999 が中国広東省にそれぞれ分布している。
- 生態的特徴 : 他のサワガニ類と同様、大きな卵を少なく産む大卵少産型の生活史である。
- 生息地の条件 : 保水能力がある森林内の、上方を木々に覆われて暗がりになった、川幅が狭く流れが緩やかな沢に生息している。
- 現在の生息状況 : 本種が生息する渡嘉敷島はその面積がわずか 15.8 km² と非常に小さく、さらに生息環境が特殊である。
- 学術的意義・評価 : 面積わずか 15.8 km² の渡嘉敷島には 4 種のサワガニ類が生息しており、非常に限られた資源をどのように利用してきたのか、生態的に非常に興味深い。本種も完全な陸封種であり、琉球列島の地史考える上で重要な種である。
- 生存に対する脅威 : 森林伐採や河川開発、あるいは台風などの自然災害により、生息地が攪乱され、渡嘉敷島固有の本種が簡単に絶滅する可能性がある。また、ペット用に捕獲され売買される可能性があるが、生息地が非常に限られ、個体数も非常に少ないことから、そのような利用は厳に避けるべきである。
- 特 記 事 項 : 渡嘉敷島固有種。
- 原 記 載 : Naruse, T., R. D. Segawa & T. Aotsuka, 2007. Two new species of freshwater crab (Crustacea: Decapoda: Potamidae) from Tokashiki Island, central Ryukyu Islands, Japan. Systematics and Biodiversity, 5(4): 409-415.
- 参 考 文 献 : 鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.
- 執 筆 者 名 : 成瀬 貫

和 名 : ケラマサワガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
学 名 : *Geothelphusa amagui* Naruse & Shokita & Ng, 2009
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態 : 最大甲幅 32 mm。甲は扁平で、背面には皺が多く粗面を呈する。前側縁はやや張り出し、稜状になり、小さな顆粒が並ぶ。歩脚が太短い。雄の第1腹肢は細長く、先端節のみわずかに内側に曲がる。
- 近似種との区別 : 形態的にアラモトサワガニに最も似るが、ケラマサワガニの雄の第1腹肢の先端節が内側に曲がるのに対し、アラモトサワガニではわずかに外側に曲がる点より、両種を区別できる。
- 分布の概要 : 久米島、慶良間諸島（渡嘉敷島・阿嘉島・慶留間島・座間味島）。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : かつて、沖縄島、伊平屋島、久米島及び慶良間諸島すべての集団が「アラモトサワガニ」1種とされてきたが、詳細な研究により、アラモトサワガニは沖縄島と伊平屋島の集団に限定され、久米島と慶良間諸島の集団が独立種として記載された。
- 生態的特徴 : 他のサワガニ類と同様、大きな卵を少なく産む大卵少産型の生活史である。
- 生息地の条件 : 河川の上流部の、上方を木々に覆われて暗がりになった川の中にある石などの下に生息する。
- 現在の生息状況 : 慶良間諸島において本種が生息する河川最上部は、一般に水量が少なく、水不足の際などは本種の生息地も乾燥し、個体群が維持されるかが心配される。
- 学術的意義・評価 : 完全な陸封種であり、琉球列島の地史考える上で重要な種である。
- 生存に対する脅威 : 森林伐採や最上流部の水質や水量などの変化を伴うダム建設や山地・河川開発、道路建設などにより、生息地が攪乱される可能性がある。
- 特記事項 : 久米島・慶良間諸島（渡嘉敷島・阿嘉島・慶留間島・座間味島）固有種。
- 原記載 : Naruse, T. & S. Shokita, 2009. *Geothelphusa amagui*, a new species of the true freshwater crab (Crustacea, Decapoda, Potamidae) from Kerama Island Group and Kume Island, central Ryukyu Islands, Japan. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A (Zoology), Supplement 3*: 191-198.
- 参考文献 : 鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.
- 執筆者名 : 成瀬 貫

和名 : オキナワオオサワガニ
 分類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
 学名 : *Geothelphusa grandiovata* Naruse, Shokita & Ng, 2006
 カテゴリ : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態 : 最大甲幅 58 mm。大型個体では甲の中央前方が強く膨らむ。眼窩後方に稜線はなく、後方に向けてなだらかに膨らむ。額の幅は狭い。前側縁はかすかな隆起で縁取られるが、顆粒は目立たない。雄の大型個体では片方の鉗部が非常に大きくなる。小型個体では、甲の膨らみが顕著でなく、額の幅がやや広く、前側縁の顆粒が顕著である。雄の第1腹肢は細長く、基節の中部と先端縁の幅はほぼ同じであり、基節先端部内角が瘤状になる。
- 近似種との区別 : 形態的に似るトカシキオオサワガニとの区別については、トカシキオオサワガニの記述を参照のこと。オキナワオオサワガニの小型個体は、同じく沖縄島にも分布するサカモトサワガニの同様な大きさの個体に酷似する。しかし、オキナワオオサワガニの眼窩後方には稜線がないのに対し、サカモトサワガニでは顕著な稜があることから、両種を区別できる。
- 分布の概要 : 沖縄島。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : かつて、沖縄・渡嘉敷・久米・伊平屋島すべての集団が「オオサワガニ」1種とされてきたが、詳細な研究により各島の集団がそれぞれ独立種であることが分かり、沖縄島の集団はオキナワオオサワガニと命名された。沖縄以外の3島の種に加え、ミヤコサワガニも本種に比較的近縁な種である。
- 生態的特徴 : 生活史については不明な点が多い。河川周辺や河川からかなり離れた山地の湿った林床に巣穴を掘って生息している。巣穴は1 m以上に達することもあり、その底には水が浸出している。繁殖期は夏から初秋。大きな卵（平均 4.1×4.3 mm）を約 130 粒産む。
- 生息地の条件 : 河川の中～上流部の川岸近くや山地の湿地帯に生息。山地の、比較的最近土砂が崩れた様な場所に穴を掘って生息していることも多い。また大型個体の巣穴の底には通常水があるが、中型個体は全く乾燥した穴から発見されることがある。
- 現在の生息状況 : 沖縄島北部の場合、河川に砂防ダムや大型ダムが建設されたため、生息域がかなり縮小されている。また沖縄島南部の自然環境は戦時中に大変な攪乱を受け、それに続く農地開発や土地造成などにより、本種の生息地の多くは消失あるいは悪化し、大きく分断されている。元来生息密度は低く、生息域の減少に伴い、個体数が減少傾向にある。
- 学術的意義・評価 : サワガニ類のなかでも大型な種である。完全な陸封種であり、琉球列島の地史考える上で重要な種である。
- 生存に対する脅威 : 森林伐採などを伴うダム建設や山地・河川開発、道路建設などにより、生息地が攪乱される可能性がある。また、ペット用に捕獲され売買されるケースがあるが、生息地の減少と個体数の少なさを鑑みてそのような利用は避けるべきである。
- 特記事項 : 沖縄島固有種。IUCN カテゴリ : Least Concern(LC)。
- 原記載 : Naruse, T., S. Shokita & P. K. L. Ng, 2006. A revision of the *Geothelphusa levicervix* species group (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Potamidae), with descriptions of three new species. *Journal of Natural History*, 40(13/14): 759-781.
- 参考文献 : 儀間英美・諸喜田茂充, 1980. 沖縄島与那川におけるサワガニ類の分布. 沖縄生物学会誌, 18: 9-15.
 諸喜田茂充・成瀬 貫, 2002. 琉球列島のサワガニ類の分布と繁殖生態および起源論. “世界に拓く沖縄研究第4回沖縄研究国際シンポジウム”, 第4回沖縄研究国際シンポジウム実行委員会

(編), 第4回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会, 那覇, 719-727.
鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執筆者名 : 成瀬 貫

和名 : イヘヤオオサワガニ
分類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
学名 : *Geothelphusa iheya* Naruse, Shokita & Ng, 2006
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態 : 最大甲幅44 mm。大型個体では甲の中央前方が強く膨らむ。眼窩後方に稜線はなく、後方に向けてなだらかに膨らむ。額の幅は狭い。前側縁は稜状になり、顆粒列が並ぶ。雄の大型個体では片方の鉗部が非常に大きくなる。雄の第1腹肢は細長く、雄の第1腹肢は比較的太く、その先端節が鋭く外側に曲がる。

近似種との区別 : 形態的に似るミヤコサワガニとの区別については、ミヤコサワガニを参照のこと。

分布の概要 : 伊平屋島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : かつて、伊平屋・沖縄・渡嘉敷・久米島すべての集団が「オオサワガニ」1種とされてきたが、詳細な研究により各島の集団がそれぞれ独立種であることが分かり、伊平屋島の集団はイヘヤオオサワガニと命名された。伊平屋以外の3島の種に加え、ミヤコサワガニも本種に比較的近縁な種である。

生態的特徴 : 他のサワガニ類と同様、大きな卵を少なく産む大卵少産型の生活史である。イヘヤオオサワガニは、ミヤコサワガニと同様、他のオオサワガニ類よりも水への依存度が高く、水中、あるいは水辺で見つかることが多い。

生息地の条件 : 森林に覆われた河川の中・下流域や、平野部の湧水にもみられる。

現在の生息状況 : 海岸線から急に山が立ち上がっている伊平屋島でのイヘヤサワガニの分布は、水量が豊富な河川中・下流域に集中している。これは、標高100 m以上の上流は水量が少なく、またベンケイガニやクロベンケイガニ、オカガニなどと生息環境が競合する為、生息可能な環境が狭い範囲に限定されていることを示し、樹木の伐採、ヤギ等の放牧、土地開発が進めば、生育場所がすぐに消失してしまう可能性がある。

学術的意義・評価 : 完全な陸封種であり、琉球列島の地史考える上で重要な種である。

生存に対する脅威 : 森林伐採などを伴うダム建設や山地・河川開発、道路建設などにより、生息地が攪乱される可能性がある。また、ペット用に捕獲され売買される可能性があるが、生息地が限られ、個体数も少ないことから、そのような利用は厳に避けるべきである。

特記事項 : 伊平屋島固有種。IUCN カテゴリー : Least Concern(LC)。

原記載 : Naruse, T., S. Shokita & P. K. L. Ng, 2006. A revision of the *Geothelphusa levicervix* species group (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Potamidae), with descriptions of three new species. *Journal of Natural History*, 40(13/14): 759-781.

参考文献 : 鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執筆者名 : 成瀬 貫・長井 隆

和名 : クメジマオオサワガニ
分類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
学名 : *Geothelphusa kumejima* Naruse, Shokita & Ng, 2006
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態 : 最大甲幅51 mm。大型個体では甲の中央前方が強く膨らむ。眼窩後方に稜線はなく、後方に向けてなだらかに膨らむ。額の幅は狭い。前側縁は稜状になるが、顆粒を欠く。雄の大型個体では片方の鉗部が非常に大きくなる。雄の第1腹肢はやや太短く、基節基部外角に瘤状の隆起がある。

近似種との区別 : 形態的にトカシキオオサワガニやオキナワオオサワガニに似るが、クメジマオオサワガニは、雄の第1腹肢はより太短く、基節基部外角に瘤状の隆起があるのに対し、他の2種は第1腹肢がより細長く、基節基部外角の瘤状の隆起を欠くことから、クメジマオオサワガニを区別できる。

分布の概要 : 久米島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : かつて、久米島・渡嘉敷・沖縄・伊平屋すべての集団が「オオサワガニ」1種とされてきたが、詳細な研究により各島の集団がそれぞれ独立種であることが分かり、久米島の集団はクメジマオオサワガニと命名された。久米島以外の3島の種に加え、ミヤコサワガニも本種に比較的近縁な種である。

生態的特徴 : 他のサワガニ類と同様、大きな卵を少なく産む大卵少産型の生活史である。

生息地の条件 : 河川の中～上流部の川岸近くや山地の湿地帯に生息。山地の、比較的最近土砂が崩れた様な場所に穴を掘って生息していることも多い。

現在の生息状況 : 生息地周辺の開墾や圃場整備ならびに農薬汚染、あるいは道路開発などの影響を受ける可能性がある。

学術的意義・評価 : 完全な陸封種であり、琉球列島の地史考える上で重要な種である。

生存に対する脅威 : 森林伐採などを伴うダム建設や山地・河川開発、道路建設などにより、生息地が攪乱される可能性がある。また、ペット用に捕獲され売買される可能性があるが、生息地が限られ、個体数も少ないことから、そのような利用は厳に避けるべきである。

特記事項 : 久米島固有種。IUCN カテゴリー : Least Concern(LC)。
 原記載 : Naruse, T., S. Shokita & P. K. L. Ng. 2006. A revision of the *Geothelphusa levicervix* species group (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Potamidae), with descriptions of three new species. *Journal of Natural History*, 40(13/14): 759-781.

参考文献 : 鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニー淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執筆者名 : 成瀬 貫

和名 : ヤエヤマヤマガニ
 分類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
 学名 : *Ryukyum yaeyamense* (Minei, 1973)
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 最大甲幅 45 mm。甲全体に厚みがある。眼窩外歯後方の歯が顕著で、眼窩外歯と共に前方に向けて尖る。甲は鶯色～茶色で、歩脚は小豆色をしている。

近似種との区別 : 敢えて言えば、眼窩外歯後方に歯を有するミナミサワガニ類に似るが、ヤエヤマヤマガニの甲は明らかに厚いことから容易に区別できる。

分布の概要 : 石垣島・西表島。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁な種は全く分かっていない。

生態的特徴 : 他のサワガニ類と同様、大きな卵を少なく産む大卵少産型の生活史である。
 生息地の条件 : 成体は、河川の中～上流部の川岸から陸上部にかけて生息する。森林内の陸上で活発に行動し、夏の夜間には林道などでもよく見られる。巣穴は林内の細い沢の土手や湿地によく見られ、穴の底には水が浸出している

現在の生息状況 : 生息地周辺の開墾や圃場整備ならびに農薬汚染、あるいは山地・河川開発などの影響を受ける可能性がある。

学術的意義・評価 : 1 属 1 種のサワガニ類で、石垣・西表島の固有種である。近縁な種はおろか属も分からず、東アジアのサワガニ類の分化を考えるうえで興味深い種である。

生存に対する脅威 : 森林伐採などを伴う山地・河川開発、道路建設、あるいは山道の途中にある生息環境の人による踏みつけなどにより、生息地が攪乱される可能性がある。また、ペット用に捕獲され売買される可能性があるが、生息地が限られ、個体数も少ないことから、そのような利用は厳に避けるべきである。

特記事項 : 石垣・西表島固有種。IUCN カテゴリー : Least Concern(LC)。
 原記載 : Minei, H., 1973. Potamoid crabs of the Ryukyu Islands, with descriptions of five new species (Crustacea, Decapoda, Potamoidea). *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 17: 203-226.

参考文献 : Ng, P. K. L. & S. Shokita, 1995. *Ryukyum*, a new genus of terrestrial crab from the Ryukyu Islands (Brachyura: Potamidae). *Crustacean Research*, 24: 1-7.
 鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニー淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執筆者名 : 成瀬 貫

和名 : ドウクツベンケイガニ
 分類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
 学名 : *Karstarma boholano* (Ng, 2002)
 カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

形態 : 最大甲幅 20 mm 前後。甲は後方に向けてやや広がり、台形状を呈する。眼窩外歯は前方に三角形状に張り出し、前鰓縁の第 1 歯との間には V 字状の深い切れ込みがある。歩脚が極めて長く、第 3 歩脚 (第 4 胸脚) の底節基部から指節先端までの長さが最大甲幅の 2.6~3.0 倍に達する。第 1~3 歩脚の長節の末縁には背棘を欠く。第 2-3 歩脚の底節には顕著な剛毛の束が生じる。

近似種との区別 : 国内のベンケイガニ類の中ではアシナガベンケイガニに似るが、本種に比べて甲が後方に向けて著しく広がることで容易に区別することができる。また、アシナガベンケイガニはマングローブ域に生息する。

分布の概要 : 国内では、宮古諸島の多良間島、八重山諸島の石垣島・波照間島・与那国島 (藤田, 印刷中) から記録がある。国外ではフィリピン (ボホール州パンラオ島: タイプ産地) から記録されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ドウクツベンケイガニ属には 15 種が知られるが、国内からはドウクツベンケイガニのみが記録されている。

生態的特徴 : 内部に地下水域 (陸封潮溜り) が存在する石灰岩洞窟の陸域に生息し、洞窟内の壁面の窪みや転石下などに潜んでいる。夜間には洞窟入り口周辺にも出現する。洞窟壁面をはさみ脚で擦り採って口に運ぶ行動が観察されており、壁面に生育する地衣類や藻類を食べていると考えられている。繁殖などの詳しい生態は分かっていないが、7 月に抱卵個体が得られていることから、繁殖期は夏期であると推測される。

<甲殻類>

- 生息地の条件 : 内部に地下水域(陸封潮溜り)が存在する石灰岩洞窟。
現在の生息状況 : 多良間島および石垣島での生息状況は比較的安定している。
学術的意義・評価 : カニ類の暗所適応を研究するのに良い材料と考えられる。
生存に対する脅威 : 洞窟周辺の土地改良や宅地開発など、洞窟環境の消失や悪化は、本種の生存の大きな脅威となる。
原 記 載 : Ng, P. K. L., 2002. New species of cavernicolous crabs of the genus *Sesarmoides* from the Western Pacific, with a key to the genus (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Sesarmidae). Raffles Bulletin of Zoology, 50: 419-436.
参 考 文 献 : Davie, P. J. F. & P. K. L. Ng, 2007. A new genus for cave-dwelling crabs previously assigned to *Sesarmoides* (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Sesarmidae). Raffles Bulletin of Zoology, Supplement, 16: 227-231.
Naruse, T., H. Nakai & H. Tamura, 2005. A new record of cavernicolous crab *Sesarmoides boholano* Ng, 2002 (Brachyura, Sesarmidae) from Ishigaki Island, Southern Ryukyu Islands, Japan. Biogeography, 7: 79-84.
吉郷英範・田村常雄, 2008. 八重山諸島波照間島から得られた洞穴性カニ類. 比婆科学, 228: 28-29.
藤田喜久・成瀬 貫, 2016. 多良間島初記録のドウクツベンケイガニ. Fauna Ryukyuna, 28: 23-27.
藤田喜久(印刷中). 八重山諸島与那国島における洞窟性十脚目甲殻類 2 種の新産地記録. Fauna Ryukyuna.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : カスリベンケイガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
学 名 : *Lithoselatum pulchrum* Schubart, Liu & Ng, 2009
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形 態 : 最大甲幅約27 mm。甲のは台形で、歩脚は長く、またその長節は薄く幅広い。雌雄で甲の形に大きな違いがあり、雄は幅の狭い円形に近く、雌は幅の広い楕円形である。甲の背面暗赤褐色で多数の淡黄色の小斑紋を持つ。

近似種との区別 : 本種は、同属の *L. kusu* Schubart, Liu & Ng, 2009 と *L. tantichodoki* Rueangrit & Ng, 2009 から、甲がより台形である点と歩脚の長さの違いにより区別することができる。

分布の概要 : 西表島、台湾屏東。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : シンガポールとボルネオ島サバ州周辺の島々より *L. kusu* が、タイのタイ湾側より *L. tantichodoki* がそれぞれ知られている。

生態的特徴 : 本種の卵はベンケイガニ科としては比較的大きく、浮遊幼生期が短縮されていることから、各個体群の分布拡大能力は低い可能性がある。

生息地の条件 : 内湾からやや波あたりのよい場所の、満潮時に波で洗われるような場所にある岩の下に潜んでいる。

現在の生息状況 : 生息場所が非常に限定されており、また分布拡大能力も低いと考えられることから、環境の改変により容易に絶滅する可能性がある。

生存に対する脅威 : 生息環境の護岸整備や海岸開発。

特 記 事 項 : 西表島と台湾の固有種。

原 記 載 : Schubart, C. D., H.-C. Liu & P. K. L. Ng, 2009. Revision of *Selatum* Serène & Soh, 1970 (Crustacea: Brachyura: Sesarmidae), with description of a new genus and two new species. Zootaxa, 2154: 1-29.

参 考 文 献 : 大澤正幸・長井 隆, 2012. カスリベンケイガニ, “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野市, 196.

Rueangrit, P. & P. K. L. Ng, 2009. *Lithoselatum tantichodoki*, a new species of intertidal crab (Crustacea: Brachyura: Sesarmidae) from southern Thailand. Zootaxa, 2291: 24-34.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

和 名 : ドウクツモクズガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 モクズガニ科
学 名 : *Orcovita miruku* Naruse & Tamura, 2006
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

形 態 : 甲幅 20 mm 程度。体色は白色あるいは白みを帯びた薄褐色を呈し、眼はやや小さい。甲の前側縁にはやや丸みを帯びたほぼ同形の 2 歯を備える(眼後棘を除く)。鉗脚の不動指と可動指の外面に長い軟毛の束がある。歩脚は細長い。

近似種との区別 : ドウクツモクズガニ属には 10 種が知られるが、本種に最も近縁な種は、インド洋のクリスマス島の洞窟地下水域に生息する *O. orchardorum* Davie & Ng, 2012 である。本種は、前側縁の 2 歯がやや丸みを帯びたほぼ同形であること (*O. orchardorum* は前方の歯がより発達する)、雄の尾節がやや長いこと(本種は尾節の長さが第 6 腹節の 1.2 倍であるのに対し、*O. orchardorum* は 1.1 倍である)などから *O. orchardorum* と区別することができる。

分布の概要 : 八重山諸島の石垣島および波照間島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ドウクツモクズガニ属には 10 種が知られるが、国内には本種のみが分布する。

生態的特徴 : ドウクツモクズガニ属の既知種は、そのすべてが洞窟地下水域から記録されている。本種の繁殖や

生活史については良く分かっていない。
生息地の条件 : 塩分の混じる洞窟地下水域 (陸封潮溜り)。
学術的意義・評価 : カニ類の暗所適応を研究するのに良い材料と考えられる。
生存に対する脅威 : 洞窟そのものや周辺の開発、地下水の過剰なくみ上げや工事などによる水脈の分断や改変、農薬や生活排水等による地下水汚染などが本種の生存の大きな脅威となる。また、愛好家 (マニア) による捕獲も懸念される。
特記事項 : ドウクツモクズガニが属する *Orcovita* には標準和名がないため、「ドウクツモクズガニ属」の新称を与える。近年、沖縄島の海底洞窟の最奥部の塩分の低い環境 (アンキアライン環境) から本属の別種と思われる個体が採集され、現在、分類学的研究が進められている。
原記載 : Naruse, T. & H. Tamura, 2006. A first record of anchialine crab of the genus *Orcovita* Ng & Tomascik, 1994 (Decapoda: Brachyura: Varunidae) from Japan, with description of the species. *Limnology*, 7(3): 147-151.
参考文献 : 吉郷英範・田村常雄, 2008. 八重山諸島波照間島から得られた洞穴性カニ類. *比婆科学*, 228: 28-29.
 Davie, P. J. F. & P. K. L. Ng, 2012. Two new species of *Orcovita* (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Varunidae) from anchialine caves on Christmas Island, eastern Indian Ocean. *Raffles Bulletin of Zoology*, 60: 57-70.

執筆者名 : 藤田喜久

和名 : イリオモテヨコナガピンノ
分類 : 十脚目 短尾下目 カクレガニ科
学名 : *Tetrias* sp.
カテゴリー : 絶滅危惧 I B 類 (EN) **環境省カテゴリー** : 情報不足 (DD)

形態 : 甲幅約15.0 mmの小型種。甲の中央を除くほぼ全身が長い毛で覆われている。雌雄で甲の形に大きな違いがあり、雄は幅の狭い円形に近く、雌は幅の広い楕円形である。
近似種との区別 : 本種は、同属のミナミヨコナガピンノ *Tetrias fischerii* に似る。しかし、本種はミナミヨコナガピンノより、雄の鉗部外面の顆粒がよりまばらであり、雌雄ともに歩脚がより細いことより区別できる。
分布の概要 : 西表島。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本州の各地より同属のミナミヨコナガピンノが報告されている。
生態的特徴 : ツバサゴカイ類の棲管内に生息する。小さな卵を多く持つ小卵多産型であることから、生活史に浮遊幼生期を有する小卵多産型の生活史であると考えられる。
生息地の条件 : 河口部に形成された湾の奥の潮間帯では、泥質の干潟に生息するツバサゴカイ類の棲管内に見られる。生息地は、ウミシヨウプなどの海草類が繁茂していたり、その周辺であることが多い。また、泥質や、やや砂質の潮下帯に生息しているツバサゴカイの棲管内からもよく見つかる。
現在の生息状況 : 宿種と共に非常に限られた場所に生息しており、未だ西表島からしか報告のない未記載種である。しかし、同様な環境は石垣島にも散見されることから、生息地はさらに発見される可能性がある。
学術的意義・評価 : 棲管を形成するゴカイ類との共生関係の生態・進化を研究する上で興味深いグループである。また、特殊な環境に生息することから、本種のような未記載種が多く存在することが考えられる。
生存に対する脅威 : 本種や宿主が生息する内湾干潟の埋立や海岸開発等により大きな影響を受けてきははずである。
参考文献 : 成瀬 貫, 2012. イリオモテヨコナガピンノ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 219.

執筆者名 : 成瀬 貫

3) 絶滅危惧 II 類 (VU)

和名 : ドウクツヌマエビ
分類 : 十脚目 コエビ下目 ヌマエビ科
学名 : *Antecaridina lauensis* (Edmondson, 1935)
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態 : 体長 15 mm 内外の小型のヌマエビ。額角は短く上下縁に歯がない。目は小さく退化的。5 対の歩脚に外肢がある。尾節末端縁に 4 対の棘があり、背面の後半分に 2 対の棘がある。生時は普通赤色を呈する。
近似種との区別 : 一属一種で、歩脚に外肢があるので、ヌマエビ科の他種と容易に区別できる。
分布の概要 : 国内では大東諸島の南大東島、沖縄諸島の沖縄島、宮古諸島の宮古島、伊良部島、多良間島、水納島 (藤田, 準備中)、八重山諸島の石垣島、黒島、与那国島 (藤田, 準備中) から記録がある。国外ではフィジー諸島 (模式産地)、ハワイ諸島、フィリピン (マクタン島)、ソロモン諸島、クリスマス島、Europa Islands (マダガスカルの西)、Entedebir Island (紅海の南) に不連続的に分布。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 一属一種であり、近縁種は発見されていない。
生態的特徴 : 繁殖や生活史などの詳しい生態は不明。天然や飼育条件下で抱卵個体が確認されておらず、生活史

〈甲殻類〉

- が不明である。実験室で6年間飼育しても産卵が確認されていない。
- 生息地の条件 : 洞窟地下水域や陸封塩溜りに生息し、薄暗い所や暗闇を好む。
- 現在の生息状況 : 南大東島、多良間島、石垣島の洞窟地下水域には本種を比較的数多く見ることが出来る。他所での個体数は少ない。
- 学術的意義・評価 : ヌマエビ類の中でも原始的な形質を有しており、系統進化を考えるのによい研究素材である。また、暗所での眼の退化現象を考えるのによい研究材料でもある。
- 生存に対する脅威 : 洞窟や井戸の埋め立てや、周辺の開発、地下水の過剰なくみ上げや工事などによる水脈の分断や改変、農薬や生活排水等による地下水汚染などが本種の生存の大きな脅威となる。また、洞窟内の水は農業用に散水のために揚水されることもあり、吸い上げられる可能性も考えられる。
- 特記事項 : 最近の調査によって、沖縄県内の各所から新たに本種の分布が確認されている。一方、集団遺伝学的研究の結果によれば、沖縄の個体群には少なくとも2系統が見られるようであり、今後、本種の保護・保全を考える上で注意する必要がある。
- 原 記 載 : Edmondson, C. H., 1935. Atyidae of southern Polynesia. Occasional papers of Bernice P. Bishop Museum, 1 (3): 1-9.
- 参 考 文 献 : Weese, D. A., Y. Fujita & S. R. Santos, 2013. Multiple colonizations lead to cryptic biodiversity in an island ecosystem: Comparative phylogeography of anchialine shrimp species in the Ryukyu Archipelago, Japan. The Biological Bulletin, 225: 24-41.
藤田喜久・小林大純, 2016. 沖縄島における地下水性コエビ類2種の新産地記録. Fauna Ryukyuana, 28: 67-69.
藤田喜久 (印刷中). 八重山諸島与那国島における洞窟性十脚目甲殻類 2 種の新産地記録. Fauna Ryukyuana.
藤田喜久 (印刷中). 宮古諸島水納島の十脚甲殻類相. 宮古島市総合博物館紀要, 21.
- 執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : チカヌマエビ
分 類 : 十脚目 コエビ下目 ヌマエビ科
学 名 : *Halocaridinides trigonophthalma* (Fujino & Shokita, 1975)
カ テ ゴ リ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形 態 : 体長 15 mm 程度の小型種。頭胸甲は長細く、前側角は丸みを帯びる。額角は短く、その先端は眼の先端を越えない。眼は先細り、角膜部が非常に小さい。胸脚には外肢を欠く。
- 近似種との区別 : 本種は、額角が短く、その先端は眼の先端を越えないことから、国内に生息する地下水性のヌマエビ類と容易に区別することができる。
- 分布の概要 : 国内では、沖縄島、宮古諸島の宮古島、伊良部島、多良間島、水納島 (藤田, 準備中)、八重山諸島の石垣島、竹富島、鳩間島から記録されている。国外では、フィリピン、パラオ諸島アングウル島、マリアナ諸島グアム島から報告がある。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種と同属の *H. fowleri* (Gordon, 1968) がザンジバルに分布する。
- 生態的特徴 : 本種の繁殖や生活史については不明な点が多い。近年、石垣島の洞窟内の陸封潮溜りから本種の抱卵個体が採集され、ゾエア幼生の孵化に成功した。本種のゾエア幼生は両側回遊性種の形態に類似していることも分かっており (藤田, 準備中)、諸喜田・西島 (1976) が本種幼生として報告したゾエア形態とは大きく異なっている。
- 生息地の条件 : 洞窟地下水域や陸封塩溜りに生息し、薄暗い所や暗闇を好む。
- 現在の生息状況 : 宮古島や多良間島では本種が高密度に生息することが知られている。一方、鳩間島の生息地の洞窟は土砂の堆積により、地下水が滲み出さない状態になっている。
- 学術的意義・評価 : 眼が退化的であるので、系統関係や暗環境への適応を調べるのによい研究素材と考えられる。
- 生存に対する脅威 : 洞窟や井戸の埋め立てや、周辺の開発、地下水の過剰なくみ上げや工事などによる水脈の分断や改変、農薬や生活排水等による地下水汚染などが本種の生存の大きな脅威となる。また、洞窟内の水は農業用に散水のために揚水されることもあり、吸い上げられる可能性も考えられる。
- 特記事項 : 最近の調査によって、沖縄県内の各所から新たに本種の分布が確認されている。一方、集団遺伝学的研究の結果によれば、沖縄の個体群には少なくとも3系統が見られるようであり、今後、本種の保護・保全を考える上で注意する必要がある。
- 原 記 載 : Fujino, T. & S. Shokita, 1975. Report on some new Atyid shrimps (Crustacea, Decapoda, Caridea) from the Ryukyu Islands. Bulletin of Science & Engineering Division, University of Ryukyus. Mathematics & Natural Sciences, 18: 93-113.
- 参 考 文 献 : 諸喜田茂充・西島信昇, 1976. 塩川の水生生物と塩水湧出機構. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第6集, 塩川動態調査報告Ⅱ. 沖縄県教育委員会, 沖縄, 68-91.
Weese, D. A., Y. Fujita & S. R. Santos, 2013. Multiple colonizations lead to cryptic biodiversity in an island ecosystem: Comparative phylogeography of anchialine shrimp species in the Ryukyu Archipelago, Japan. The Biological Bulletin, 225: 24-41.
藤田喜久・小林大純, 2016. 沖縄島における地下水性コエビ類2種の新産地記録. Fauna Ryukyuana, 28: 67-69.
藤田喜久 (印刷中). 宮古諸島水納島の十脚甲殻類相. 宮古島市総合博物館紀要, 21.
- 執 筆 者 名 : 藤田喜久

和名：イリオモテヌマエビ
 分類：十脚目 コエビ下目 ヌマエビ科
 学名：Neocaridina iriomotensis Naruse, Shokita & Cai, 2006
 方言名：サイナマ (石垣島/総称)
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態：全長 20 mm 程の小さいエビ。額角は第 1 触角柄末端に達する。額角の上縁はほとんどの個体が歯を持たず、下縁には 0~2 歯を有す。

近似種との区別：琉球列島に分布するカワリヌマエビ属 *Neocaridina* は、イリオモテヌマエビとインガキヌマエビの 2 種である。イリオモテヌマエビはインガキヌマエビより、ほとんどの個体で額角上縁に歯を欠くことから、容易に区別できる。

分布の概要：西表島。

近縁な種及び群との分布状況の比較：同属種であるインガキヌマエビが石垣島に、ミナミヌマエビ *N. denticulata denticulata* が西日本に、また台湾にはシナヌマエビ *N. d. sinensis* (Kemp, 1918)、*N. saccam* Shih & Cai, 2007 と *N. ketagalan* Shih & Cai, 2007 が分布する。本属の種は極東ロシア、韓国、中国、台湾、ベトナムに分布しており、そのうち中国に最も多くの種が分布するが、その分類体系には議論の余地があり (Shih & Cai, 2007)、解決を見ていない。

生態的特徴：大きな卵を少なく産む大卵少産型であり、卵から直接稚エビが産まれる直達発生型の生活史を有す。

生息地の条件：河川上流域の、水量が多いゆるやかな場所から、川幅が狭く水深も浅い沢のようなどころまで生息している。

学術的意義・評価：本種は、小卵多産種から大卵少産種への分化、両側回遊性から河川陸封性への進化、および琉球列島と大陸との地史を考える際に貴重な種である。

生存に対する脅威：河川上流域の非常に限られた清流のみ生息しており、人間活動による土砂の流出や汚水の流入に非常に弱いようである。

特記事項：西表島固有種。IUCN カテゴリー：Least Concern(LC)。

原記載：Naruse, T., S. Shokita & Y. Cai, 2006. *Neocaridina iriomotensis*, a new species of land-locked freshwater shrimp (Crustacea: Decapoda: Atyidae) from Iriomote Island, southern Ryukyus, Japan. Proceedings of the Biological Society of Washington, 119(1): 25-31.

参考文献：今井秀行・成瀬 貫・柏木美美・諸喜田茂充, 2004. アイソザイム分析による石垣島と西表島産カワリヌマエビ類の遺伝的差異. 第 42 回日本甲殻学会東京海洋大学大会 講演要旨集, 57.

Shih, H.-T. & Y. Cai, 2007. Two New Species of the Land-Locked Freshwater Shrimps Genus, *Neocaridina* Kubo, 1938 (Decapoda: Caridea: Atyidae), from Taiwan, with Notes on Speciation on the Island. Zoological Studies, 46(6): 680-694.

鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニー淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執筆者名：成瀬 貫*・諸喜田茂充*・成瀬 貫(追補) *前回改訂版 (2005) における成瀬・諸喜田による記載内容を一部見直した。

和名：ヒラアシテナガエビ
 分類：十脚目 コエビ下目 テナガエビ科
 学名：*Macrobrachium latidactylus* (Thallwitz, 1891)
 方言名：タナゲー・タナゲー(沖縄/総称)、イッピル(石垣島)
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態：頭胸甲長 25 mm に達する。額角はほぼ水平で上縁がわずかに盛り上がり、先端は第 2 触角鱗に達しない。額角上縁に 13~16 歯 (うち頭胸甲上に 3~5 歯)、下縁に 2~5 歯を有する。雄の第 2 鉗脚 (第 2 胸脚) は左右で大きさ、形態が著しく異なる。大鉗脚には小棘が粗生し、鉗部は扁平で掌部及び不動指は幅広い。小鉗脚は平滑で、指部に長い剛毛が密生する。体色は淡褐色で、多数の濃褐色斑が散在する。大鉗脚掌部上面には暗褐色の縦帯がある。

分布の概要：国内では沖縄島、石垣島、西表島、国外ではインド洋から西太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布する。

生態的特徴：小卵多産種で 9 ヶエア期とメガロパ期 (デカポディド期) を経て稚エビになる。

生息地の条件：河川下流の感潮域からその上部に生息し、流れの緩やかな場所を好む。オオテナガエビやザラテナガエビ等と同所的にみられる。

現在の生息状況：個体数は少なく、採集事例のある河川においても確認は難しい。

生存に対する脅威：河川改修や浚渫、赤土流入などによる生息環境の改変・消失、人工あるいは自然的原因による河口閉塞とそれに伴う回遊阻害が生存の脅威となる。

特記事項：IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

原記載：Thallwitz, J., 1891. Ueber einige neue indo-pacifische Crustaceen (vorläufige mittheilung). Zoologischer Anzeiger, 14: 96-103.

参考文献：Chace, F. A. Jr. & A. J. Bruce, 1993. The Caridean shrimps (Crustacea: Decapoda) of the Albatross Philippine expedition 1907-1910. Part 6: Superfamily Palaemonoidea. Smithsonian Contributions to Zoology, 543: i-vii, 1-152, Figs. 1-23.

諸喜田茂充, 2014. ヒラアシテナガエビ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—7 その他無脊椎動物 (クモ形類・甲殻類等)”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 61.

執筆者名：佐伯智史

和名：マガタマテナガエビ
分類：十脚目 コエビ下目 テナガエビ科
学名：Macrobrachium lepidactyloides (De Man, 1892)
方言名：タナガー・タナゲー(沖縄島／総称)
カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

形態：頭胸甲長 25 mm 以上になる。額角はやや下方に湾曲し、先端は第 1 触角柄部を超えない。額角上縁には 11～13 歯（うち頭胸甲上に 4～7 歯）があり、最後尾の歯は頭胸甲の中間よりも前方に位置する。額角下縁には 2～3 歯がある。雄の第 2 鉗脚（第 2 胸脚）は左右で大きさ、形態が著しく異なる。大鉗脚の掌部は強く縦扁し、長さは幅の 2 倍以下、指部は細長く、掌部よりも長い。大型の雄では鉗部の形状は勾玉状となる。小鉗脚の指部は掌部よりも長く、指を閉じても両指間には大きな隙間があり、長い剛毛が密生する。ただし、第 2 鉗脚が脱落した個体は、脱皮後に左右鉗脚の形態が著しく変わるため、注意が必要である。生時の色彩は緑褐色で、頭胸甲側面には暗褐色の 3 本の縦線が入る。腹節側面には暗褐色の縦線が 1 本入り、頭胸甲側面最上部の縦線とつながる。

近似種との区別：本種は他の日本産テナガエビ類ではネッタテナガエビ及びカスリテナガエビに似るが、生時では腹節側面に入る 1 本の暗褐色縦線により、これら 2 種と容易に区別できる。ネッタテナガエビは頭胸甲側面に暗赤褐色の 3 本の縦線が入ること、カスリテナガエビは頭胸甲及び腹節に金白色や暗褐色の斑が不規則に散在し、縞模様を呈するのが特徴である。

分布の概要：国内では沖縄島、国外では台湾、フィリピン、インドネシア、フィジーに分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：ネッタテナガエビは、琉球列島、台湾、フィリピン、東インドネシア、パラオ、ニューギニア、バヌアツ、ニューカレドニア、ツツナ、フィジー、サモアに、カスリテナガエビは沖縄島、石垣島、フィリピンに分布する。

生態的特徴：小卵多産種。

生息地の条件：河川中流域に生息する。急流を好み、石の多い早瀬でネッタテナガエビ、カスリテナガエビ、ツブテナガエビ、ヒラテナガエビ、オニヌマエビなどと同所的にみられる。

現在の生息状況：個体数は少ない。沖縄島では北部地域の 4 河川で確認されているが、今後の調査により確認河川は増える可能性がある。このうちの 1 河川においては、例年、雌雄の大型個体（抱卵雌含む）が確認されており、再生産が行われている可能性がある。

生存に対する脅威：河川改修や浚渫、赤土流入などによる生息環境の改変・消失、人工あるいは自然的原因による河口閉塞とそれに伴う回遊阻害が生存の脅威となる。

特記事項：諸喜田ら（2003）は、石垣島より採集された個体を「*M. lepidactyloides*」とし、「カスリテナガエビ」の和名を付して報告した。その後、沖縄島より真の「*M. lepidactyloides*」が得られ、諸喜田ら（2003）の石垣島産個体は未記載種である可能性が高いことが示され、和名「カスリテナガエビ」はこの未記載種に充てるのが妥当とし、本種には和名「マガタマテナガエビ」が提唱された（佐伯ら、準備中）。IUCN カテゴリー：Least Concern (LC)。

原記載：Man, J. G. de, 1892. Decapoden des Indischen Archipels. "Zoologische Ergebnisse einer Reise in Niederländisch Ost-Indien", Max. Weber (ed.), 2: 265-527, pls.15-29.

参考文献：佐伯智史・前田 健・成瀬 貫、審査中。琉球列島産ネッタテナガエビ種群 3 種（甲殻亜門：十脚目：コエビ下目：テナガエビ科）の分類と形態。Fauna Ryukyuna.

執筆者名：佐伯智史

和名：カスリテナガエビ
分類：十脚目 コエビ下目 テナガエビ科
学名：Macrobrachium sp.
方言名：タナガー・タナゲー(沖縄島／総称)、イッピル(石垣島)
カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

形態：頭胸甲長 18mm 程度。額角はやや下方に湾曲し、先端は第 1 触角柄部を超えない。額角上縁に 10～12 歯（うち頭胸甲上に 4～6 歯）、下縁には 2～3 歯を有する。雄の第 2 鉗脚（第 2 胸脚）の形態は左右で大きさ、形態が著しく異なる。大鉗脚の指部は掌部より短く、掌部の長さは幅の 2 倍前後、腕節は長節より長い。小鉗脚の指部は掌部よりもやや長く、指を閉じても両指間には大きな隙間があり、長い剛毛が密生する。小鉗脚の腕節は細長く、長節より長い。なお、第 2 鉗脚が脱落した個体は、脱皮後に左右鉗脚の形態が著しく変わる場合がある（藤田、未発表）。成体では生時の色彩は茶褐色で、頭胸甲及び腹節には金白色や暗褐色の斑が不規則に散在し、縞模様を呈する。

近似種との区別：本種は、他の日本産テナガエビ類ではネッタテナガエビ及びマガタマテナガエビに酷似するが、これら 3 種は生時の色彩で比較的容易に区別できる。ネッタテナガエビは頭胸甲側面に暗赤褐色の 3 本の縦線が入ること、マガタマテナガエビは腹節側面に暗褐色の縦線が 1 本入るのが特徴である。

分布の概要：国内では沖縄島及び石垣島、国外ではフィリピンより確認されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較：ネッタテナガエビ及びマガタマテナガエビは、西太平洋の熱帯・亜熱帯島嶼に分布する。

生態的特徴：小卵多産種で 12 ヶ月期とメガロパ（デカポディド）期を経て稚エビになる。

- 生息地の条件 : 河川中・下流域に生息する。急流を好み、石の多い早瀬でネッタテナガエビ、マガタマテナガエビ、ツブテナガエビ、ヒラテナガエビ、オニヌマエビなどと同所的にみられる。
- 現在の生息状況 : 個体数は少ない。また、河川環境の悪化に伴い、本種に適した生息地が減少している。
- 生存に対する脅威 : 河川改修や浚渫、赤土流入などによる生息環境の改変・消失、人工あるいは自然的原因による河口閉塞とそれに伴う回遊阻害が生じる脅威となる。
- 特記事項 : 諸喜田ら (2003) は、石垣島より採集された個体を「*M. lepidactyloides*」とし、「カスリテナガエビ」の和名を付して報告した。その後、沖縄島より真の「*M. lepidactyloides*」が得られ、諸喜田ら (2003) の石垣島産個体は未記載種である可能性が高いことが示され、和名「カスリテナガエビ」はこの未記載種に充てるのが妥当とされた (佐伯ら, 準備中)。
- 原 記 載 : Man, J. G. de, 1892. Decapoden des Indischen Archipels. "Zoologische Ergebnisse einer Reise in Niederländisch Ost-Indien", Max. Weber (ed.), 2: 265-527, pls.15-29.
- 参 考 文 献 : 佐伯智史・前田 健・成瀬 貫, 審査中. 琉球列島産ネッタテナガエビ種群 3 種 (甲殻亜門: 十脚目: コエビ下目: テナガエビ科) の分類と形態. Fauna Ryukyuna. 諸喜田茂充・藤田喜久・長井 隆・伊藤 茜・川原 剛・野甫 齊, 2003. 石垣島名蔵川マングローブ域と流入河川における甲殻類の生態分布と現存量. "島マングローブに関する調査研究報告書", 亜熱帯総合研究所 (編), 亜熱帯総合研究所, 那覇, 97, 総合研.
- 執 筆 者 名 : 佐伯智史

和 名 : ショキタテナガエビ
 分 類 : 十脚目 コエビ下目 テナガエビ科
 学 名 : *Macrobrachium shokitai* Fujino & Baba, 1973
 方 言 名 : タナゲー・タナゲー (沖縄/総称)、イッピル (石垣島/総称)
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 額角はほぼまっすぐにのびて第 1 触角第 3 節の中ほどに達する。上縁に 10~12 歯 (うち 2 歯は眼窩より後方に位置する)、下縁に 2~3 (普通 2 歯) がある。第 2 胸脚の鉗部 (掌部と指部) は成熟雄では小顆粒で覆われるが、雌や幼若雄では顆粒が顕著ではない。尾節は第 6 腹節より長く、背面後方に 2 対の小棘があり、後縁は中央が突出し、その両側に 2 対の小棘がある。

近似種との区別 : 同所的に生息する近似種のミナミテナガエビとは、額角下縁の歯数 (ミナミは普通 3)、第 2 胸脚の鉗部 (ミナミは小棘で覆われる)、卵の大きさや数 (ショキタは大卵少産、ミナミは小卵多産) 等から区別される。また、台湾島や中国に生息するタイリクテナガエビにもよく似ているが、額角の歯数や第 2 胸脚等の違い、および交雑実験やアイソザイム等からも明らかな違いが見られる。

分布の概要 : 西表島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁種のタイリクテナガエビが台湾と中国大陸に分布。

生態的特徴 : 純淡水性のテナガエビで、浮遊期を完全に省略している。

生息地の条件 : 河川上流域の清流に生息する。西表島の仲間川、浦内川、大見謝川、南風見岳南斜面の沢などから見つかっており、西表島のほぼ全域に生息している。

学術的意義・評価 : 陸封化された生活史を有するため、台湾や中国大陸を含めた琉球列島の地史を考える上で重要な種である。

生存に対する脅威 : 人的環境改変が加わると容易に減少につながる。生息地が分断されると近親交配による遺伝子の劣化をまねいたり、またショキタテナガエビなどの鯉腔に寄生する等脚類である、ショキタテナガエビの宿主に与える影響についてもまだわかっていない。

特記事項 : 西表島固有種。IUCN カテゴリー: Least Concern(LC)。

原 記 載 : Fujino, T. & K. Baba, 1973. A new fresh-water prawn of the genus *Macrobrachium* (Crustacea, Decapoda, Caridea) from Iriomote Island of the Ryukyus. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 46: 100-110.

参 考 文 献 : Shoktita, S., 1973. Abbreviated larval development of the fresh-water prawn, *Macrobrachium shokitai* Fujino & Baba (Decapoda, Palaemonidae) from Iriomote Island of the Ryukyus. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 46(2): 111-126.

馬場敬次, 1995. ショキタテナガエビ, "日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (II)", 日本水産資源保護協会編, (社)日本水産資源保護協会, 東京, 617-619.

執 筆 者 名 : 諸喜田茂充*・成瀬 貫*・成瀬 貫(追補) *前回改訂版 (2005) における諸喜田・成瀬による記載内容を一部見直した。

和 名 : ヒトハカニダマシ
 分 類 : 十脚目 異尾下目 カニダマシ科
 学 名 : *Petrolisthes unilobatus* Henderson, 1888
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 : 甲および胸脚は平たい。甲は丸みを帯びた三角形で、眼上棘および前棘を欠く。鉗脚の腕節の前縁基部に 1 歯を備え、その後縁の末端は伸長して鋭い突起になる。歩脚は短く、太い。

近似種との区別 : 日本産のイソカニダマシ属の種の中では、イソカニダマシ *Petrolisthes japonicus* (De Haan, 1849) に最もよく似ている。しかしイソカニダマシは、鉗脚の腕節の後縁末部に 2 または 3 棘を備えること、そして歩脚の長節がより細いことにより、ヒトハカニダマシから識別できる。沖縄島では同所的に、形態の概観が類似したミナミカニダマシ *Petrolisthes hastatus* Stimpson, 1858 を確認できるが、ヒトハ

〈甲殻類〉

カニダマシは、鉗脚の腕節の前縁基部に1歯のみを持ち(ミナミカニダマシでは、より狭いまたは尖った2-4歯を持つ)、歩脚がより太く、短いことにより識別できる。

分布の概要：国内では、鹿児島県(トカラ列島)、沖縄県(沖縄島、石垣島、与那国島、尖閣諸島)から記録されている。国外ではトンガ、フィジー、台湾から知られる。

近縁な種及び群との分布状況の比較：イソカニダマシは、国内では青森県から西表島、小笠原諸島、国外では韓国、中国、台湾に分布する。

生態的特徴：室内飼育下において、本種の初期生活史が明らかになっている。水温27.5~28.0°Cの条件下で、ゾエア2期(浮遊幼生期間)を経て、孵化後11日でメガロパ(デカポディド)幼生へと変態し、底着する。その他の生態については明らかになっていない。

生息地の条件：波当たりの強い転石海岸の潮間帯に生息する。沖縄島では、インドカニダマシやミナミカニダマシなどのカニダマシ類を同所的に確認できる。

個体数の動向：沖縄県での過去と現在の個体数の増減については不明。

現在の生息状況：局所的な分布を示す種で、沖縄島では国頭村西岸の転石帯でのみ生息が確認されている。石垣島からの近年の記録は無い。

生存に対する脅威：局所的な分布を示すため、道路拡張・護岸工事等による自然海岸の消失が最大の脅威となる。

原記載：Henderson, J. R., 1888. Report on the Anomura, collected by H. M. S. Challenger during the years 1873-76. "Zoology. Report on the Scientific Results of the Voyage of H.M.S. Challenger During the Years 1873-76 Under the Command of Captain George S. Nares, R.N., F.R.S. and the Late Captain Frank Tourle Thomson, R.N.", J. Murray, J. (ed.), C. W. Thomson & J. Murray (series eds.), 27, Neill and Company, Edinburgh, i-xi, 1-221, pls.1-21.

参考文献：仲宗根幸男・長浜克重, 1971. 尖閣列島の海岸無脊椎動物. 池原貞雄(編), 尖閣列島学術調査報告. 琉球大学, 那覇, pp. 115-128, pls. MI 1-5.

Fujita, Y., S. Shokita, & M. Osawa, 2002. Complete larval development of *Petrolisthes unilobatus* reared under laboratory conditions (Decapoda: Anomura: Porcellanidae). *Journal of Crustacean Biology*, 22(3): 567-580.

Osawa, M. & T.-Y. Chan, 2010. Part III. Porcellanidae (Porcelain crabs). "Crustacean Fauna of Taiwan: Crab-like Anomurans (Hippoidea, Lithodoidea and Porcellanidae)", T.-Y. Chan (ed.), National Taiwan Ocean University, Keelung, 67-181.

執筆者名：大澤正幸・藤田喜久

和名：ヤシガニ

分類：十脚目 異尾下目 オカヤドカリ科

学名：*Birgus latro* (Linnaeus, 1767)

方言名：アンマク・ハブガニ(沖縄島)、アンマク・アンマコ・アンマコウ(大東島)、マクガン(宮古諸島)、マッコン・マッカ(八重山)、モーヤン(西表島祖内)、マコガニ(黒島)、ムゴン(波照間島)、マクヤ(鳩間島)、ソーグヤー(与那国島)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態：甲長20 cm(胸長10 cm)、体重4kgに達する。甲と腹節背面はよく硬化している。鰓域は著しく膨らむ。第1胸脚は強大な鉗脚となり、左側が常に大きい。第4~5胸脚も鉗脚となり、第5脚は常に鰓室内に挿入している。雄は腹肢を欠くが、雌は第2~4腹節各節の左側に1つずつ持つ。

近似種との区別：本属はヤシガニのみを含む。オカヤドカリ類は宿貝を背負っているが、ヤシガニは成長すると宿貝なしで生活している。

分布の概要：インド-西太平洋の熱帯・亜熱帯島嶼に分布。国内では、琉球列島と小笠原諸島に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：一属一種で近縁種はいない。

生態的特徴：おもに海岸の岩礁域に生息し、基本的に夜行性である。雑食性で植物の実や動物の死骸などを食べる。本種の繁殖期は6~10月(6月初旬~8月下旬が最盛期)で、雌の抱卵数は4万5000~25万粒。卵発生が進むと、雌は海岸の岩礁域に降りてゾエア幼生を海に放す。孵化幼生は4または5ゾエア期を経て、孵化後17~21日でグラウコトエ幼生に変態する。グラウコトエ幼生は、変態後21~28日間で稚ヤシガニに変態する。その後約2年半程度、“ヤドカリ生活”を送ると考えられている。脱皮は、海岸付近の地面に穴を掘って行う。成長が極めて遅く、雌の性成熟には10年以上、一般的な食用サイズ(約500g)に達するのには、雄で10年、雌で25年以上を要する。最大サイズの個体は、約50年生存しているとされる。

生息地の条件：自然海岸。洞穴や裂け目が多い石灰岩礁域で、周辺に餌となる植物が生育する場所で数多く見られる。

現在の生息状況：沖縄各地では、珍味食材としての過剰捕獲が続いており、資源量の減少、小型化が進んでいる。

学術的意義・評価：本種は、世界最大の陸棲甲殻類であり、貝殻を利用しないオカヤドカリ類としても興味深い。ヤシガニの大型化の理由や、ヤドカリ類の海から陸への移行進化を考えるよい研究素材である。

生存に対する脅威：食用のための乱獲、自然海岸の縮小・消失、道路での轢殺などが本種の生存の大きな脅威となる。

特記事項：2010年に「多良間村マクガン(ヤシガニ)保護条例」、2012年に「宮古島市ヤシガニ保護条例」、2014年に「石垣市ヤシガニ保護条例」が制定され、各地域にて本種保護の機運が高まっている。IUCNカテゴリー：Data Deficient (DD)。

原記載：Linnaeus, C. 1767. *Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis*. Ed. 12, Stockholm, vol. 1, part 2, pp.553-1327.

参考文献：Sato, T., & K. Yoseda, 2008. Reproductive season and female maturity size of coconut crab *Birgus latro* on Hatoma Island, southern Japan. *Fisheries Science*, 74: 1277-1282.

- 藤田喜久, 2010. ヤシガニと沖縄の人々の暮らし. *CANCER*, 19: 41-51.
 藤田喜久, 2011. 第5章 マクガンあんちーかんちー (ヤシガニにまつわる話題あれこれ), “宮古の自然と文化 第3集 躍動する宮古の島々”, 宮古の自然と文化を考える会 (編), 新星出版, 那覇, 71-89.
 Sato, T., K. Yoseda, O. Abe, T. Shibuno, Y. Takada, S. Dan & K. Hamasaki, 2013. Growth of the coconut crab *Birgus latro* estimated from mark-recapture using passive integrated transponder (PIT) tags. *Aquatic Biology*, 19: 143-152.

執筆者名 : 藤田喜久

和名 : **サキシマオカヤドカリ**
 分類 : 十脚目 異尾下目 オカヤドカリ科
 学名 : *Coenobita perlatus* H. Milne Edwards, 1837
 方言名 : アマン・アーマン (混称/総称)
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 甲は丸みを帯びてやや盛り上がる。眼柄は著しく側扁する。触角棘は第2触角柄の第2節に癒合する。左右両鉗脚の掌部上縁に毛束列があり、さらに左鉗脚の掌部上縁には斜向顆粒列がある。左第3胸脚(第2歩脚)前節の外側面と内側面が明瞭な縦走隆起稜によって区別されない。雄の第5胸脚の底節突起右側が非常に長い。甲と胸脚の地色は鮮やかな紅色を呈し、白色顆粒が点在する。

近似種との区別 : 左鉗脚の掌部上縁に斜向顆粒列がある点で、ナキオカヤドカリとムラサキオカヤドカリに似るが、左側第3胸脚の前節の外側面と上面が縦走隆起稜によって区別されない点で本種を識別できる。また、生時では、サキシマオカヤドカリの体色が鮮やかな紅色であることにより、他種と容易に区別できる。

分布の概要 : インドー西部太平洋の熱帯域に広く分布する。国内では、小笠原諸島の父島、火山列島の北硫黄島、南硫黄島、南鳥島、琉球列島の水納島(宮古諸島)、石垣島、黒島から記録されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県下には、ムラサキオカヤドカリ、オカヤドカリ、ナキオカヤドカリ、オオナキオカヤドカリ、コムラサキオカヤドカリが生息しているが、本種は他種に比べて個体数が著しく少ない。

生態的特徴 : 本種の生態や生活史については良く分かっていない。宮古諸島の水納島では、本種の抱卵個体が6月下旬に採集されている。

生息地の条件 : 砂浜や岩礁が良好に残された自然海岸。また、本種は、大陸や大きな島よりも、それらから離れた「Offshore Island」に多く分布するとされている。

現在の生息状況 : 沖縄県における本種の記録は極めて限定されているが、宮古諸島の水納島では、複数個体が観察され、繁殖地であることが確認されている。

学術的意義・評価 : 本種は、「Offshore Island」に多く分布するとされているため、オカヤドカリ類の生物系統地理研究のよい材料となる。

生存に対する脅威 : 自然海岸の改変、破壊。

特記事項 : 国指定天然記念物(1970年)。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)(ただし、宮古諸島における産地や採集年等の情報は不明である)。

原記載 : Milne Edwards, H., 1834-1837. Histoire naturelle des Crustacés comprenant l'anatomie, la physiologie et la classification de ces animaux. Paris, Librairie Encyclopédique de Roret. Vol. 1: i-xxxv, 1-468. Vol. 2: 1-531. Atlas, 1837: 1-32, pls. 1-42. Vol. 3, 1840: 1-638.

参考文献 : 仲宗根・当山・黒住, 1987. あまん オカヤドカリ生息実態調査報告. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第29集, 沖縄県教育委員会, 那覇.
 朝倉 彰, 2004. ヤドカリ類の分類学, 最近の話題-オカヤドカリ科. 海洋と生物 150, 26(1) : 83-89.
 藤田喜久・成瀬 貴, 2016. 多良間諸島水納島におけるサキシマオカヤドカリの記録. Fauna Ryukyuan, 28: 57-58.

執筆者名 : 藤田喜久

和名 : **キカイホンヤドカリ**
 分類 : 十脚目 異尾下目 ホンヤドカリ科
 学名 : *Pagurus angustus* (Stimpson, 1858)
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 眼柄は細い。両鉗脚の長節の腹面基部に顕著な棘または鈍く尖った突出を持つ。右鉗脚は左鉗脚より明らかに大きく、掌部および腕節の背面が棘状の小顆粒に覆われる。歩脚の指節は前節より短い。左第2歩脚の前節側面の腹縁近くに粒状の小隆起の列を持つ。

近似種との区別 : ユビナガホンヤドカリ *Pagurus minutus* Hess, 1865 に形態が似ているが、歩脚の指節がより短く、指節の側面に赤褐色の細い縦縞を持つことで識別できる。ユビナガホンヤドカリでは、歩脚の指節は前節より明らかに長く、その側面に赤褐色の縦縞は見られない。

分布の概要 : 国内では、鹿児島県(喜界島、奄美大島)および沖縄県(沖縄島)のみから記録されている。国内での分布は琉球列島の中部に限られている。国外では、台湾から記録されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ユビナガホンヤドカリは、東アジアの広域に分布しており、国内では北海道から沖縄県(西表島)まで、国外では台湾およびロシア極東域から中国北東岸にかけて記録されている。

<甲殻類>

ユビナガホンヤドカリは、干潟や河口域などの内湾性海岸の砂泥底上で見つかることが多い。

- 生息地の条件 : 高潮帯～中潮帯の砂泥底の転石域。階段式護岸の隙間からも確認されている。
個体数の動向 : 近年、本種が生息する海岸は減少し、見つかる個体数も減少している。
現在の生息状況 : 局所的な分布を示す。沖縄島では数か所の内湾性海岸から見つかっているが、同所的に確認できるツマキヨコバサミ *Clibanarius englaucus* Haig & Ball, 1972 やマダラヨコバサミ *C. humilis* (Dana, 1851) などの他のヤドカリ類に比べて出現個体数は少ない。
生存に対する脅威 : 潮間帯の転石域および階段式護岸は、人為的攪乱の影響を受けやすい場所であることから、生息環境の水質・底質の汚染、埋め立て、転石域の減少が、本種の減少・消失につながる可能性がある。
原 記 載 : Stimpson, W., 1858. Prodrômus descriptionis animalium evertibratorum, quae in expeditione ad oceanum pacificum septentrionalem, a republica federata missa, Cadwaladaro Ringgold et Johanne Rodgers ducibus, observavit et descripsit. Pars VII. Crustacea Anomura. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 10: 225-252.
参 考 文 献 : McLaughlin, P. A., D. L. Rahayu, T. Komai & T.-Y. Chan, 2007. A catalog of the hermit crabs (Paguroidea) of Taiwan. National Taiwan Ocean University, Keelung, viii+365 pp.
大澤正幸, 2012. キカイホンヤドカリ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 186.

執 筆 者 名 : 大澤正幸

- 和 名 : イリオモテマメコブシガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 コブシガニ科
学 名 : *Philyra iriomotensis* Sakai, 1983
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

甲は菱形で、周囲を顆粒で縁取られている。甲背面の胃域、鰓域、心域に小さい顆粒が集中する。西表島、沖縄島、奄美大島、加計呂麻島から報告されている本種は、マングローブ林内に多いマンガルマメコブシガニと、感潮域の砂泥部から河口域最下部の砂礫質の潮間帯にも見つかるアマミマメコブシガニの生息環境の中間に多く見つかる傾向にある。本種はアマミマメコブシガニに似るが、アマミマメコブシガニは甲、特に鰓域と胃域が強く盛り上がり、各区域の顆粒も大きいことから本種より区別できる。

- 原 記 載 : Sakai, T., 1983. Description of new genera and species of Japanese crabs, together with systematically and biogeographically interesting species. (I). Reseaches on Crustacea, 12: 1-44, pls. I-VIII, 1 frontispiece.
参 考 文 献 : Takeda M. & Y. Nakasone, 1991. Three leucosiid crabs of the genus *Philyra* from Okinawa, the Ryukyu Islands, with description of a new species. Bulletin of the National Science Museum, Series A, Zoology, 17(1): 19-24.
前之園唯史・長井 隆, 2012. イリオモテマメコブシガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 190.
三浦知之・三浦 要, 2015. 加計呂麻島の海岸湿地に生息する甲殻類と貝類の記録. Nature of Kagoshima, 41: 209-222.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

- 和 名 : クメジマミナミサワガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
学 名 : *Candidiopotamon kumejimense* Minei, 1973
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 : 甲は後方が狭くなる台形で、前側縁にははっきりとした前鰓歯がある。額縁の外部が第2触角内肢の第1節に接触する。第2歩脚前節外側背縁に棘の列がない。

近似種との区別 : 本種のオキナワミナミサワガニとトカシキミナミサワガニからの識別点として、第2歩脚前節外側上縁に棘の列がない点が挙げられる

分布の概要 : 久米島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属種であるオキナワミナミサワガニとトカシキミナミサワガニが、それぞれ沖縄島北部と渡嘉敷島に、*C. rathbunae* (De Man, 1914) が台湾、*C. guangdongense* Dai, 1999 が中国広東省にそれぞれ分布している。

生態的特徴 : 他のサワガニ類と同様、大きな卵を少なく産む大卵少産型の生活史である。

生息地の条件 : 成体は河川中・上流部の川岸近くの湿地や山地部の湿地に巣穴を作って生息しているが、転石のある所ではその下に棲んでいる。稚ガニは川の中や水溜りなどで見かける。

現在の生息状況 : 中・上流域の比較的流量が少ない清流に生息している。

学術的意義・評価 : クメジマミナミサワガニが属するミナミサワガニ属は、中琉球、台湾、中国南東部のみに分布するグループである。海を介した移動ができないために、分布の拡大は上記の地域が陸でつながっていたときに起こったと考えられ、地史を考える上で大変貴重なグループである。

生存に対する脅威 : 土地改良事業のため生息域が減少している。また土砂が河川に流入し、川岸近くの生息域が悪化している。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern(LC)。

原 記 載 : Minei, H., 1973. Potamoid crabs of the Ryukyu Islands, with descriptions of five new species (Crustacea,

- Deccapoda, Potamoidea). Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University, 17: 203-226.
- 参考文献： 儀間英美・諸喜田茂充, 1980. 沖縄島与那川におけるサワガニ類の分布. 沖縄生物学会誌, 18: 9-15.
- 西島信昇・諸喜田茂充・大城信弘, 1981. 久米島における河川動物群集の特性とその人為的変革. 琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革 (II), 205-241.
- 鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執筆者名： 成瀬 貫

和名： オキナワミナミサワガニ
 分類： 十脚目 短尾下目 サワガニ科
 学名： *Candidiopotamon okinawense* Minei, 1973
 カテゴリ： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT)

形態： 甲は後方が狭くなる台形で、眼窩外歯後方の歯が明瞭である。額縁の外部が第2触角内肢の第1節に接触しない。第2歩脚前節外側背縁に棘の列がある。

近似種との区別： 本種は、クメジマミナミサワガニとトカシキミナミサワガニより、額縁の外部が第2触角内肢の第1節に接触しないことから区別できる。

分布の概要： 沖縄島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 同属種であるクメジマミナミサワガニとトカシキミナミサワガニが、それぞれ久米島と渡嘉敷島に、*Candidiopotamon rathbunae* (De Man, 1914) が台湾、*C. guangdongense* Dai, 1999 が中国広東省にそれぞれ分布している。

生態的特徴： 他のサワガニ類と同様、大きな卵を少なく産む大卵少産型の生活史である。

生息地の条件： 成体は河川中・上流部の川岸近くの湿地や山地部の湿地に巣穴を作って生息しているが、転石のある所ではその下に棲んでいる。稚ガニは川の中や水溜りなどで見かける。

現在の生息状況： 沖縄島北部の場合、河川に砂防ダムや大型ダムが建設されたため、生息域がかなり縮小されている。

学術的意義・評価： オキナワミナミサワガニが属するミナミサワガニ属は、中琉球、台湾、中国南東部のみに分布するグループである。海を介した移動ができないために、分布の拡大は上記の地域が陸でつながっていたときに起こったと考えられ、地史を考える上で大変貴重なグループである。

生存に対する脅威： 森林伐採などを伴うダム建設や山地・河川開発、道路建設などにより、生息地が攪乱される可能性がある。

特記事項： 沖縄島北部固有種。IUCN カテゴリ： Least Concern(LC)。

原記載： Minei, H., 1973. Potamoid crabs of the Ryukyu Islands, with descriptions of five new species (Crustacea, Deccapoda, Potamoidea). Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University, 17: 203-226.

参考文献： 儀間英美・諸喜田茂充, 1980. 沖縄島与那川におけるサワガニ類の分布. 沖縄生物学会誌, 18: 9-15.

諸喜田茂充・成瀬 貫, 2002. 琉球列島のサワガニ類の分布と繁殖生態および起源論. “世界に拓く沖縄研究第4回沖縄研究国際シンポジウム”, 第4回沖縄研究国際シンポジウム実行委員会 (編), 第4回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会, 那覇, 719-727.

鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執筆者名： 成瀬 貫

和名： ムラサキサワガニ
 分類： 十脚目 短尾下目 サワガニ科
 学名： *Geothelphusa marginata marginata* Naruse, Shokita & Shy, 2004
 カテゴリ： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT)

形態： 最大甲幅 40 mm。甲は比較的平たく、前側縁は筋状の隆起となり、長細く低い顆粒に縁取られる。頸溝が僅かながらではあるが眼窩外歯後方の歯から胃域のH型の溝に繋がる。歩脚には主に前節に長い毛が生える。生時は歩脚の関節などが黄色で他は紫色をしている。

近似種との区別： 本種の生時の甲や鉗脚・歩脚は紫色であり、茶色であるカシヨクサワガニから容易に識別できる。

分布の概要： 石垣島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： ミヤザキサワガニが台湾北部に、カシヨクサワガニが西表島に、センカクサワガニが魚釣島に、それぞれ分布する。

生息地の条件： 主に山地にある湿地や、狭く浅い沢に生息する。昼間は浅い穴や大きな岩の下に潜む。流れの緩い浅い沢を好み瀬に生息するミネイサワガニと陸上でも活発に行動するヤヤマヤマガニの中間的な生息場所をもつ。

現在の生息状況： 森林伐採や山地の開発により生息地が減少している。

学術的意義・評価： 本種とカシヨクサワガニ・センカクサワガニは形態的に非常に類似しており、恐らく非常に近縁な種であるため、南琉球と台湾のつながりを示す重要なグループである。

生存に対する脅威： 森林伐採などを伴う山地・河川開発、道路建設、あるいは山道の途中にある生息環境の人による踏みつけなどにより、生息地が攪乱される可能性がある。また、ペット用に捕獲され売買される可能性があるが、生息地が限られ、個体数も少ないことから、そのような利用は厳に避けるべきである。

<甲殻類>

- 特記事項 : 石垣島固有亜種。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原記載 : Naruse, T., S. Shokita & J.-Y. Shy, 2004. A new species of the freshwater crab, previously assigned to *Geothelphusa miyazakii* (Miyake & Chiu, 1965) (Crustacea: Decapoda: Potamidae), from Yaeyama Group, Southern Ryukyus, Japan. *Raffles Bulletin of Zoology*, 52(2): 109-116.
参考文献 : 笠井英美・成瀬 貫, 2003. サワガニ科. “琉球列島の陸水生物”, 西田 睦・鹿谷法一・諸喜田 茂充編, 東海大学出版会, 秦野市, 282-288.
鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 図録 1-12.

執筆者名 : 成瀬 貫

和名 : **カッシュクサワガニ**
分類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
学名 : *Geothelphusa marginata fulva* Naruse, Shokita & Shy, 2004
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

最大甲幅 40 mm に達する本種は、甲は比較的平たく、前側縁は筋状の隆起となり、長細く低い顆粒に縁取られる。頸溝は眼窩外歯後方の歯付近では見られない。歩脚には主に前節に長い毛が生える。生時は茶色をしている。西表島固有亜種である。主に山地にある湿地や、狭く浅い沢に生息する。昼間は浅い穴や大きな岩の下に潜む。流れの緩い浅い沢を好み瀬に生息するミネイサワガニと陸上でも活発に行動するヤエヤママガニの中間的な生息場所をもつ。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原記載 : Naruse, T., S. Shokita & J.-Y. Shy, 2004. A new species of the freshwater crab, previously assigned to *Geothelphusa miyazakii* (Miyake & Chiu, 1965) (Crustacea: Decapoda: Potamidae), from Yaeyama Group, Southern Ryukyus, Japan. *Raffles Bulletin of Zoology*, 52(2): 109-116.
参考文献 : 笠井英美・成瀬 貫, 2003. サワガニ科. “琉球列島の陸水生物”, 西田 睦・鹿谷法一・諸喜田 茂充 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 282-288.
鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 図録 1-12.

執筆者名 : 成瀬 貫

和名 : **ミネイサワガニ**
分類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
学名 : *Geothelphusa minei* Shy & Ng, 1998
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

最大甲幅 26 mm に達する本種の甲は平たく、眼窩外歯は目立たない。雄の鉗部は左右不同で、オレンジ色になる。歩脚には剛毛が生える。石垣島と西表島の固有種である。ミネイサワガニは小型種であるため、石垣島で同所的に生息する、より大型のムラサキサワガニ、同じく西表島のカッシュクサワガニより、容易に区別できる。本種は主に上流域の比較的流量が豊富な清流に生息し、瀬に多く、石の下やごく浅い穴に潜む。通常は水中で生活するが雌の抱卵期間は陸域で過ごす。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原記載 : Shy, J.-Y. & P. K. L. Ng, 1998. On two new species of *Geothelphusa* Stimpson, 1858 (Decapoda, Brachyura, Potamidae) from the Ryukyu Island, Japan. *Crustaceana*, 71(7): 778-784.
参考文献 : 笠井英美・成瀬 貫, 2003. サワガニ科. “琉球列島の陸水生物”. 西田 睦・鹿谷法一・諸喜田 茂充 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 282-288.
鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 図録 1-12.

執筆者名 : 成瀬 貫

和名 : **リュウキュウアカテガニ**
分類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
学名 : *Chiromantes ryukyuanum* Naruse & Ng, 2008
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

- 形態 : 最大甲幅約35 mm。甲は四角く、側縁より歯を欠く。鉗脚は大型の雄個体でもほぼ左右同大である。体色は、赤色を基調に黄緑と黒の模様が入る個体もいる。
近似種との区別 : 本種は、同属のアカテガニ *C. haematocheir* に酷似するが、オスの大型個体の鉗部が薄く、歩脚が若干長い。
分布の概要 : 沖縄島、西表島、奄美大島、加計呂麻島。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : アカテガニが九州以北、並びに朝鮮半島、中国沿岸、台湾に分布している。
生態的特徴 : 本種は小さな卵を多く持つ小卵多産型であり、浮遊幼生期を有する。
生息地の条件 : 本種の成体は、繁殖期と考えられる6~10月頃にかけて、河口部にできた湾の奥に隣接する小さな丘

の麓で夜間に発見されることが多い。小型個体は前述のような丘の近くにあり、かつ潮の影響を受ける湿地から発見されている。

現在の生息状況：本種が見られるような環境は、護岸整備や埋立により少なくなってきた。
 生存に対する脅威：埋立や護岸の新設・改修、あるいは海岸・湿地の開発、道路建設等により大きな影響を受ける。また、幼生を放しに海へ下る抱卵雌がロードキルの被害に遭う例もある。

原 記 載：Naruse, T. & P. K. L. Ng, 2008. A new species of *Chiromantes* s. str. (Decapoda: Brachyura: Sesarimidae) from the Ryukyu Islands, Japan, with a note on the identity of *Holometopus serenei* Soh, 1978. *Crustacean Research*, 37: 1-13.

参 考 文 献：成瀬 貴, 2012. リュウキュウアカテガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 195.

執 筆 者 名：成瀬 貴

和 名：マルベンケイガニ
 分 類：十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
 学 名：*Labuanium scandens* Ng & Liu, 2003
 カ テ ゴ リー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

形 態：甲長は最大で約 40 mm。大型個体では甲の側縁が側方に膨らむが、小型個体では膨らみが弱くほぼ直線状である。甲の前側縁には眼窩外歯を含め 3 歯を具える。歩脚は細長く、指節は短い。

近似種との区別：日本国内から記録のある同属他種はニンジャベンケイガニのみであり、ニンジャベンケイガニは甲に厚みがなく、背面から見ると後方に広がる台形状であること、歩脚の指節が細長いこと、流れの速い河川に生息することなどにより、本種と容易に区別できる。

分布の概要：日本国内では、石垣島と西表島で確認されている。国外からの記録は、タイ産地の台湾のみである。

近縁な種及び群との分布状況の比較：同属の種はインド・西太平洋の熱帯・亜熱帯域に広く分布する。このうち日本国内に分布するのは、石垣島と西表島（前之園・佐伯、未発表）に生息するニンジャベンケイガニのみである。

生態的特徴：海岸性樹木の樹洞やアダンの葉腋など植物に溜まる淡水環境（ファイトテルマータ）に生息する。ハスノハギリ群落で見つかることが多い。抱卵雌が幼生放出のために海へ移動する時以外は地上に降りない樹上性のカニである。樹皮の表面の藻類や地衣類、樹木の葉や花、陸産貝類などを摂食する。

生息地の条件：樹洞が形成されやすい樹種で構成された海岸林。

個体数の動向：2013 年に日本初記録として報告されたばかりであるため、国内における個体数の経年変化は不明。

現在の生息状況：石垣島の確認地では、防潮林整備のためハスノハギリ群落の一部が伐採されている。

生存に対する脅威：防潮林整備事業による生息林の伐採や樹種の植え替え、護岸整備による移動障害、道路建設によるロードキルの発生などが本種の生存に対して脅威になると考えられる。

原 記 載：Ng, P. K. L. & H.-C. Liu, 2003. On a new species of tree-climbing crab of the genus *Labuanium* (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Sesarimidae) from Taiwan. *Proceedings of the Biological Society of Washington*, 116(3): 601-616.

参 考 文 献：西垣孝治・比嘉高明・小林 峻・谷本拓夢・長井 隆・成瀬 貴, 2013. 石垣島と西表島より採集された日本初記録の樹上性甲殻類・マルベンケイガニ（甲殻亜門：十脚目：短尾下目：ベンケイガニ科）. *Fauna Ryukyuan*, 5: 1-7.

執 筆 者 名：前之園唯史・成瀬 貴

和 名：シロツメアシハラガニモドキ
 分 類：十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
 学 名：*Neosarmatium rotundifrons* (A. Milne-Edwards, 1869)
 カ テ ゴ リー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

形 態：甲長は最大で約 30 mm。甲は厚く、背面には短い剛毛の束が密生する。眼窩外歯の後方には明瞭な前鰓歯を 1 つ、不明瞭な前鰓歯を 1 または 2 つ具える。掌部の内面には上下方向に並んだ顆粒列を具える。可動指の上面には角質化した棘状突起が 4~7 本並ぶ。甲は全体的に濃い紫色で、鉗脚の腕節や鉗部は白い。

近似種との区別：本種は鉗部が白いことにより、国内に生息する同属他種とは容易に区別できる。むしろ本種は別属のシロツメアシハラガニモドキに似るが、後者は、鉗脚の長節の上縁末端、腕節の内角、掌部上縁の末端にそれぞれ尖った 1 歯を具えること、掌部内面に上下方向に並んだ顆粒列がないこと、可動指の上面に棘状の小顆粒が 10 個以上並ぶことにより本種と区別できる。

分布の概要：日本国内では、宮古島と西表島で確認されている。国外では台湾からサモア（タイ産地）までの西太平洋域に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：同属の種はインド・西太平洋の熱帯・亜熱帯域に広く分布し、国内ではヒメアシハラガニモドキ *N. indicum* とアシハラガニモドキ *N. smithi* が奄美大島以南、オオアシハラガニモドキとヒナアシハラガニモドキが沖縄島以南に分布する。

生態的特徴：河川や池の岸に穴を掘って棲んでいる。雌は甲長 15 mm 程で成熟すると考えられている。

<甲殻類>

- 生息地の条件 : 河川の感潮域の直上やその後背にある池など、淡水域に生息するが、汽水域からそれほど離れていないことも重要である。
- 個体数の動向 : 2015年に日本初記録として報告されたばかりであるため、国内における個体数の経年変化は不明。
- 現在の生息状況 : 国内からの記録は2箇所のみで、個体数は非常に少ないと思われる。
- 生存に対する脅威 : 河川の護岸整備や池の埋め立てによる生息地の縮小や消失、赤土や農薬などの流入による水質悪化などが本種の生存に対して脅威になると考えられる。
- 原 記 載 : Milne-Edwards, A., 1869. Notes sur quelques nouvelles espèces du genre *Sesarma* (Say). Nouvelles Archives du Muséum d'Histoire naturelle, 5 (Bulletin): 25-31.
- 参 考 文 献 : 前之園唯史, 2015. 琉球列島の宮古島および西表島より採集された日本初記録のシロツメアシハラガニモドキ (新称) (甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目: ベンケイガニ科). Fauna Ryukyuna, 26: 17-22.
- Ng, P. K. L., H.-C. Liu & C.-H. Wang, 1997. On the terrestrial sesarminae crabs of the genus *Neosarmatium* (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Grapsidae) from Taiwan. Journal of Taiwan Museum, 49(2): 145-159.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : ギザテアシハラガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
学 名 : *Sarmatium germaini* (A. Milne-Edwards, 1869)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 : 甲幅約23 mm。甲は正方形に近く、非常に厚みがあり、平滑である。前側縁には2つの切れ込みがあり、眼窩外歯を入れて鈍角の3歯を備える。雄の鉗脚掌部上面の指節との間接部に沿い、角質化した14~17歯が並ぶ。その基部側に、間接部と平行に約8対の溝と隆起が並ぶ。
- 近似種との区別 : ギザテアシハラガニは同属のミゾテアシハラガニと形態が似ているが、前者は雄の鉗脚掌部上面の溝と隆起の列がすべて平行であるのに対し、後者は一部平行でないことから見分けられる。
- 分布の概要 : 国内では石垣島と西表島、国外ではベトナム、シンガポール、マレーシア、香港、フィリピン、北オーストラリアに分布する。
- 生息地の条件 : マングローブ林内の砂泥が少し盛り上がるが、満潮時には水に浸る場所に巣穴を掘って生息している。
- 原 記 載 : Milne-Edwards, A., 1869. Notes sur quelques nouvelles esp_ces du genre *Sesarma* (Say). Nouvelles Archives du Mus_ um d'Histoire Naturelle, Paris 5 (Bull.): 25-31.
- 参 考 文 献 : Davie, P. J. F., 1992. Revision of *Sarmatium* Dana (Crustacea: Brachyura: Sesarminae) with descriptions of three new species. Memoirs of the Queensland Museum, 32(1): 79-97.
- 諸喜田茂充・藤田喜久・長井 隆・伊藤 茜・川原 剛・野甫 斉, 2003. 石垣島名蔵川マングローブ域と流入河川における甲殻類の生態分布と現存量。『マングローブに関する調査研究報告書』, 財団法人亜熱帯総合研究所(編), 財団法人亜熱帯総合研究所, 那覇, 97-111.
- 長井 隆・成瀬 貫・前之園唯史・藤田喜久・駒井智幸, 2011. 琉球列島におけるアシハラガニモドキ属とその近似属(甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目)の種の再検討と分布状況。沖縄生物学会誌, 49: 15-36.
- 長井 隆, 2012. ギザテアシハラガニ。『干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック』, 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野市, 198.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫 (加筆・長井 隆)

和 名 : アダンベンケイガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
学 名 : *Scandarma lintou* Schubart, Liu & Cuesta, 2003
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 形 態 : 甲幅は最大個体で約 22 mm。甲は正方形に近い。眼窩外歯の後方に 2 つの前鰓歯を具えるが、中・小型個体では不明瞭な場合が多い。鉗脚の掌部上縁には顆粒列の稜が縦走し、外面は顆粒で覆われる。歩脚は比較的長い。甲の背面は暗色が混じる黄褐色で、後側縁は明るい黄色の帯で縁取られる。鉗部は掌部がオレンジ色で指部は白い。
- 近似種との区別 : 国内に同属他種は分布しない。敢えて言えば、甲が正方形に近いことや歩脚が比較的長いことでマルベンケイガニやリュウキュウアカテガニの小型個体に似るが、前者は歩脚の指節がより短く、さらに小型個体でも前鰓歯が明瞭であること、後者は掌部上縁の稜や外面の顆粒を欠くことで本種と容易に区別できる。
- 分布の概要 : 日本国内では、沖縄島、石垣島、西表島で確認されている。国外では台湾の台湾島と緑島(タイプ産地)、フィリピンのルソン島から報告されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属の *S. splendidum* Naruse & Ng, 2007 と *S. raymondi* Ng, 2013 は、ともにボルネオ島(マレーシア領)に分布する。
- 生態的特徴 : 河口や内湾に隣接したアダン群落に生息し、日中はアダンの葉腋に潜み、夜間にアダンや近隣の樹上で活動する。植物の花や果実、樹皮、樹上の無脊椎動物などを摂食する。抱卵雌は夕方に汽水域で幼生放出を行うが、月の周期や潮汐とは無関係に行われるとされている。抱卵雌の最小サイズは甲幅約 11 mm。

- 生息地の条件 : 河口や内湾に隣接し、かつ強風に晒されないアダン群落。台湾では雨水の溜まったコンクリートブロックでも確認されているが、本来の生息環境ではないと考えられる。
- 個体数の動向 : 2011年に日本初記録として報告されたばかりであるため、国内における個体数の経年変化は不明である。近年、石垣島や西表島でも確認されている。
- 現在の生息状況 : 文献や博物館収蔵標本に基づく産地は、沖縄島、石垣島、西表島でそれぞれ数箇所のみ。このうち、沖縄島の生息地には近年、木道が建設された。
- 生存に対する脅威 : 海岸や河川の開発に伴う、アダン群落の直接的な伐採（生息地の消失）に加え、周辺植生の伐採によるアダン群落内の微気象の変化（生息環境の悪化）が本種の生存に対して脅威になると考えられる。また、抱卵雌や上陸幼体に対しては、道路建設による移動阻害やロードキルの発生も脅威になると考えられる。
- 原 記 載 : Schubart, C. D., H.-C. Liu & J. A. Cuesta, 2003. A new genus and species of tree-climbing crab (Crustacea: Brachyura: Sesarmidae) from Taiwan with notes on its ecology and larval morphology. *The Raffles Bulletin of Zoology*, 51(1): 49-59.
- 参 考 文 献 : 前之園唯史・成瀬 貫, 2011. 沖縄島より採集された日本初記録のアダンベンケイガニ（新称）（甲殻亜門：十脚目：短尾下目：ベンケイガニ科）. *沖縄生物学会誌*, (49): 49-55.
前之園唯史・佐伯智史, 2016. 新産地記録を伴う石垣島のベンケイガニ類相（甲殻亜門：十脚目：短尾下目）. *Fauna Ryukyuana*, 33: 1-13.
Okuyama, Y., 2014. Repeated visitation by a sesarmid crab to male inflorescences of *Piper* sp. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series B, Botany*, 40(3): 119-123.
- 執 筆 者 名 : 前之園唯史

- 和 名 : シロテアシハラガニモドキ
分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
学 名 : *Tiomanium indicum* (H. Milne Edwards, 1837)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形 態 : 甲幅約41 mm。甲はほぼ四角形で厚いが、背面はあまり膨らまない。背面には短毛の束が見られ、特に前方において密生している。前側縁には眼窩外歯を含めて3歯がある。甲の背面と歩脚の一部は紫色をしているが、特に甲の背面の紫色は鮮やかである。和名の由来である鉗脚は鉗部と腕節が白く、雌雄とも左右ほぼ同大である。
- 近似種との区別 : 本種はシロツメアシハラガニモドキ *Neosarmatium rotundifrons* (A. Milne-Edwards, 1869) に形態や色彩が類似する。両種の識別点は、シロツメアシハラガニモドキの項を参照。
- 分布の概要 : 国内では沖縄島、宮古島、西表島、与那国島、国外では台湾、インド-太平洋地域に分布する。
- 生息地の条件 : マングローブ林内とその後背林の周辺、もしくは河川の感潮域上部付近に巣穴を掘って生息する。
- 現在の生息状況 : 生息密度は非常に低く、個体数も少ない。
- 原 記 載 : Milne Edwards, H., 1834-1837. *Histoire naturelle des Crustacés comprenant l'anatomie, la physiologie et la classification de ces animaux*. Paris, Librairie Encyclopédique de Roret. Vol. 1: i-xxxv, 1-468. Vol. 2: 1-531. Atlas, 1837: 1-32, pls.1-42. Vol. 3, 1840: 1-638.
- 参 考 文 献 : Serène, R. and C. L. Soh, 1970. New Indo-Pacific genera allied to *Sesarma* Say 1817 (Brachyura, Decapoda, Crustacea). *Treubia*, 27(4): 387-416.
長井 隆・成瀬 貫・前之園唯史・藤田喜久・駒井智幸, 2011. 琉球列島におけるアシハラガニモドキ属とその近似属（甲殻亜門：十脚目：短尾下目）の種の再検討と分布状況. *沖縄生物学会誌*, 49: 15-36.
長井 隆, 2012. シロテアシハラガニ, “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会（編）, 東海大学出版会, 秦野市, 197.

執 筆 者 名 : 長井 隆

- 和 名 : ロッカクイソガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 モズクガニ科
学 名 : *Otognathon uru* Ng, Komai & Ng, 2009
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形 態 : 甲幅 4 mm ほどの小型種。甲は六角形に近く、前側縁は少なくとも 3 葉に分かれる。前側縁と後側縁が交わる部分が後方外側に突出する。
- 近似種との区別 : ロッカクイソガニは、敢えて言えば甲の形がレンゲガニに似るが、前者は前側縁と後側縁が交わる部分が後方外側に突出するのに対し、後者では突出せずに丸く張りだすのみであることから区別できる。ロッカクイソガニと唯一の同属種 *O. komodoense* (Serène, 1971) の違いは、前者は前側縁が少なくとも 3 葉に分かれるのに対し、後者では分割はみられない。
- 分布の概要 : 沖縄島。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 唯一の同属種である *O. komodoense* がインドネシアのコモド島より知られている。
- 生息地の条件 : サンゴ礫や砂礫が混ざる砂底質の干潟で、高潮線付近の転石の下や堆積したサンゴ礫の隙間などに見られる。
- 現在の生息状況 : 生息干潟の近くで道路建設工事など行われており、本種への影響が懸念される。

<甲殻類>

- 生存に対する脅威 : 埋立や護岸の新設・改修、あるいは海岸開発等により大きな影響を受ける。
原 記 載 : Ng, N. K., T. Komai & P. K. L. Ng, 2009. *Otognathon uru*, a new species of varunid crab (Decapoda: Brachyura: Grapsoidea) from an intertidal reef in Okinawa Island, the Ryukyu Islands, Japan. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A, Supplement 3*, 205-214.
参 考 文 献 : 前之園唯史, 2012. ロッカクイソガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 202.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫・前之園唯史

和 名 : **ダルマガニ**
分 類 : 十脚目 短尾下目 モクズガニ科
学 名 : *Pyxidognathus granulatus* A. Milne-Edwards, 1879
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形 態 : 甲はほぼ円形で、背面はドーム状に膨らむ。額域の前縁は緩やかに膨らみ2葉に分かれる。甲の前側縁には尖った眼窩外歯と丸みを帯びた2つの前鰓歯がある。歩脚は比較的短い。
近似種との区別 : 本種と混棲するトゲアシライソガニモドキは、甲が横長であること、額が突出せずに直線的であること、歩脚が比較的長いことにより本種と区別できる。
分布の概要 : 国内からの記録は石垣島のみ。国外ではフィジー (タイプ産地)、インドネシア、フィリピンから報告がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 一属一種である可能性が指摘されている。

- 生態的特徴 : 石垣島では、河川の感潮域最上部 (汽水域と淡水域の移行帯) にある、流れの緩やかな平瀬や淵で採集されている。食性や生活史などの基本的な生態は不明である。
生息地の条件 : 国内での採集例から推測すると、河口から感潮域の最上部までの間に堰などの人工構造物がない比較的自然度の高い河川で、砂利や小石帯の河床を好むと思われる。
個体数の動向 : 国内では2004年と2014年に石垣島の2河川からそれぞれ1個体が確認されているのみ。それ以前の資料はないため、個体数の経年変化は不明。
現在の生息状況 : 国内からの記録は2河川 (2個体) のみで、個体数は非常に少ないと思われる。
生存に対する脅威 : 河川開発による生息環境の悪化や消失、赤土流入による河床環境の悪化、農薬などの流入による水質悪化が大きな脅威となる。さらに、詳細な生活史は明らかにされていないが、通し回遊型の生活史と思われるため、堰などの人工構造物による回遊阻害も脅威になるとと思われる。

- 原 記 載 : Milne-Edwards, A., 1879. Description de quelques Crustacés nouveaux. *Bulletin de la Société Philomathique de Paris, Série 7, 3*: 103-110, pls. 1-2.
参 考 文 献 : 前之園唯史・長井 隆・成瀬 貫, 2015. 石垣島より採集された日本初記録のダルマガニ (新称) (甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目: モクズガニ科). *沖縄生物学会誌*, 53: 31-36.
Serène, R. & M. K. Moosa, 1971. New and few known species of Brachyura from Ambon. *Marine Research in Indonesia*, 11: 3-18, pls. I-VI.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : **アリアケモドキ**
分 類 : 十脚目 短尾下目 ムツハアリアケガニ科
学 名 : *Deiratonotus cristatus* (De Man, 1895)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形 態 : 甲幅約 17 mm。甲はやや横長で平たく、六角形に近い。甲面の中央を横切るように明瞭な稜線があり、その前方にも3本の短い稜線がある。甲面や歩脚は、短い軟毛で被われる。雌雄とも腹節は、鮮やかな朱赤色を呈している。
近似種との区別 : アリアケモドキと同属にクマノエミオスジガニ *Deiratonotus kaoriae* Miura, Kawane & Wada, 2007 が本州 (三重県) と九州 (長崎県、宮崎県) のみで確認されているが、前者は甲が横に長く、甲面や歩脚には淡色の縞模様がないこと、さらに雄の第一腹肢先端に棘毛があることなどで後者から区別できる。

- 分布の概要 : 国内では北海道～九州、奄美大島、沖縄島、国外ではサハリン、朝鮮半島、中国大陸、ベトナムに分布する。
生息地の条件 : 河口干潟から汽水域にかけての砂泥地の転石や堆積物の下などに隠れているか、浅い巣穴を掘って潜んでいる。

- 原 記 載 : Man, J. G. De, 1895. Bericht über die von Herrn Schiffscapitän Storm zu Atjeh, an den westlichen Küsten von Malakka, Borneo und Celebes sowie in der Java-See gesammelten Decapoden und Stomatopoden. *Zweiter Theil. Zoologische Jahrbücher, Abtheilung für Systematik, Geographie und Biologie der Thiere*, 9(1): 75-218.
参 考 文 献 : 仲宗根幸男, 1977. マングローブ湿地の動物の生態分布. “沖縄県天然記念物調査シリーズ 第10集 慶佐次湾のヒルギ林緊急調査 II”, 沖縄県教育庁文化課 (編), 沖縄県教育庁文化課, 那覇, 9-38.
仲宗根幸男・伊礼美和子, 2003. スナガニ科 Ocypodidae. “琉球列島の陸生水生物”, 西田睦・鹿谷法一・諸喜田茂充 (編), 東海大学出版会, 東京, 266-272.

和田恵次, 2012. アリアケモドキ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑, 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 207.

執筆者名 : 長井 隆

和名 : **チゴガニ**
 分類 : 十脚目 短尾下目 コメツキガニ科
 学名 : *Ilyoplax pusilla* (De Haan, 1835)
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 甲幅約 10 mm. 甲は横長で、六角形に近い形を呈し、甲面は短毛をまばらに生じている。前側縁は、眼窩外歯の直後に 1 個の切れ込みを有する。鉗脚は白く、左右ほぼ同大である。雄の腹面は鮮やかな空色を呈す。

分布の概要 : 国内では本州（宮城県以南）～九州、四国、奄美大島、沖縄島、西表島、国外では朝鮮半島南部に分布する。沖縄県における分布は、沖縄島と西表島のみしか報告がなく、西表島が本種の分布の南限になる。

生態的特徴 : 雄は両方の鉗脚を上下に動かすウェイピング行動を行う。

生息地の条件 : 河口干潟やマングローブ林周辺の砂泥地。

現在の生息状況 : 沖縄島では北部の羽地内海と南部の雄樋川の 2ヶ所、西表島ではサジ川、仲間崎、船浦、浦内川、後良川の 5ヶ所で確認されている。

学術的意義・評価 : 奄美大島と沖縄島の個体群は、九州以北の個体群と遺伝的に異なっていることや雄のウェイピング行動において若干の差があること、さらに繁殖期が大きく異なっていることが明らかになっていることから、生物地理学的に貴重な種である。

生存に対する脅威 : 河川改修や埋立事業等によって生息地が消失する可能性がある。

原記載 : De Haan, W., 1833-1849. Crustacea. “Fauna Japonica sive Descriptio Animalium, quae in Itinere per Japoniam, Jussu et Auspiciis Superiorum, Qui Summum in India Batava Imperium Tenent, Suscepto, Annis 1823-1830 Collegit, Notis, Observationibus et Adumbrationibus Illustravit, (Crustacea).”, P. F. Siebold, (ed.), Lugduni-Batavorum, Leiden, i-xviii+i-xxxix+ix-xvi+1-243, pls. A-J, L-Q, 1-55, circ. table 2.

参考文献 : Nakasone, Y., 1977. Crab zonation in the Yuhi River, Okinawa Island. Japanese Journal of Ecology, 27: 61-70.
 Kosuge, T., 1992. Occurrence of *Ilyoplax pusilla* (Decapoda, Brachyura, Ocypodidae) in Haneji Inlet, Okinawa Island near its southern limit, with some ecological notes on the population. Biological Magazine, Okinawa, 30: 45-53.
 Yamada, K., F. Furukawa & K. Wada, 2009. Geographical variations in waving display and barricade-building behaviour, and genetic population structure in the intertidal brachyuran crab *Ilyoplax pusilla* (de Haan, 1835). Journal of Natural History, 43: 17-34.
 小菅丈治, 2011. 西表島後良川におけるチゴガニの分布. 沖縄生物学会誌, 49: 1-7.
 長井 隆, 2012. チゴガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑, 海岸ベントスのレッドデータブック”, ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 210.

執筆者名 : 長井 隆

和名 : **タイワンヒメオサガニ**
 分類 : 十脚目 短尾下目 オサガニ科
 学名 : *Macrophthalmus (Paramareotis) boteltobagoae* (Sakai, 1939)
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 甲幅は甲長の約 1.4 倍。額は幅広い。眼窩外歯の後方に 2 つの前鰓歯を具え、眼窩外歯または第 1 前鰓歯の先端において甲幅が最大となる。口腔の前方中央には縦走する稜がある。眼柄は太い。掌部内面は無毛である。不動指下縁と掌部下縁は直線状。可動指の咬合縁には、その全長の 1/3 程の位置に明瞭な歯を具える。

近似種との区別 : ホルトハウスオサガニは、第 2 前鰓歯で甲幅が最大となること、鉗部の不動指下縁が掌部下縁に対して下垂すること、軟泥質の干潟（主にマングローブ干潟）に生息することなどにより本種と区別できる。

分布の概要 : 沖縄県内では、沖縄島、宮古島、石垣島から記録がある。県外では奄美大島に分布する。唯一の国外の産地である台湾の蘭嶼島（タイプ産地）では近年見つかっていない。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 国内では、同じ亜属のホルトハウスオサガニが沖縄島、石垣島、西表島に分布し、ナカグスクオサガニが沖縄島と西表島に分布する。

生態的特徴 : 石灰岩の基質に他の穿孔動物が開けた穴を利用し、付着藻類を摂食する。雌は新月近くに産卵し、次の満月で幼生を放出する。

生息地の条件 : 海岸や河口の中潮帯で、表面が藍藻類や堆積物で覆われた石灰岩基質の礫干潟に生息する。しかし、この条件を満たしていても本種が生息していない干潟が多いため、他の環境要因にも制限されている可能性がある。

個体数の動向 : 1989 年に沖縄島南部で行われた調査では、0.125 m²あたりに最大で 18 個体。

現在の生息状況 : 県内では複数の島嶼から確認されているが、各島嶼内で知られている生息地は少なく、さらにそれらの生息地内でもごく限られた範囲でしか見られない。

<甲殻類>

生存に対する脅威 : 埋め立てによる生息干潟の縮小や消失、護岸整備や防波堤建設による生息環境の変化が本種の生存に対して脅威になると考えられる。

原 記 載 : Sakai, T., 1939. Studies on the crabs of Japan IV. Brachygnatha, Brachyrhyncha. Yokendo, Tokyo.

参 考 文 献 : Kosuge, T., 1991. Records of the ocypodid *Macrophthalmus boteltobagoe* (Sakai, 1939) from the Ryukyu Islands, south Japan, with special reference to its occurrence on the limestone rocky shore. *Galaxea*, 10: 97-101.

Kosuge, T. & P. J. F. Davie, 2001. Redescription of *Macrophthalmus boteltobagoe* and *M. holthuisi* with notes on their ecology (Brachyura: Ocypodidae). *Journal of Crustacean Biology*, 21(2): 545-555.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : ナカグスクオサガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 オサガニ科
学 名 : *Macrophthalmus (Paramareotis) quadratus* A. Milne-Edwards, 1873
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形 態 : 甲は僅かに幅広いが、オサガニ属の中では狭い方である。額は幅広い。眼窩外歯の後方に2つの前鰓歯を具え、雄では眼窩外歯、雌では眼窩外歯または第1前鰓歯の先端において甲幅が最大となる。口腔の前方中央には縦走する稜がある。眼柄は太い。雄の鉗部は、掌部内面に羽毛状の剛毛が密生し、可動指の咬合縁には、その全長の1/3程の位置に明瞭な歯を具える。

近似種との区別 : 同じ亜属とされるタイワンヒメオサガニやホルトハウスオサガニは、甲がより幅広いことで容易に本種と区別できる。

分布の概要 : 国内での記録は沖縄島と西表島のみ。国外では東インド洋・西太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布する(タイプ産地: ニューカレドニア)。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 国内では、同じ亜属のタイワンヒメオサガニが奄美大島、沖縄島、宮古島、石垣島に分布し、ホルトハウスオサガニが沖縄島、石垣島、西表島に分布する。

生態的特徴 : 転石の周辺などに巣穴を掘って生息しているが、多孔質の岩や死サンゴ骨格の隙間などにも生息する。朽木やマングローブ植物の気根に生息するという報告もある。付着藻類などを摂食する。

生息地の条件 : 小石やサンゴ礫が混じる砂泥底の干潟に生息するが、この条件を満たしていても本種が生息していない干潟が多いため、その他の環境要因の制限を受けている可能性もある。

個体数の動向 : 個体数に関する過去の資料はない。

現在の生息状況 : 中城湾では極めて狭い範囲に多くの個体が生息している場所が複数あるが、それぞれの場所は互いに連続しておらず、各面積も狭いため注意が必要である。

生存に対する脅威 : 埋め立てによる生息干潟の縮小や消失、護岸整備や防波堤建設による海岸環境の変化が本種の生存に対して脅威になると考えられる。

特 記 事 項 : 本種は台湾からも記録されていたが、台湾の種は実際には未記載種であることが分かり、新種記載された。

原 記 載 : Milne Edwards, A., 1873. Recherches sur la faune carcinologique de la Nouvelle-Calédonie. Chapitre II. Groupe des Cyclométopes Portuniens. *Nouvelles Archives du Muséum d'Histoire naturelle*, 9 (Mémoires): 155-332, pls.4-18.

参 考 文 献 : Kosuge, T. & K. Wada, 1992. *Macrophthalmus quadratus* A. Milne Edwards, 1873 (Decapoda, Brachyura, Ocypodidae) from Nakagusuku Bay, Okinawa Island: a new record for Japan. *The Biological Magazine Okinawa*, (30): 61-64.

前之園唯史, 2012. ナカグスクオサガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野市, 213.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

4) 準絶滅危惧 (NT)

和 名 : シオカワヨコエビ
分 類 : 端脚目 ヨコエビ科
学 名 : *Paracalliope dichotomus* Morino, 1991
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

体長約 2.5 mm。眼が比較的発達する。第2触角は、第1触角より長い。第2~3尾節が融合し、左右に扁平。第3尾肢の内外両肢は等長。第7胸肢は他の胸肢よりも著しく長い。日本固有種で、沖縄島、伊平屋島、伊是名島から記録がある。河川河口部の汽水域や干潟などに生息し、特に河川河口部に生育する河岸植物や抽水植物の根元付近に多数個体が見られるようである。タイプ産地の塩川では、後背地が採石場になっているため、降雨時には赤土が流れ生息環境が悪化している。

原 記 載 : Morino, H., 1991. Gammaridean amphipods (Crustacean) from brackish waters of Okinawa Island, southern Japan. *Publications of Itako Hydrobiological Station*, 5: 13-26.

参 考 文 献 : 諸喜田茂充・西島信昇, 1976. 塩川の水生動物と塩水湧出機構. 塩川動態調査報告 II. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第6集, 沖縄県教育委員会, 那覇, 69-91.
青柳 克, 2011. 伊平屋島・伊是名島から初めて採取されたシオカワヨコエビの記録. 沖縄生物学会誌, 49: 109-112.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : ミナミオニヌマエビ
分 類 : 十脚目 コエビ下目 ヌマエビ科
学 名 : *Atyoida pilipes* (Newport, 1847)
方 言 名 : セー(沖縄/総称)、サイナマ(石垣島/総称)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

頭胸甲長は雄で 3.0~5.8 mm、雌で 4.6~8.8 mm。額角は短く、先端は第1触角柄部の基節端部に達する程度。額角上縁は無歯、下縁も無歯だが稀に1~2歯を有する。体側には楕円状の暗褐色~暗青色斑が破線状に散在し、背部には小斑点が密に入る。国内では与論島、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、小笠原諸島、国外ではインド洋から西太平洋の島嶼に分布する。河川中・上流域に生息する。急流を好み、早瀬や滝でみられる。小卵多産種。山地開発に伴う赤土流入や土砂堆積等による生息環境の改変、人工あるいは自然的原因による河口閉塞やダム建設とそれに伴う回遊阻害が生存の脅威となる。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原 記 載 : Newport, G., 1847. Note on the genus *Atya* of Leach, with descriptions of four apparently new species, in the cabinets of the British Museum. *The Annals and Magazine of Natural History* [series 1], 19: 158-160.
参 考 文 献 : 鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 1.3 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニー淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義編, 生物研究社, 39-73.

執 筆 者 名 : 佐伯智史

和 名 : ナガツノヌマエビ
分 類 : 十脚目 コエビ下目 ヌマエビ科
学 名 : *Caridina gracilirostris* De Man, 1892
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

頭胸甲長 6.5 mm。額角は上方に強く湾曲し、先端は第2触角鱗をはるかに超え、長さは頭胸甲長の1.5~2倍程度。額角上縁には先端に1歯と後半に3~9歯、下縁に28~36歯を有する。体色は透明で、赤褐色の小斑点が散在する。額角の下縁は赤い。国内では久米島、国外ではインド洋から西太平洋に広く分布する。河川下流域に生息し、主に汽水域でみられる。国内での確認例は少ない。小卵多産種。河川改修や浚渫、赤土流入などによる生息環境の改変・消失、人工あるいは自然的原因による河口閉塞とそれに伴う回遊阻害が生存の脅威となる。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原 記 載 : Man, J. G. de, 1892. Decapoden des Indischen Archipels. “Zoologische Ergebnisse einer Reise in Niederländisch Ost-Indien”, Max. Weber (ed.), 2: 265-527, pls.15-29.
参 考 文 献 : Cai, Y. & P. K. L. Ng, 2007. A revision of the *Caridina gracilirostris* De Man, 1892, species group, with descriptions of two new taxa (Decapoda; Caridea; Atyidae). *Journal of Natural History*, 41(25-28): 1585-1602.

執 筆 者 名 : 佐伯智史

和 名 : サキシマヌマエビ
分 類 : 十脚目 コエビ下目 ヌマエビ科
学 名 : *Caridina prashadi* Tiwari & Pillai, 1971
方 言 名 : セー(沖縄/総称)、サイナマ(石垣島/総称)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

体長 20-30 mm。額角は短く、先端は第1触角柄部第2節の中ほどに達する程度。額角先端部にのみ歯があり、上縁に1~6歯、下縁に3~6歯を有する。体色は半透明で、暗褐色~暗青色の横帯や斑紋による特徴的な模様を呈す。国内ではトカラ諸島の中之島以南、喜界島、沖永良部島、沖縄島、伊平屋島、久米島、渡嘉敷島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島、国外ではインド洋のアンダマン諸島に分布する。河川上流域の流れの緩やかな淵でみられるほか、湧泉・洞窟地下水などにも生息する。小卵多産種。山地開発に伴う赤土流入や土砂堆積等による生息環境の改変、人工あるいは自然的原因による河口閉塞やダム建設とそれに伴う回遊阻害が生存の脅威となる。本種は Fujino & Shokita (1975) により *Caridina sakisimensis* として記載された後、*Caridina rapaensis* Edmondson, 1935 とみなされてきたが、Cai & Shokita (2006) により *Caridina prashadi* Tiwari & Pillai, 1971 であると報告された。

特 記 事 項 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005年)。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
原 記 載 : Tiwari, K. K. & R. S. Pillai, 1971. Atyid shrimps of the genus *Caridina* H. Milne Edwards, 1837, from the Andaman islands (Decapoda, Caridea). *Crustaceana*, 21(1): 79-91.

〈甲殻類〉

参 考 文 献 : Cai, Y. & Shokita, S., 2006. Atyid shrimps (Crustacea: Decapoda: Caridea) of the Ryukyu Islands, southern Japan, with descriptions of two new species. *J. Nat. Hist.*, 40(38/40): 2123-2172.
諸喜田茂充, 2014. サキシマヌマエビ. “レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 7 その他無脊椎動物 (クモ形類・甲殻類等)”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 60.

執 筆 者 名 : 佐伯智史

和 名 : マングローブヌマエビ
分 類 : 十脚目 コエビ下目 ヌマエビ科
学 名 : *Caridina propinqua* De Man, 1908
方 言 名 : サイナマ(石垣島/総称)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

体長 20 mm 程度。額角はほぼまっすぐで、先端は第 1 触角柄部の第 3 節端部に達する程度。額角上縁に 12~20 歯 (うち頭胸甲上に 3~4 歯)、下縁に 1~6 歯を有する。体色は半透明で、赤褐色の小斑点が散在する。国内では石垣島、西表島、国外では中国、フィリピン、マレーシア、スリランカ、インドに分布する。マングローブ林内やその後背湿地の塩分濃度が比較的高いタイドプールに生息する。国内の生息地は一部の河川河口域に限定される。小卵多産種。埋立や道路・護岸整備等による生息環境の消失、改変が生存の脅威となる。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
原 記 載 : Man, J. G. de, 1908. The fauna of brackish ponds at port Canning, Lower Bengal. Part 10: Decapod crustacea, with an account of a small collection from brackish water near Calcutta and in the Dacca District, Eastern Bengal. *Records of the Indian Museum*, 2: 211-231.
参 考 文 献 : Cai, Y. & Shokita, S., 2006. Atyid shrimps (Crustacea: Decapoda: Caridea) of the Ryukyu Islands, southern Japan, with descriptions of two new species. *J. Nat. Hist.*, 40(38/40): 2123-2172.
藤田喜久, 2012. マングローブヌマエビ ”干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 180.

執 筆 者 名 : 佐伯智史

和 名 : アシナガヌマエビ
分 類 : 十脚目 コエビ下目 ヌマエビ科
学 名 : *Caridina rubella* Fujino & Shokita, 1975
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

体長 30 mm。体は全体的に赤みを帯びる。額角は伸長し、第 1 触角柄部第 3 節に達する。眼は小さく退化傾向を示し、触角や胸脚が非常に長い。洞窟地下水域や陸封潮溜り環境に生息するが、必ずしも塩分を必要としない。国内では、奄美諸島の沖永良部島、沖縄諸島の沖縄島および伊江島、大東諸島の南大東島、宮古諸島の宮古島から記録されている。国外ではフィリピンに分布する。宮古島における本種の繁殖期は 5~11 月で、抱卵数は 138~1018 (甲長 4.4~7.6mm) 粒 (川原・藤田, 未発表データ)。甲長 5.5 mm 以上の個体はすべて雌であり、生殖巣および外部形態の観察から、性転換を行う可能性が指摘されている (川原・藤田, 未発表)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。

特 記 事 項 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。
原 記 載 : Fujino, T. & S. Shokita, 1975. Report on some new Atyid shrimps (Crustacea, Decapoda, Caridea) from the Ryukyu Islands. *Bulletin of Science & Engineering Division, University of Ryukyus. Mathematics & Natural Sciences*, 18: 93-113.
参 考 文 献 : 諸喜田茂充・上江田利恵子, 1977. 塩川の地下水流下動物とその日周及び季節変動。沖縄県天然記念物調査シリーズ第 9 集, 塩川動態調査報告 III, 沖縄県教育委員会, 沖縄, 24-51.
Weese, D. A., Y. Fujita, M. Hidaka & S. R. Santos, 2012. The long and short of it: Genetic variation and population structure of the anchialine atyid shrimp *Caridina rubella* in Miyako-jima, Japan. *Journal of Crustacean Biology*, 32: 109-117.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : スベスベテナガエビ
分 類 : 十脚目 コエビ下目 テナガエビ科
学 名 : *Macrobrachium equidens* (Dana, 1852)
方 言 名 : タナゲー・タナゲー(沖縄島/総称)、イッピル(石垣島)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

頭胸甲長 30 mm 程度。額角はやや上方へ湾曲し、先端は第 2 触角鱗と同長程度か僅かに超える。額角上縁には 9~13 歯 (うち頭胸甲上に 2~4 歯)、下縁に 4~7 歯を有する。第 2 胸脚の大きさと形態は左右ほぼ同じ。体色は淡褐色で、多数の暗赤褐色斑が散在する。国内では薩摩半島以南、国外ではインド洋から西太平洋の熱帯・亜熱帯域に広く分布する。河川下流の汽水域に生息し、主にマングローブ水域でみられる。小卵多産種で 10 ズエア期とメガロパ (デカポディト) 期を経て稚エビになる。埋立や道路・護岸整備、河川改修等による生息環境の改変・消失が生存の脅威とな

る。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
 原記載 : Dana, J. D., 1852. *Conspectus crustaceorum quae in orbis terrarum circumnavigatione, carolo wilkes e classe republicae foederatae duce, lexit et descripsit. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 1852: 10-28.*
 参考文献 : Ngoc-Ho, N., 1976. The larval development of the prawns *Macrobrachium equidens* and *Macrobrachium* sp. (Decapoda: Palaemonidae), reared in the laboratory. *Journal of Zoology, 178: 15-55.*
 諸喜田茂充, 2003. テナガエビ科 Palaemonidae. “琉球列島の陸水生物”, 西田 睦・鹿谷法一・諸喜田茂充 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 255-261.
 執筆者名 : 佐伯智史・藤田喜久* *前回改訂版 (2005) における藤田による記載内容を一部引用した。

- 和名 : ツブテナガエビ
 分類類 : 十脚目 コエビ下目 テナガエビ科
 学名 : *Macrobrachium gracilirostre* (Miers, 1875)
 方言名 : タナガー・タナゲー (沖縄/総称)、イッピル (石垣島)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

頭胸甲長 25 mm 程度。額角はやや下方へ湾曲し、先端は第 1 触角柄部の第 3 節端部近くに達する。額角上縁に 8~10 歯 (うち頭胸甲上に 5~6 歯)、下縁に 2 歯を有する。第 2 胸脚の大きさや形態は左右ほぼ同じ。頭胸甲と腹節には淡緑色と赤褐色の縦縞が入る。インド洋から西太平洋の熱帯・亜熱帯島嶼に分布し、国内では北琉球 (口永良部島) が分布北限。河川中・上流域に生息し、急流を好む。小卵多産種。河川改修や浚渫などによる生息環境の改変・消失、河口閉塞による回遊阻害が生存の脅威となる。美しい色彩のため飼育種として人気があり、マニアによる乱獲も懸念される。

- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
 原記載 : Miers, E. J., 1875. On some new undescribed species of Crustacea from the Samoa Islands. *The Annals and Magazine of Natural History, 16: 341-344.*
 参考文献 : 諸喜田茂充, 2003. テナガエビ科 Palaemonidae. “琉球列島の陸水生物”, 西田 睦・鹿谷法一・諸喜田茂充 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 255-261.
 執筆者名 : 佐伯智史

- 和名 : テッポウエビ
 分類類 : 十脚目 コエビ下目 テッポウエビ科
 学名 : *Alpheus* cf. *brevicristatus* De Haan, 1844
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし

河口干潟や海草藻場干潟に巣穴を構築して生息する。沖縄県下では沖縄島、西表島などで生息が確認されているが (駒井, 未発表データ)、生息環境が局所的であり、護岸工事、海砂採取などによる干潟環境の消失や改変が本種の生息の脅威となる。大鉗脚の掌部が偏圧され、その指節との関節部分付近に明瞭な横溝を備える、小鉗脚の指部は伸長し、掌部の 2.4 倍を超える、第 3・第 4 胸脚指節がへら状を呈するなどの特徴により認識される。吉郷 (2009) は、眼蓋 (orbital hood) の形態、小鉗脚指部の長さ、色彩の細部において琉球諸島産の標本群が本土産の標本群とは異なることを指摘し、別種である可能性を示唆している。

- 原記載 : De Haan, W., 1833-1849. Crustacea. “Fauna Japonica sive Descriptio Animalium, quae in Itinere per Japoniam, Jussu et Auspiciis Superiorum, Qui Summum in India Batava Imperium Tenent, Suscepto, Annis 1823-1830 Collegit, Notis, Observationibus et Adumbrationibus Illustravit, (Crustacea).”, P.F. Siebold, (ed.), *Lugduni-Batavorum, Leiden, i-xvii+i-xxxi+ix-xvi+1-243, pls. A-J, L-Q, 1-55, circ. table 2.*
 参考文献 : 吉郷英範, 2009. 日本の河口域とアンキアラインで確認されたテッポウエビ科エビ類 (甲殻類: エビ目). *比和科学博物館研究報告, 50: 221-273.*
 執筆者名 : 駒井智幸

- 和名 : オハグロテッポウエビ
 分類類 : 十脚目 コエビ下目 テッポウエビ科
 学名 : *Metabetaeus minutus* (Whitelegge, 1897)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

最大体長 30 mm。第 1 胸脚は左右相称で、はさみは水平に開閉する。大顎の切歯付近に黒斑があり、生時にも頭胸甲を透かして見える。塩分の混じる洞窟地下水域 (陸封潮溜り)。国内では、奄美諸島の沖永良部島、大東諸島の南大東島、宮古諸島の宮古島、伊良部島、多良間島、水納島 (藤田, 印刷中)、八重山諸島の石垣島、黒島、波照間島、小笠原諸島の西之島および父島 (佐々木, 私信) から記録されている。最近の集団遺伝学的研究の結果によれば、本種の沖縄個体群は、南大東島集団と、南琉球集団 (宮古島、多良間島、石垣島) の少なくとも 2 系統に分かれ、額角と眼上棘の形態にも違いが見られる。また、小笠原諸島父島の個体は、沖縄産の個体に比べて、明らかに大きな卵を抱え

<甲殻類>

ることが知られており（佐々木，私信）、別種の可能性がある。

- 原 記 載 : Whitelegge, T., 1897. The Crustacea of Funafuti. *Memoirs of the Australian Museum*, 3: 127-151, pls. 6, 7.
参 考 文 献 : 藤田喜久・砂川博秋, 2008. 多良間島の洞穴性および陸性十脚甲殻類. 宮古島市総合博物館紀要, 12: 53-80.
Weese, D.A., Y. Fujita & S. R. Santos, 2013. Multiple colonizations lead to cryptic biodiversity in an island ecosystem: Comparative phylogeography of anchialine shrimp species in the Ryukyu Archipelago, Japan. *The Biological Bulletin*, 225: 24-41.
藤田喜久 (印刷中). 宮古諸島水納島の十脚甲殻類相. 宮古島市総合博物館紀要, 21.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : キノボリエビ
分 類 : 十脚目 コエビ下目 モエビ科
学 名 : *Merguia oligodon* (De Man, 1888)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

額角は短く、上縁に2~3歯備えるが、下縁に歯は無い。第3顎脚と第1~5胸脚に副肢を欠く。甲長6.2mmに達するが、雄性先熟性の性転換をすることが知られており、甲長4.4mm未満の個体はすべて雄である。本種は、半陸性の生活様式を有する極めて特異なコエビ類であり、特に夜間には陸上で活発に活動することが知られる。本種の生息環境は、河川河口域や内湾域の潮間帯の転石帯、マングローブ林内のヒルギ類の根の間、淡水の湧出が見られるサンゴ礁岩礁海岸である。国内では沖縄諸島の沖縄島、宮古諸島の宮古島と伊良部島（藤田，未発表）、八重山諸島の石垣島と西表島に分布する。

- 原 記 載 : Man, J. G. de, 1888. Report on the Podophthalmous Crustacea of the Mergui Archipelago, collected for the Trustees of the Indian Museum, Calcutta, by Dr. John Anderson, F. R. S., Superintendent of the Museum. *Journal of the Linnean Society of London. Zoology*, 22: 1-312, pls. 1-19.
参 考 文 献 : 諸喜田茂充, 1980. 大浦川・億首川マングローブ湿地付近の動物. 沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告書.
Komai, T., 2002. New record of a semi-terrestrial hippolytid shrimp, *Merguia oligodon* (De Man) (Crustacea: Decapoda: Caridea) from Japan and Thailand. *Natural History Research*, 7(1): 75-82.
藤田喜久, 2009. 宮古島から得られたキノボリエビ. 沖縄生物学会誌, 47: 29-31.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : オトヒメスナモグリ
分 類 : 十脚目 アナエビ下目 スナモグリ科
学 名 : *Calliuxina sakaii* (de Saint Laurent, in de Saint Laurent & Le Loeuff, 1979)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

頭胸甲長10.0mmに達する小型種。額角は棘状に尖る。尾節の背面に棘列はない。眼柄は円筒形で、角膜部は先端近くに位置する。第3顎脚には短い外肢がある。坐節-長節は幅広く、前節・指節も幅広く丸みを帯びる。鉗脚は左右同形同大で、坐節・長節の下縁に目立った棘や突起はない。海草藻場と周辺の砂礫干潟に穴居する。県下では沖縄島と西表島から記録があるだけで（大澤，2012；駒井，未発表）、県外ではタイプ産地である熊本県天草郡から知られるだけである（Sakai, 1966）。生息場所が局所的であり、護岸工事、埋め立て、海砂採取などによる自然環境の改変が本種の生息に脅威となる可能性が高い。

本種は、Sakai (1966) により、*Callianassa (Callichirus) novaebritanniae* Borradaile, 1900 として報告されたが、その後、別種であることが明らかとなり、新種 *Calliuxina sakaii* として記載された（de Saint Laurent, in de Saint Laurent and Le Loeuff, 1979）。さらに、Ngoc-Ho (2003) により、新属として創設された *Calliuxina* Ngoc-Ho, 2003 に移された。

- 原 記 載 : Saint Laurent, M. de & P. Le Loeuff. 1979. Campagnes de la Calypso au large des côtes atlantiques africaines (1956 et 1959) 22. Crustacés Décapodes Thalassinidea. I. Upogebiidae et Callianassidae. *Annales de l'Institut Océanographique*, 55 (fasc. suppl.): 29-101.
参 考 文 献 : Ngoc-Ho, N. 2003. European and Mediterranean Thalassinidea (Crustacea, Decapoda). *Zoosystema* 25(3): 439-555.
大澤正幸, 2012. オトヒメスナモグリ (和名新称). “干潟の絶滅危惧動物図鑑, 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 182.
Sakai, K. 1966. On *Callianassa (Callichirus) novaebritanniae* Borradaile (Thalassinidea, Crustacea) from Japan. *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 14(1): 161-171.

執 筆 者 名 : 駒井智幸

和 名 : トゲオスナモグリ
分 類 : 十脚目 アナエビ下目 スナモグリ科
学 名 : *Cheramus spinicauda* Komai, Maenosono & Fujita, 2014
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

頭胸甲長 7.6 mm に達する小型種。額角は棘状に尖る。尾節の後縁に棘状の刺毛列を具える。第 3 顎脚の坐節-長節は幅広い蓋状を呈する。鉗脚は左右不同で、大鉗脚坐節の下縁には棘の列を具える。小鉗脚不動指の外面に顕著な隆起を生ずる。海草藻場とその周辺の砂干潟に穴居し、潮間帯下部~水深 20 m から記録がある。県下では沖縄島から記録があるだけであり (Komai et al., 2014)、海外を含め、その他の場所からは見つかっていない。生息場所が局所的であり、護岸工事、埋め立て、海砂採取などによる自然環境の改変が本種の生息に脅威となる可能性が高い。

本種の雄標本はこれまで採集例がなく、そのため、雄の特徴が不明であり、属の帰属については暫定的なものとされた (Komai et al., 2014)。

原 記 載 : Komai, T., T. Maenosono & Y. Fujita. 2014. Two new species of ghost shrimp assigned to the genus *Cheramus* Spence Bate, 1888 (Crustacea: Decapoda: Axiidea: Callianassidae) from Okinawa Island, Ryukyu Islands, Japan. *Zootaxa* 3895: 503-524.

参 考 文 献 : 同上

執 筆 者 名 : 駒井智幸

和 名 : **イリオモテアナジャコ (新称)**

分 類 : 十脚目 アナエビ下目 アナジャコ科

学 名 : *Upogebia iriomotensis* Sakai & Hirano, 2006

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

小型のアナジャコ類で、頭胸甲長 12.5 mm に達する。額角の下面に棘はない。頭胸甲の前側突起の発達はやや弱い。眼後縁に小さな棘がある。尾節の背面基部近くに顕著な横走隆起が発達する。第 1 胸脚の不動指は指節とほぼ等長である。河口域の堆積岩の岩盤やマングローブ林内に点在する堆積岩中に巣穴を作って生息する (Sakai & Hirano 2006; 駒井, 未発表)。県下では西表島から記録があるだけで、海外からの記録はない。堆積岩を生息の基盤としており、河口域の造成などの生息環境の改変が本種の生息に大きな影響を与える可能性がある。

原 記 載 : Sakai, K. & Y. Hirano, 2006. Three new species of Upogebiidae (Thalassinidea) from Iriomote Island, Ryukyus, Japan. *Crustaceana*, 79(8): 977-991.

参 考 文 献 : 同上

執 筆 者 名 : 駒井智幸

和 名 : **ミヤケアナジャコ (新称)**

分 類 : 十脚目 アナエビ下目 アナジャコ科

学 名 : *Upogebia miyakei* Sakai, 1967

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

小型のアナジャコ類で、頭胸甲長 6.9 mm に達する。額角の下面に棘はない。頭胸甲の前側突起は突出する。眼後縁には 1 棘を具える。尾節の背面に明瞭な横走隆起は発達しない。第 1 胸脚の不動指は指節より明らかに短く、亜鉗を形成し、性的二型は顕著である。掌部内面には顆粒が散在する。砂泥を基質とした潮間帯転石地に見られる。県下では石垣島と西表島から記録があるだけで、海外からの記録はない。沿岸域の埋立や港湾造成などによる生息環境の改変が本種の生息に大きな影響を与える可能性がある。

原 記 載 : Sakai, K. 1967. Three new species of Thalassinidea (Decapod Crustacea) from South-west Japan. *Publication of the Seto Marine Biological Laboratory*, 15(4): 319-328.

参 考 文 献 : Hirano, Y. & M. Saigusa. 2008. Description of the male of *Upogebia miyakei* from Ryukyu Islands, Japan (Decapoda: Thalassinidea: Upogebiidae). *Journal of the Marine Biological Association of the United Kingdom*, 88(1): 125-131.

執 筆 者 名 : 駒井智幸

和 名 : **ナンヨウトゲアナジャコ**

分 類 : 十脚目 アナエビ下目 アナジャコ科

学 名 : *Upogebia snelli* Ngoc-Ho, 1989

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

小型のアナジャコ類で、頭胸甲長 9.0 mm に達する。額角の下面に顕著な 1 棘を具える。頭胸甲の前側突起は弱く突出する。眼後縁には複数の棘が並ぶ。尾節の背面基部近くに弱い横走隆起が発達する。第 1 胸脚の不動指は指節よりやや短い。掌部内面には大小の棘が不規則な縦列に並ぶ。岩礁海岸の堆積岩の岩盤に巣穴を作って生息する (Sakai & Hirano 2006; 平野ら, 2006)。県下では西表島から記録があるだけで、海外ではインドネシアから報告されている。沿岸域の埋立や港湾造成などによる生息環境の改変が本種の生息に大きな影響を与える可能性がある。

原 記 載 : Ngoc-Ho, N., 1989. Description de trois espèces nouvelles de la famille des Upogebiidae (Crustacea, Thalassinidea). *Bulletin du Muséum national d'Histoire naturelle, Paris, 4e série, 11, section A, no 4: 865-868.*

<甲殻類>

- 参 考 文 献 : 平野優理子・池田英樹・南里敬弘・高田宜武・酒井勝司・三枝誠行. 2006. 潮間帯の砂岩 (西表島) に生息するアナジャコ (*Upogebia snelli* Ngoc-Ho, 1989) の形態と生態. 海洋と生物, 28(1): 95-103.
- Sakai, K., Y. Hirano & M. Saigusa, 2004. A new record of *Upogebia snelli* Ngoc-Ho, 1989 (Thalassinidea, Upogebiidae) from Iriomote Island, Ryukyu Islands, Japan. *Crustaceana*, 77(6): 741-749.

執 筆 者 名 : 駒井智幸

和 名 : トゲユビアナジャコ (新称)
分 類 : 十脚目 アナエビ下目 アナジャコ科
学 名 : *Upogebia spinidactylus* Sakai & Hirano, 2006
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

小型のアナジャコ類で、頭胸甲長 11.1 mm に達する。額角の下面に棘はない。頭胸甲の前側突起の発達はやや弱い、棘を具える。眼後縁には小さな 1 棘がある。尾節の背面基部近くに顕著な横走隆起が発達する。第 1 胸脚の不動指は指節よりやや短い。第 2 胸脚指節の外面に角質の微小な棘が列生する。内湾奥の堆積岩の岩盤に巣穴を作って生息する (Sakai & Hirano 2006)。県下では西表島から記録があるだけで、海外からの記録は現在のところない。堆積岩を生息の基盤としており、生息環境の改変が本種の生息に大きな影響を与える可能性がある。

原 記 載 : Sakai, K. & Y. Hirano, 2006. Three new species of Upogebiidae (Thalassinidea) from Iriomote Island, Ryukyus, Japan. *Crustaceana*, 79(8): 977-991.

執 筆 者 名 : 駒井智幸

和 名 : ドロイワカニダマシ
分 類 : 十脚目 異尾下目 カニダマシ科
学 名 : *Petrolisthes bifidus* Werding & Hiller, 2004
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲はやや縦長で、1 対の前鰓棘を持つ。鉗脚の腕節の前縁に 3 または 4 つの幅広い歯を持つ。歩脚の指節の後縁に 2 棘を持ち、基部の棘の方が小さい。国内では西表島から、国外ではフィリピン、チューク諸島、タヒチから記録されている。沖縄県から記録されているヒロバカニダマシ *P. lamarckii* (Leach, 1820) およびオオヒロバカニダマシ *P. haswelli* Miers, 1884 に形態が似るが、歩脚の指節の後縁に 2 棘 (他種では 3 棘) を持つことにより識別できる。西表島での生息場所は、泥質干潟にある岩の集積に限られている。生息場所の著しい改変、水・底質の汚染は、本種の個体群の消失につながると考えられる。

原 記 載 : Werding, B. & A. Hiller, 2004. Description of a new species of *Petrolisthes* from the western Pacific (Decapoda, Anomura, Porcellanidae). *Crustaceana*, 77: 257-264.

- 参 考 文 献 : Osawa, M. & T. Maenosono, 2011. Two species of the genus *Petrolisthes* (Decapoda: Anomura: Porcellanidae) from the Ryukyu Islands, southwestern Japan, with description of a new species. *New Crustaceans of Japan: Part 2. Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series A, Zoology Supplement*, T. Komai & H. Komatsu (eds.), (5): 109-118.
- 大澤正幸, 2012. ドロイワカニダマシ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 187.

執 筆 者 名 : 大澤正幸

和 名 : シロサンゴヤドカリ
分 類 : 十脚目 異尾下目 ヤドカリ科
学 名 : *Calcinus seurati* Forest, 1951
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

鉗脚および歩脚は平滑で、地色は白色。歩脚の腕節および長節に黒色の縞状の斑紋を持つ。左鉗脚の掌部の外面は、大きく膨らむ。左第 2 歩脚の指節は前節よりやや短い。インド—西太平洋の広域に分布し、国内では沖縄県のほか、伊豆諸島の八丈島から記録されている。波当たりの強い岩礁において、潮間帯上部のタイドプールに生息する。スベスベサンゴヤドカリ *C. laevimanus* (Randall, 1840) に形態が類似しているが、歩脚が褐色ではなく、白色であることにより容易に識別できる。岩礁の潮上帯付近における遊歩道の造成などの改変が、本種の個体群の減少につながる可能性がある。

原 記 載 : Forest, J., 1951. Remarques sur quelques Paguridae du genre *Calcinus* à propos de la description de deux espèces nouvelles de Polynésie orientale: *Calcinus seurati* et *Calcinus spicatus*. *Bulletin de la Société Zoologique de France*, 76: 83-99.

参 考 文 献 : McLaughlin, P. A., D. L. Rahayu, T. Komai & T.-Y. Chan, 2007. A catalog of the hermit crabs (Paguroidea) of Taiwan. *National Taiwan Ocean University, Keelung*, viii+365pp.

執 筆 者 名 : 大澤正幸

和名： ヒルギノボリヨコバサミ
 分類類： 十脚目 異尾下目 ヤドカリ科
 学名： *Clibanarius ambonensis* Rahayu & Forest, 1993
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 該当なし

眼柄の背面の内縁に沿って、暗褐色の細い縦縞を持つ。歩脚の前節の側面に4つの暗褐色の縦縞を持つ。国内では石垣島および西表島から、国外ではインドネシアから記録されている。沖縄県の干潟に多産するツメナガヨコバサミ *C. longitarsus* (De Haan, 1849) に形態および色彩が類似するが、眼柄の背面に細い縦縞を持つことにより容易に識別できる。加えて、ヤエヤマヒルギの小木の幹や根の上で見つかることが多く、干潟底上に生息するツメナガヨコバサミから野外でも判別できる。河口域の護岸造成やマングローブ域の改変が進行すると、個体群が消失する可能性がある。

原記載： Rahayu, D. L. & J. Forest, 1993. Le genre *Clibanarius* (Crustacea, Decapoda, Diogenidae) en Indonésie, avec la description de six espèces nouvelles. Bulletin du Muséum national d'Histoire naturelle, Paris [1992], (4)14(A)(2): 745-779.

参考文献： Osawa, M. & Y. Fujita, 2006. *Clibanarius ambonensis* (Crustacea: Decapoda: Anomura: Diogenidae) from the Ryukyu Islands, southwestern Japan. Marine Biodiversity Records, 1, e16: 19.
 大澤正幸, 2012. ヒルギノボリヨコバサミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 184.

執筆者名： 大澤正幸

和名： ワカクサヨコバサミ
 分類類： 十脚目 異尾下目 ヤドカリ科
 学名： *Clibanarius demani* Buitendijk, 1937
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 該当なし

眼柄は緑色。鉗脚と歩脚は明るい緑褐色。歩脚の長節～前節の側面に、暗褐色の細い線で縁取られた褐色の縦縞を持つ。国内では沖縄島および西表島から、国外ではモーリシャスからベトナム・インドネシアにかけて記録されている。ツメナガヨコバサミ *C. longitarsus* (De Haan, 1849) に形態および色彩がよく似ているが、眼柄が黄褐色ではなく緑色であること、鉗脚と歩脚がより明るい緑褐色であることによりに識別できる。海草のある砂れき底を好み、ツメナガヨコバサミが多数確認されるような泥質底ではほとんど見かけない。生息場所の泥化は本種の消失につながる可能性がある。

原記載： Buitendijk, A. M., 1937. Biological results of the Snellius expedition. IV. The Paguridea of the Snellius Expedition. Temminckia, 2: 251-280.

参考文献： Osawa, M. & R. Yoshida, 2009. Two estuarine hermit crab species of the genus *Clibanarius* (Crustacea: Decapoda: Diogenidae) from the Ryukyu Islands, southern Japan. Species Diversity 14(4): 267-278.
 大澤正幸, 2012. ワカクサヨコバサミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 184.

執筆者名： 大澤正幸

和名： マーグイヨコバサミ
 分類類： 十脚目 異尾下目 ヤドカリ科
 学名： *Clibanarius merguensis* De Man, 1888
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 該当なし

眼柄は橙色で、背面の内縁に沿って青色の縦縞を持つ。歩脚は暗青色で、指節および前節の側面に、背縁が橙色に縁取られた白色部を持つ（第2歩脚の前節において、白色部の範囲は広い）。国内では沖縄島、石垣島、西表島から、国外ではモザンビークからニューカレドニア・台湾にかけて記録されている。沖縄県では、内湾性海岸の潮間帯の転石域において、シマヨコバサミ *C. rhabdodactylus* Forest, 1953 やツマキヨコバサミ *C. emglaucus* Haig & Ball, 1972 などと混在するが、歩脚の色彩パターンにより識別できる。潮間帯の上部付近を生息場所として好むため、護岸整備など海岸の改変による個体群の消失が危惧される。

原記載： Man, J. G De, 1888. Bericht über die im indischen Archipel von Dr. J. Brock gesammelten Decapoden und Stomatopoden. Archiv für Naturgeschichte, [1887], 53: 215-600.

参考文献： McLaughlin, P. A., D. L. Rahayu, T. Komai & T.-Y. Chan, 2007. A catalog of the hermit crabs (Paguroidea) of Taiwan. National Taiwan Ocean University, Keelung, viii+365pp.
 大澤正幸, 2012. シマヨコバサミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 184.

執筆者名： 大澤正幸

和名： マルテツノヤドカリ

<甲殻類>

分 類 : 十脚目 異尾下目 ヤドカリ科
学 名 : *Diogenes avarus* Heller, 1865
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

左鉗脚は右鉗脚より明瞭に大きい。左鉗脚の掌部の外面は多数の小顆粒および小棘に覆われ、中央基部に鈍い稜を持つ、第1歩脚の腕節の前縁にいくつかの棘を持つ。インド-西太平洋の広域に分布し、国内では沖縄島、石垣島、西表島から記録されている。内湾や河口付近の砂泥質干潟に生息するが、見通しの良い開放的な場所で見つかることが多い。沖縄県では、アンパルツノヤドカリ *D. leptocerus* Forest, 1956 と同所的に生息することもあるが、左鉗部の外面に通常黒色の斑紋を持ち、剛毛が少ないことにより識別できる。干潟の埋め立てや護岸整備等により、個体群が減少・消失する可能性がある。

原 記 載 : Heller, C., 1865. Crustaceen. Reise der osterreichischen Fregatte Novara um die Erde in den Jahren 1857, 1858, 1859 unter den Befehlen des Commodors B. von Wüllerstorff-Urbair. Zoologischer Theil. Kaiserlich-königlichen Hofund Staatsdruckerei, Wien, 2(3): 1-280.

参 考 文 献 : McLaughlin, P. A., 2002. A review of the hermit crab (Decapoda: Anomura: Paguridea) fauna of southern Thailand, with particular emphasis on the Andaman Sea, and descriptions of three new species. "Proceedings of the international workshop on the Crustacea in the Andaman Sea, Phuket Marine Biological Center 29 November-20 December, 1998", N. Bruce, M. Berggren, & S. Bussawarit (eds.), Phuket Marine Biological Center, Special Publication, 23(1-2): 385-460.

藤田喜久・大澤正幸, 2012. マルテツノヤドカリ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 185.

執 筆 者 名 : 大澤正幸

和 名 : リュウキュウカクエンコウガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 エンコウガニ科
学 名 : *Notonyx kumi* Naruse & Maenosono, 2009
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲は横長の長方形。背面は無毛・平滑で前後方向に強く膨らむ。額の前縁はほぼ直線状である。甲の前側縁に眼窩外歯以外の歯はない。眼の角膜部は肥大しない。国内では沖縄島、久米島町の奥武島(タイプ産地)、西表島で確認されており、国外ではインドネシアから報告がある。同属の種はインド・西太平洋の熱帯・亜熱帯域に広く分布し、国内ではアマミカクエンコウガニ *N. angulatus* Naruse & Takeda, 2010 が加計呂麻島沖で採集されている。サンゴ礫が混じる粗い砂泥底や海藻藻場などの潮間帯に巣穴を掘って生息する。干潟の埋め立てによる生息地の縮小や消失、護岸整備や防波堤建設による海岸環境の変化が本種の生存に対して脅威になると考えられる。

原 記 載 : Naruse, T. & T. Maenosono, 2009. *Notonyx kumi*, a new species of goneplacid crab (Decapoda: Brachyura) from the Ryukyu Islands, Japan, and Lesser Sunda Islands, Indonesia. "Crustaceans of Japan: Part 1", T. Komai & H. Komatsu (eds.), Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A, Zoology Supplement, (3): 183-189.

参 考 文 献 : 前之園唯史, 2012. リュウキュウカクエンコウガニ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 189.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : マンガルマメコブシガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 コブシガニ科
学 名 : *Philyra nishihirai* Takeda & Nakasone, 1991
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲は菱形で、周囲を顆粒で縁取られている。甲背面は、胃域〜心域の顆粒と鰓域に発達した顆粒からなる稜以外は平滑である。沖縄島、石垣島、西表島より報告されている。汽水域の砂礫・砂泥からなる水路斜面に、パッチ状に分布する。マンガルマメコブシガニは、イリオモテマメコブシガニとアマミマメコブシガニに似るが、鰓域の顆粒が後側縁から前方に列をなして稜状に並んでいることより2種から区別できる。

原 記 載 : Takeda M. & Y. Nakasone, 1991. Three leucosiid crabs of the genus *Philyra* from Okinawa, the Ryukyu Islands, with description of a new species. Bulletin of the National Science Museum, Series A, Zoology, 17(1): 19-24.

参 考 文 献 : 前之園唯史・長井 隆, 2012. マンガルマメコブシガニ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 190.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

和 名 : アマミマメコブシガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 コブシガニ科
学 名 : *Philyra taekoae* Takeda, 1972

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 情報不足 (DD)

形態： 甲は菱形で、周囲を顆粒で縁取られている。甲背面は鰓域と胃域が強く盛り上がり、胃域、鰓域、心域を中心に、大きい顆粒が散在する。沖縄島、石垣島、奄美大島、加計呂麻島、与論島から報告されている。感潮域の砂泥部から河口域最下部の砂礫質の潮間帯に生息する。本種はイリオモテコブシガニに似るが、甲、特に鰓域と胃域が強く盛り上がり、各区域の顆粒も大きいことから区別できる。

原記載： Takeda, M., 1972. A new species of the Leucosiidae (Crustacea, Brachyura) from Amami-Oshima. Bulletin of the Biogeographical Society of Japan, 28(1): 1-4.

参考文献： Takeda M. & Y. Nakasone, 1991. Three leucosiid crabs of the genus *Philyra* from Okinawa, the Ryukyu Islands, with description of a new species. Bulletin of the National Science Museum, Series A, Zoology, 17(1): 19-24.
前之園唯史・長井 隆, 2012. アマミマメコブシガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 191.
三浦知之・三浦 要, 2015. 加計呂麻島の海岸湿地に生息する甲殻類と貝類の記録. Nature of Kagoshima, 41: 209-222.

執筆者名： 成瀬 貫

和名： ヤエヤマヤワラガニ

分類： 十脚目 短尾下目 ヤワラガニ科

学名： *Neorhynchoplax yaeyamaensis* Naruse, Shokita & Kawahara, 2005

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

甲幅5 mmに満たない小型種で、扁平な楕円形の甲と細長い歩脚が特徴的である。石垣島と西表島の固有種である本種は、感潮域上部にある水路斜面の、底質が砂礫や軟泥質になった場所に生息しており、マンガルマメコブシガニ、ミナミムツハリアケガニと同所的に見られる。本種の雌は、腹節が胸部とつながった袋状になっており、その中でゾエア幼生が卵から孵り体外に放される「卵胎性」である可能性が示唆されている。オキナワヤワラガニに似るが、後側縁の外側に前向き棘がないことから区別される。

原記載： Naruse, T., S. Shokita & T. Kawahara, 2005. *Neorhynchoplax yaeyamaensis*, a new false spider crab (Decapoda: Brachyura: Hymenosomatidae) from the Yaeyama Group, the Ryukyu Islands, Japan. Zootaxa, 877: 1-7.

参考文献： 成瀬 貫, 2012. ヤエヤマヤワラガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 192.

執筆者名： 成瀬 貫

和名： ツノナシイボガザミ

分類： 十脚目 短尾下目 ワタリガニ科

学名： *Xiphonectes brockii* (De Man, 1888)

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 情報不足 (DD)

甲幅20 mm程の小型なワタリガニ類である。甲や鉗脚は軟毛に覆われ、額が直線状であり、側縁の最も後ろの歯が他より顕著に大きく、甲の後縁側外側が歯として尖る点の特徴である。西表島の河口部に形成された湾の奥に存在する泥質干潟や、ウミシヨウブなどの海草類が繁茂する潮下帯、マングローブ林内を流れる水路のうち、底質が主に細砂からなる環境にも生息している。インドネシアのアンボンが基産地である。

原記載： Man, J. G. de, 1887-1888. Bericht über die von Herrn Dr. J. Brock im indischen Archipel gesammelten Decapoden und Stomatopoden. Archiv für Naturgeschichte, 53(1): 215-600, pls.7-22, 22a.

参考文献： 成瀬 貫, 2012. ツノナシイボガザミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 193.

執筆者名： 成瀬 貫

和名： アカテノコギリガザミ

分類： 十脚目 短尾下目 ワタリガニ科

学名： *Scylla olivacea* (Herbst, 1796)

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 該当なし

甲幅200 mm、体重2 kgに達する。国内にはノコギリガザミ属は3種(アミメノコギリガザミ、アカテノコギリガザミ、トゲノコギリガザミ)が知られるが、本種は、甲の額の歯が低く丸みを帯びること、生時の体色が鉗脚、歩脚、遊泳脚、腹節に網目状の模様を持たないことで、他の2種と区別することができる。ノコギリガザミ類には現在4種が含まれるが、かつては単一種として扱われており、当時の生息地情報には複数種の情報が含まれている可能性があるため、評価の難しい点が多い。内湾域や河川河口域のマングローブ域の軟泥底に穴を掘って生息する。水産有用種

<甲殻類>

である。

- 原 記 載 : Herbst, J. F. W., 1796. Versuch einer Naturgeschichte der Krabben und Krebse. Berlin and Stralsund, Vol. II(6), pp.163-226. Pls.41-46.
参 考 文 献 : 伏屋玲子・横田賢史・渡邊精一, 2007. 日本のノコギリガザミ属 3 種 における鉗脚の色彩変異による判別. 水産増殖, 55: 265-269.
Keenan, C. P., P. J. F. Davie & D. L. Mann, 1998. A revision of the genus *Scylla* de Haan, 1833 (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Portunidae). Raffles Bulletin of Zoology, 46: 217-245.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : アラモトサワガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
学 名 : *Geothelphusa aramotoi* Minei, 1973
方 言 名 : カーガイ・ハーガイ (沖縄島/総称)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

甲幅 33 mm に達する本種は、甲が平たく、背面は横筋や顆粒に被われる。歩脚は短く、剛毛が生える。沖縄島と伊平屋島の固有種である。沖縄諸島のサワガニ類のうち最も水辺への依存度が高い。普段は水中で生活するが、抱卵期の雌は川岸の石の下などに潜む。稚ガニが孵化すると、水中に放す。上流域の比較的流量が豊富な清流に生息する。主に瀬に多く、石の下やごく浅い穴に潜む。

- 特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern(LC).
原 記 載 : Minei, H., 1973. Potamoid crabs of the Ryukyu Islands, with descriptions of five new species (Crustacea, Decapoda, Potamoidea). Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University, 17: 203-226.
参 考 文 献 : 儀間英美・諸喜田茂充, 1980. 沖縄島与那川におけるサワガニ類の分布. 沖縄生物学会誌, 18: 9-15.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

和 名 : サカモトサワガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 サワガニ科
学 名 : *Geothelphusa sakamotoana* (Rathbun, 1905)
方 言 名 : カーガイ・ハーガイ (沖縄島/総称)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

甲は平坦で、大型個体では比較的背面が盛り上がる。眼窩後方に稜が確認できる。サカモトサワガニはオオサワガニ類に似るが、前者は眼窩後方の稜が比較的是っきりしているのに対し、後者でははっきりせず、後方に対して徐々に盛り上がっている点で区別できる。沖縄島、奄美大島、徳之島、喜界島に分布。卵サイズは 2.8 mm 程である。稚ガニが孵化後、しばらく親の体についているが、170 個体稚ガニを抱えた雌も観察されている。その後稚ガニは川に放され、しばらくは主に河川内で過ごす。水中でも陸上共に利用するサワガニ類で、那覇市内の湧水地などでも見られる。

- 原 記 載 : Rathbun, M. J., 1904-1906. Les crabes d'eau douce (Potamonidae). Archives du Museum d'Histoire naturelle, Paris, 4e série, 6: 225-312, pls.9-18; 7: 159-322; 8: 33-122.
参 考 文 献 : 儀間英美・諸喜田茂充, 1980. 沖縄島与那川におけるサワガニ類の分布. 沖縄生物学会誌, 18: 9-15.
嶺井久勝, 1963. 沖縄島産サカモトサワガニの生息場所および抱卵習性. 九州大学農学部学芸雑誌, 20(4): 365-392.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

和 名 : ヘリトリオカガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 オカガニ科
学 名 : *Discoplax rotunda* (Quoy & Gaimard, 1824)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

甲幅 60 mm に達する。甲は横に長い楕円形で、背面が極端に膨らむことはない。前側縁が縁取られており、和名の由来になっている。後側縁には複数の明瞭な横条線がある。国内では、小笠原諸島の父島、奄美諸島の沖永良部島、大東諸島の北大東島と南大東島、沖縄諸島の渡名喜島、慶良間諸島の慶留間島、宮古諸島の宮古島、伊良部島、多良間島、水納島 (藤田, 印刷中)、八重山諸島の石垣島、黒島、竹富島 (藤田, 投稿中)、波照間島 (藤田, 投稿中)、与那国島 (藤田, 投稿中) から記録がある。主に海岸線の岩礁地帯に生息する。小型個体は洞穴地下水域で良く見つかる。本種の繁殖生態については、1) 産卵期が 7 月～10 月であること、2) 放卵期は満月前後であることが示されている。

- 原 記 載 : Quoy, J. R. C. & J. P. Gaimard, 1824. Zoologie. "Voyage autour du monde entrepris par ordre du roi, exécuté sur les corvettes de S. M. L'Uranie et La Physicienne, pendant les années 1817, 1818, 1819 et 1820.", M. L.

de Freycinet (ed.), 3(2), Pillet aîné, Paris, 1-712.
 参考文献： 前之園唯史, 2016. 琉球列島におけるオカガニ科 2 稀種（十脚目：短尾下目）の新産地報告. Fauna Ryukyuana, 33: 15-17.
 藤田喜久 (印刷中). 宮古諸島水納島の十脚甲殻類相. 宮古島市総合博物館紀要, 21.
 藤田喜久 (投稿中). 先島諸島における希少オカガニ類 4 種の分布記録. Fauna Ryukyuana.

執筆者名： 藤田喜久

和名： ヒメオカガニ
 分類： 十脚目 短尾下目 オカガニ科
 学名： *Epigrapsus notatus* (Heller, 1865)
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT)

甲幅 30 mm 程度の小型種。日本産ヒメオカガニ属には、本種とヤエヤマヒメオカガニが知られるが、本種は、甲の眼窩後方の歯が顕著であること、甲の背面が濃い紫色ではさみ脚がオレンジ色であること、体サイズがより大きくなることなどで、ヤエヤマヒメオカガニと容易に区別することができる。砂浜海岸の植生帯のある場所の流木や石の下、飛沫転石帯、海岸林内の石の下などに生息する。国内では、八丈島、種子島、宮古諸島の宮古島、下地島（藤田、投稿中）、多良間島（藤田、投稿中）、八重山諸島の石垣島、西表島、与那国島（藤田、投稿中）、から記録されている。台湾における本種の繁殖生態の研究では、本種の繁殖期（抱卵期）は、8 月下旬～11 月中旬で、9 月が最盛期である。

原記載： Heller, C., 1865. Crustaceen. Reise der Oserreichischen Fregatte Novara um die Erde in den Jahren 1857, 1858, 1859 unter den Befehlen des Commodore B. von Wüllerstorff-Urbair. Zoologischer Theil, Zweiter Band, 3: 1-280, 25pls.

参考文献： Liu, H.-C., & M.-S. Jeng, 2005. Reproduction of *Epigrapsus notatus* (Brachyura: Gecarcinidae) in Taiwan. Journal of Crustacean Biology, 25: 135-140.
 藤田喜久, 2009. 宮古島のオカガニ類. 宮古島市総合博物館紀要, 13: 53-70.
 藤田喜久 (投稿中). 先島諸島における希少オカガニ類 4 種の分布記録. Fauna Ryukyuana.

執筆者名： 藤田喜久

和名： ムラサキオカガニ
 分類： 十脚目 短尾下目 オカガニ科
 学名： *Gecarcoidea lalandii* H. Milne Edwards, 1837
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT)

甲幅 60 mm に達する。体色は、濃い紫色で美しく、和名の由来になっている。甲の額が狭く甲幅の 1/5 に達しないこと、眼が比較的小さいこと、頬部の毛が少ないこと等から、他の日本産オカガニ類と容易に区別できる。成体は、主に石灰岩岩礁や海岸林内に生息するが、小型個体は海岸の飛沫転石帯から見つかることが多い。国内では、奄美大島、宮古諸島の宮古島、来間島、フデ岩、多良間島、水納島（藤田、印刷中）、八重山諸島の石垣島、鳩間島（藤田、投稿中）、波照間島（藤田、投稿中）、与那国島（藤田、投稿中）から記録されている。

原記載： Milne Edwards, H., 1834-1837. Histoire naturelle des Crustacés comprenant l'anatomie, la physiologie et la classification de ces animaux. Librairie Encyclopédique de Roret, Paris, Vol. 1: i-xxxv, 1-468. Vol. 2: 1-531. Atlas, 1837: 1-32, pls.1-42. Vol. 3, 1840: 1-638.

参考文献： 前之園唯史, 2016. 琉球列島におけるオカガニ科 2 稀種（十脚目：短尾下目）の新産地報告. Fauna Ryukyuana, 33: 15-17.
 藤田喜久 (印刷中). 宮古諸島水納島の十脚甲殻類相. 宮古島市総合博物館紀要, 21.
 藤田喜久 (投稿中). 先島諸島における希少オカガニ類 4 種の分布記録. Fauna Ryukyuana.

執筆者名： 藤田喜久

和名： アカカクレイワガニ
 分類： 十脚目 短尾下目 イワガニ科
 学名： *Geograpsus stormi* De Man, 1895
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 該当なし

甲は暗赤色または黒色で、鉗脚と歩脚は鮮やかな赤色。甲の背面は膨らみが弱く、胃域と鰓域が横条で覆われる。甲の側縁は後方に向かって僅かに広がり、眼窩外歯の後方に前鰓歯を 1 つ具える。鉗脚の長節の内下縁は板状に張り出し、その前縁は鋭い鋸歯状になる。指部の先端はスプーン状にならない。県内では、硫黄島、沖縄島（前之園、未発表）、宮古島（前之園、未発表）、石垣島、黒島、与那国島、北大東島、南大東島、北小島（尖閣諸島）、県外では八丈島、父島、中之島、宝島から報告されている。国外ではインド・西太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布する（タイプ産地：スマトラ島）。琉球石灰岩から成る岩礁海岸の潮上帯に生息する。自然海岸の埋め立てや護岸整備などが本種の生存に対して脅威になる。

原記載： Man, J. G. de, 1895. Bericht über die von Herrn Schiffscapitän Storm zu Atjeh, an den westlichen Küsten von Malakka, Borneo und Celebes sowie in der Java-See gesammelten Decapoden und Stomatopoden. Zweiter

Theil. Zoologische Jahrbücher, Abtheilung für Systematik, Geographie und Biologie der Thiere, 9(1): 75-218.

参 考 文 献 : Sakai, T., 1976. Crabs of Japan and the Adjacent Seas. Kodansha, Tokyo.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : マルガオベンケイガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
学 名 : *Chiromantes leptomerus* Davie & Ng, 2013
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲は台形に近い横長の楕円形で、前側縁に眼窩外歯以外の歯はない。額は幅広く、強く下垂する。国内では沖縄県のみ分布し、沖縄諸島の沖縄島および古宇利島、大東諸島の南大東島、宮古諸島の宮古島、下地島、フデ岩、八重山諸島の波照間島および与那国島から報告されている。国外では台湾に分布する。琉球石灰岩からなる岩礁海岸の高潮線より上部に生息し、岩盤の隙間や転石下に潜んでいる。自然海岸の埋め立てや護岸整備などが本種の生存に対して脅威になる。国内の個体群は、これまでハワイベンケイガニ *C. obtusifrons* として報告されてきたが、近年の分類学的な再検討の結果、ハワイ諸島の種とは異なることが分かり新種記載された。その後、この新種に対してマルガオベンケイガニの新称が与えられた。

原 記 載 : Davie, P. J. F. & P. K. L. Ng, 2013. A review of *Chiromantes obtusifrons* (Dana, 1851) (Decapoda: Brachyura: Sesarmidae), with descriptions of four new sibling-species from Christmas Island (Indian Ocean), Guam and Taiwan. *Zootaxa*, 3609(1): 1-25.

参 考 文 献 : 藤田喜久, 2016. 宮古諸島フデ岩の陸棲・半陸棲十脚甲殻類. 宮古島市総合博物館紀要, (20): 37-52.

執 筆 者 名 : 前之園唯史・藤田喜久

和 名 : ハマベンケイガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
学 名 : *Metasesarma aubryi* (A. Milne-Edwards, 1869)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲は僅かに幅広い長方形。甲の表面は無毛でほぼ平滑。甲の前側縁に眼窩外歯以外の歯はない。甲は黒色や褐色。額域の直後に黄色の横帯を具える。鉗脚は全体的に赤く、指部の先端は白い。国内での確認記録は石垣島と西表島のみ。国外では東インド洋・西太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布する (タイプ産地: ニューカレドニア)。同属のイワトビベンケイガニは、額域直後に黄色の横帯がないことで本種と容易に区別できる。海岸林に生息し、日中は転石の下などに潜んでいる。自然海岸の埋め立て、護岸整備、海岸林の伐採などが本種の生存に対して脅威になる。

原 記 載 : Milne-Edwards, A., 1869. Notes sur quelques nouvelles espèces du genre *Sesarma* (Say). *Nouvelles Archives du Muséum d'Histoire naturelle*, 5 (Bulletin): 25-31.

参 考 文 献 : 佐伯智史・西垣孝治・前之園唯史, 2010. 西表島と石垣島より採集されたハマベンケイガニ (甲殻 亜門: 十脚目: 短尾下目: ベンケイガニ科) の記録. 沖縄生物学会誌, (48): 35-43.

執 筆 者 名 : 前之園唯史・佐伯智史

和 名 : イワトビベンケイガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
学 名 : *Metasesarma obesum* (Dana, 1851)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

最大甲幅約 20 mm の小型種。甲はやや横長の四角形で、額は下方に下がり、その幅は甲幅の半分以上で眼窩外歯間の幅の約 0.6 倍。国内では種子島、屋久島、奄美大島、加計呂麻島、沖縄島、久米島、宮古島、多良間島、水納島 (藤田, 印刷中)、石垣島、西表島、黒島、与那国島 (藤田, 投稿中) から記録されている。海岸の飛沫転石帯に生息しており、同所的に生息するヤエヤマヒメオカガニと共に、同環境における指標種となっている。

参 考 文 献 : Komai, T., T. Nagai, A. Yogi, T. Naruse, Y. Fujita & S. Shokita, 2004. New records of four grapsoid crabs (Crustacea: Decapoda: Brachyura) from Japan, with notes on four rare species. *Natural History Research*, 8(1): 33-63.

藤田喜久 (印刷中). 宮古諸島水納島の十脚甲殻類相. 宮古島市総合博物館紀要, 21.

藤田喜久 (投稿中). 与那国島におけるハマベンケイガニとイワトビベンケイガニの新産地記録. *Fauna Ryukyuana*.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : オオアシハラガニモドキ

分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
 学 名 : *Neosarmatium fourmanoiri* Serène, 1973
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

最大甲幅48.3 mm。甲はほぼ四角形で、あまり膨らまない。前側縁には眼後歯を含む2歯がある。雄の鉗脚の可動指背面には角質化した隆起が先端近くまで並ぶが、この隆起は強大ではない。国内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島、国外では台湾、オーストラリア北東部、フレンチポリネシアに分布する。マングローブ林内やアシ原周辺の柔らかい泥質を好んで生息する。

原 記 載 : Serène, R., 1973. Notes sur quelques espèces de brachyours Nouvelle-Calédonie. Cahiers du Pacifique, 17: 119-161.

参 考 文 献 : Davie, P. J. F., 1994. Revision of *Neosarmatium* Serène and Soh (Crustacea : Brachyura : Sesarminae) with descriptions of two new species. *Memoirs of the Queensland Museum*, 35(1): 35-74.
 諸喜田茂充・長井 隆・山崎貴之・長松俊樹, 2001. 宮古島島尻マングローブ域の甲殻類の分布と現存量および生活史. “マングローブに関する調査研究報告書”, 財団法人亜熱帯総合研究所 (編), 財団法人亜熱帯総合研究所, 那覇, 88-97.
 長井 隆・成瀬 貫・前之園唯史・藤田喜久・駒井智幸, 2011. 琉球列島におけるアシハラガニモドキ属とその近似属 (甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目) の種の再検討と分布状況. 沖縄生物学会誌, 49: 15-36.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫 (加筆・長井 隆)

和 名 : ヒナアシハラモドキ
 分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
 学 名 : *Neosarmatium laeve* (A. Milne-Edwards, 1869)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲幅約 11 mm の小型種。甲はやや横長の四角形で、最大幅が眼窩外歯間にあり、後方に向かい幅が狭まる。前側縁には眼窩外歯を含み 2 歯ある。雄の鉗脚可動指背面に 4-5 歯ある。国内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、国外ではセイシェル諸島、インドネシア東部、フィリピン、ソロモン諸島に分布している。河口付近やマングローブ林床の高潮線よりやや高い場所の転石下に生息する。

原 記 載 : Milne-Edwards, A., 1869. Notes sur quelques nouvelles espèces du genre *Sesarma* (Say). *Nouvelle Archiv du Muséum d'Histoire naturelle*, Paris, 5, 25-31.

参 考 文 献 : 渡部哲也・和田恵次, 2002. 西表島から国内初記録されたベンケイガニ科の2種. *南紀生物*, 44 (2): 111-113.
 長井 隆・成瀬 貫・前之園唯史・藤田喜久・駒井智幸, 2011. 琉球列島におけるアシハラガニモドキ属とその近似属 (甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目) の種の再検討と分布状況. 沖縄生物学会誌, 49: 15-36.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫 (加筆・長井 隆)

和 名 : ヨコスジベンケイガニ
 分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
 学 名 : *Parasesarma dumacense* (Rathbun, 1914)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲は幅広い長方形で、前側縁に眼窩外歯以外の歯はない。鉗部はオレンジ色で、雄の掌部上面には剛毛が櫛歯状に 2 列並び、可動指上面にはドーム状の顆粒が 8~10 個並ぶ。国内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島で確認されている。国外の記録はタイプ産地であるフィリピンのみ。河川の感潮域の最上部に生息し、日中は泥質の河岸に掘った巣穴に潜んでいる。河川の護岸整備などによる生息環境の悪化や消失、堰などの人工構造物による回遊阻害が本種の生存に対して脅威になると考えられる。近年、台湾からも発見された *P. kuekenthali* (De Man, 1902) (タイプ産地: インドネシア) は、ヨコスジベンケイガニと極めて酷似している。両種の異同についてタイプ標本に基づいた再検討が必要である。

原 記 載 : Rathbun, M. J., 1914. New species of crabs of the families Grapsidae and Ocypodidae. *Scientific results of the Philippine Cruise of the Fisheries Steamer "Albatross." 1907-1910. No. 31, Proceedings of the United States National Museum*, 47(2044): 69-85.

参 考 文 献 : 前之園唯史・成瀬 貫, 2015. 琉球列島のカクベンケイガニ属 (甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目: ベンケイガニ科) 6 種の形態的特徴と分類学的諸問題. *Fauna Ryukyuan*, 23: 1-41.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : ツメナガベンケイガニ
 分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
 学 名 : *Parasesarma lepidum* (Tweedie, 1950)

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー： 該当なし

甲は幅広い長方形で、前側縁に眼窩外歯以外の歯はない。鉗部は掌部が黄褐色で指部は鮮やかな赤色。雄の掌部上面には剛毛が櫛歯状に3(稀に4)列並び、可動指上面には短い間隔で16~20個の顆粒が並ぶ。国内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島で確認されている。国外では東南アジアに分布する(タイプ産地:マレーシア)。河川の感潮域上部に生息し、日中は泥質の河岸に掘った巣穴に潜んでいる。河川の護岸整備などによる生息環境の悪化や消失、堰などの人工構造物による回遊阻害が本種の生存に対して脅威になると考えられる。本種は、パラオから記載された *P. palauense* (Takeda, 1971) に極めて酷似している。両種の異同についてタイプ標本に基づいた再検討が必要である。

原記載： Tweedie, M. W. F., 1950. Grapsoid crabs from Labuan and Sarawak. Sarawak Museum Journal, 5(2): 338-369.

参考文献： 前之園唯史・成瀬 貫, 2015. 琉球列島のカクベンケイガニ属(甲殻亜門:十脚目:短尾下目:ベンケイガニ科)6種の形態的特徴と分類学的諸問題. Fauna Ryukyuna, 23: 1-41.

執筆者名： 前之園唯史

和名： ミズギワベンケイガニ

分類： 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科

学名： *Parasesarma liho* Koller, Liu & Schubart, 2010

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー： 該当なし

甲は正方形に近く、前側縁に眼窩外歯以外の歯はない。鉗部はオレンジ色で、雄の掌部上面には剛毛が櫛歯状に2列並び、可動指上面には間隔を空けて9~12個の顆粒が並ぶ。国内では沖縄島、宮古島、石垣島で確認されている。国外では台湾(タイプ産地)とフィリピンに分布する。河川の感潮域の最上部やその直上に生息し、日中は水際の転石下や水面に張り出した岩盤の隙間などに潜んでいる。河川の護岸整備などによる生息環境の悪化や消失、堰などの人工構造物による回遊阻害が本種の生存に対して脅威になると考えられる。本種とほぼ同時期に記載された *P. paucitorum* Rahayu & Ng, 2009 (タイプ産地:インドネシア) や *P. cognatum* Rahayu & Li, 2013 (タイプ産地:台湾) は、本種と極めて酷似している。これら3種の異同についてタイプ標本に基づいた再検討が必要である。

原記載： Koller, P., H.-C. Liu & C. D. Schubart, 2010. A new semiterrestrial species of *Parasesarma* De Man, 1895, from Taiwan (Decapoda, Brachyura, Sesarmidae). Studies on Malacostraca: Lipke Bijdeley Holthuis Memorial Volume, C. H. J. M. Franssen, S. De Grave & P. K. L. Ng (eds.), Crustaceana Monographs, (14): 357-368.

参考文献： 前之園唯史・成瀬 貫, 2015. 琉球列島のカクベンケイガニ属(甲殻亜門:十脚目:短尾下目:ベンケイガニ科)6種の形態的特徴と分類学的諸問題. Fauna Ryukyuna, 23: 1-41.

執筆者名： 前之園唯史

和名： ミゾテアシハラガニ

分類： 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科

学名： *Sarmatium striaticarpus* Davie, 1992

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー： 該当なし

甲は正方形に近く、非常に厚みがあり、平滑である。前側縁には眼窩外歯を入れて鈍角の3歯を備える。雄の鉗脚掌部上面の指節との間接部に沿い、角質化した歯が並ぶ。その基部側に、間接部と平行に約3対の溝と隆起が並び、さらにその基部方向に溝と隆起が斜めに横たわる。国内では奄美大島、沖縄島、藪地島、宮古島、石垣島、西表島、国外ではフィリピン、マレーシア、シンガポールに分布する。マングローブ林内やその後背林、水路際などに穴を掘るか、水路に面した干潟では、高潮線付近の転石の下などでも見られる。本種と同属のギザテアシハラガニが石垣島と西表島に生息しているが、前者の雄の鉗脚掌部上面の溝と隆起の列がすべて平行ではないのに対し、後者はすべて平行であることから見分けられる。

原記載： Davie, P. J. F., 1992. Revision of *Sarmatium* Dana (Crustacea: Brachyura: Sesarminae) with descriptions of three new species. Memoirs of the Queensland Museum, 32(1): 79-97.

参考文献： 長井 隆・成瀬 貫・前之園唯史・藤田喜久・駒井智幸, 2011. 琉球列島におけるアシハラガニモドキ属とその近似属(甲殻亜門:十脚目:短尾下目)の種の再検討と分布状況. 沖縄生物学会誌, 49: 15-36.

執筆者名： 成瀬 貫(加筆・長井 隆)

和名： アシナガベンケイガニ

分類： 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科

学名： *Sesarmoides kraussi* (De Man, 1887)

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー： 該当なし

甲幅25 mmで、甲は後方に向けて強く広がり、台形状を呈する。歩脚が非常に長く、第3歩脚の長さが最大甲幅の2.6~2.8倍ある。鉗脚の掌部下から不動指の外部表面に10~14個の小瘤を有する。国外ではマレー半島(タイ、マレー

シア、シンガポール)、カリマンタン島 (マレーシア)、メルグイ諸島、国内では、沖縄島、宮古諸島の宮古島、伊良部島、八重山諸島の石垣島および西表島から記録されている。本種は、主にマングローブ域の潮上帯の岩礁、転石下 (飛沫転石帯)、倒木下などに生息するが、このような環境は、道路拡張や遊歩道整備などの開発の影響を受け易い場所でもあるため、注意を払う必要がある。

- 参 考 文 献 : Komai, T., T. Nagai, A. Yogi, T. Naruse, Y. Fujita & S. Shokita, 2004. New records of four grapsoid crabs (Crustacea: Decapoda: Brachyura) from Japan, with notes on four rare species. *Natural History Research*, 8(1): 33-63.
藤田喜久, 2013. 宮古初記録のアシナガベンケイガニ. 宮古島総合博物館紀要, 17: 81-86.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : **タイワンベンケイガニ**
分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
学 名 : *Sesarmops impressus* (H. Milne Edwards, 1837)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲は眼窩外歯から後方にかけて広がるが、第3歩脚基部の上部あたりから後方にかけては狭まる。前側縁には窩外歯の後ろに小さな歯が一つある。国内では沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島、国外では台湾、フィリピン、フィジー、サモア、マレー半島、東アフリカに分布する。感潮域上部から中流域の河岸に巣穴を掘るか、もしくは石の下で見られる。

- 原 記 載 : Milne Edwards, H., 1834-1837. Histoire naturelle des Crustacés comprenant l'anatomie, la physiologie et la classification de ces animaux. Paris, Librairie Encyclopédique de Roret. Vol. 1: i-xxxv, 1-468. Vol. 2: 1-531. Atlas, 1837: 1-32, pls.1-42. Vol. 3, 1840: 1-638.

- 参 考 文 献 : Sakai, T., 1976. Crabs of Japan and the adjacent seas. In three volumes ; English text, xxix + 773pp., Japanese text, p. 461, plate volume, p.251, Kodansha, Tyokyo.
丸村真弘・小阪 晃, 2003. 永井誠二コレクションカニ類標本目録, 和歌山県立自然博物館, 74pp.
McLay, C. & P. A. Ryan, 1990. The terrestrial crabs *Sesarma* (*Sesarmops*) *impressum* and *Geograpsus crinipes* (Brachyura, Grapsidae, Sesarminae) recorded from the Fiji Islands. *Journal of the Royal Society of New Zealand*, 20(1): 107-118.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫 (加筆・長井 隆)

和 名 : **スマトライワベンケイガニ**
分 類 : 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科
学 名 : *Stelgistra stormi* (De Man, 1895)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

最大甲幅20 mm程度。甲は前方から後方に向けて狭くなり、額は広く、下方に強く下がっている。国外ではインドネシアのスマトラ島北部と台湾南部に分布し、国内では、沖縄諸島の沖縄島、宮古諸島の宮古島、水納島 (藤田, 印刷中)、八重山諸島の西表島から記録されている。石灰岩岩礁域に生息するが、水面上1~1.5 mほど上部の岩礁の裂け目や穴の中に潜んでいる。可動指の先端がスプーン状になっており、これを用いて岩の表面に生えた藻類などを削り取るようにして食べる。

- 原 記 載 : Man, J. G de, 1895. Bericht über die von Herrn Schiffscapitän Storm zu Atjeh, an den westlichen Küsten von Malakka, Borneo und Celebes sowie in der Java-See gesammelten Decapoden und Stomatopoden. Zweiter Theil. *Zoologische Jahrbücher, Abteilung für Systematik, Geographie und Biologie der Tiere*, 9: 75-218.

- 参 考 文 献 : Ng, P. K. L. & H.-C. Liu, 1999. The taxonomy of *Sesarma tangi* Rathbun, 1931 and *S. stormi* De Man, 1895 (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Grapsidae: Sesarminae), with establishment of a new genus for *S. stormi*. *Zoological Studies*, 38(2): 228-237.

- Komai, T., T. Nagai, A. Yogi, T. Naruse, Y. Fujita & S. Shokita, 2004. New records of four grapsoid crabs (Crustacea: Decapoda: Brachyura) from Japan, with notes on four rare species. *Natural History Research*, 8(1): 33-63.
藤田喜久 (印刷中). 宮古諸島水納島の十脚甲殻類相. 宮古島市総合博物館紀要, 21.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : **アシナガアカイソガニ**
分 類 : 十脚目 短尾下目 モクズガニ科
学 名 : *Cyclograpsus longipes* Stimpson, 1858
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲の側縁は後方に向かい明瞭に広がる。眼窩外歯の後方に2つの切れ込みがあるが、後方のものは極めて不明瞭である。前胃域の前縁の稜は明瞭である。雄の眼窩下縁の稜には、内側に2つの長い顆粒と外側に1つの短い顆粒が並ぶ。歩脚は細長い。県内では沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島、県外では父島 (タイプ産地)、大阪港、与論島

<甲殻類>

から採集記録がある。国外では東インド洋から南太平洋までの熱帯・亜熱帯域に広く分布する。比較的波あたりの強い転石海岸に多い。自然海岸の埋め立てによる生息地の縮小や消失、護岸整備や防波堤建設による海岸環境の変化が本種の生存に対して脅威になると考えられる。

原 記 載 : Stimpson, W., 1858. Prodomus descriptionis animalium evertebratorum, quae in Expeditione ad Oceanum Pacificum Septentrionalem, a Republica Federata missa, Cadwaladaro Ringgold et Johanne Rodgers ducibus, observavit et descripsit. Pars. V. Crustacea Ocyropoidea. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 10: 93-110.

参 考 文 献 : Sakai, T., 1976. Crabs of Japan and the Adjacent Seas. Kodansha, Tokyo.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : マメイソガニ

分 類 : 十脚目 短尾下目 モクズガニ科

学 名 : *Gopkittisak angustum* Komai, 2011

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

甲幅15 mm程の小型種で、甲は横長の楕円形であり、背面に細い隆起が走る。雄の鉗脚は長く、左右同大である。西表島とフィリピンのパンラオ島からのみ報告されている本種は、河口部に形成された湾の奥の砂質干潟やその潮下帯に縦穴を掘って生息している。本属にはもう1種 *G. gallardoi* (Serène & Soh, 1976) がアンダマン海、パキスタン、ベトナムから報告されている。

原 記 載 : Komai, T., 2011. A new species of the varunid crab genus *Gopkittisak* (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Grapsoidea) from the Ryukyu Islands. *Species Diversity*, 16: 103-111.

参 考 文 献 : 駒井智幸・成瀬 貫, 2012. マメイソガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 200.

前之園唯史・成瀬 貫, 2016. 琉球列島におけるヒライソガニ亜科 2 稀種 (十脚目: 短尾下目: モクズガニ科) の新産地報告. *Fauna Ryukyuna*, 28: 1-3.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

和 名 : ケフサアシハラガニ

分 類 : 十脚目 短尾下目 モクズガニ科

学 名 : *Parahelice daviei* (Sakai, Türkay & Yang, 2006)

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー : 該当なし

甲幅11 mm程の小型種で、頭胸甲は厚く、甲を背面から見ると四角形に近い。雄の鉗部の可動指及び不動指の基部外面には短毛が密生する。雄の眼窩下部の顆粒列のうち、最外部に円形の大きな顆粒が離れてあり、その内側の横向きのY字型で細長い隆起がある。国内では石垣島と沖縄島より報告されている本種は、感潮域上部の水際にある礫の下や、オヒルギ林などから確認されている。ミナミアシハラガニに似るが、上述の雄の特徴により区別できる。また、本種はナダケフサアシハラガニから、雄の眼窩下部の顆粒列の違いや、鉗部可動指の咬合部がS字状 (ナダケフサアシハラガニでは直線状) であることから区別できる。

原 記 載 : Sakai, K., M. Türkay & S.-L. Yang, 2006. Revision of the *Helice/Chasmagnathus* complex (Crustacea: Decapoda: Brachyura). *Abhandlungen der Senckenbergischen Naturforschenden Gesellschaft*, 565: 1-77.

参 考 文 献 : 西垣孝治・佐伯智史・成瀬 貫, 2011. 石垣島より採集された日本初記録のケフサアシハラガニ属 (新称) (甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目: モクズガニ科) 2 種の記録. *沖縄生物学会誌*, 49: 85-93.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

和 名 : ナダケフサアシハラガニ

分 類 : 十脚目 短尾下目 モクズガニ科

学 名 : *Parahelice pilimana* (A. Milne-Edwards, 1873)

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー : 該当なし

甲幅 11 mm 程の小型種で、頭胸甲は厚く、甲を背面から見ると四角形に近い。雄の鉗部の可動指及び不動指の基部外面には短毛が密生する。雄の眼窩下部の顆粒列のうち、最外部に円形の大きな顆粒があり、その内側に円形の橋台付近の砂泥底より採集されている。ミナミアシハラガニに似るが、上述の雄の特徴により区別できる。また、本種はケフサアシハラガニから、雄の眼窩下部の顆粒列の違いや、鉗部可動指の咬合部が直線状 (ケフサアシハラガニではS字状) であることから区別できる。

原 記 載 : Milne-Edwards, A., 1873. Recherches sur la faune carcinologique de la Nouvelle-Calédonie, II. Nouvelles Archives du Muséum d'Histoire naturelle, Paris 9: 155-332, plates 4-18.

参 考 文 献 : 西垣孝治・佐伯智史・成瀬 貫, 2011. 石垣島より採集された日本初記録のケフサアシハラガニ属 (新称) (甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目: モクズガニ科) 2 種の記録. *沖縄生物学会誌*, 49: 85-93.

執筆者名： 成瀬 貫

和名： **アゴヒロカワガニ**
 分類： 十脚目 短尾下目 モクズガニ科
 学名： *Ptychognathus altimanus* (Rathbun, 1914)
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 該当なし

甲幅 17 mm 以上になるヒライソモドキ属としてはやや大型の種である。甲は四角形に近く、第3・4歩脚前節はやや幅広く、その内縁には毛が密生し、雄の鉗部は大きく発達する。和歌山県、屋久島、奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島などから報告がある。本種は河川上流の淡水域及びその付近の塩分のある感潮域の礫砂質底に生息し、他のヒライソモドキ類から、前側縁に3歯あり、雄の不動指外面に軟毛がなく、鉗脚腕節内角の棘が長くなることから区別できる。

原記載： Rathbun, M. J., 1914. New species of crabs of the families Grapsidae and Ocypodidae. Proceedings of the United States National Museum, 47(2044): 69-85.
 参考文献： 嶺井久勝, 1972. 日本産イワガニ類 2 種の分布と生態学的知見. 九州大学農学部学芸雑誌, 27(1/2): 49-53.

執筆者名： 成瀬 貫

和名： **ハチジョウヒライソモドキ**
 分類： 十脚目 短尾下目 モクズガニ科
 学名： *Ptychognathus hachijoensis* Sakai, 1955
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 該当なし

甲はやや幅広い。眼窩外歯後方の切れ込みは不明瞭。雄では、鉗脚の指部の基部に明瞭な羽毛束を持つ。歩脚の前節と指節の後縁に羽毛状の剛毛が列生する。沖縄県内では沖縄島と与那国島、県外では八丈島（タイプ産地）から記録がある。国外では台湾と南太平洋のウォリス・フツナから報告がある。眼窩外歯後方の切れ込みが不明瞭なこと、歩脚の前節と指節の後縁に羽毛状の剛毛が列生することにより、国内の同属他種から区別できる。海岸の湧水などのように、海に直接淡水が流れ出る環境の小石帯に生息する。自然海岸の埋め立てによる生息地の縮小や消失、護岸整備や防波堤建設による海岸環境の変化が本種の生存に対して脅威になると考えられる。また、淡水の影響が強い環境を好むため、内陸部の開発による陸水（地下水含む）の涸渇や水質悪化の影響も受けやすいと考えられる。

原記載： Sakai, T., 1955. Further notes on the brachyuran Crustacea of the Hachijo Island. Records of Oceanographic Works in Japan, 2(1): 193-202.
 参考文献： 武田正倫・奥野淳兒, 2014. ハチジョウヒライソモドキ. “レッドデータブック東京 2014 東京都の保護上重要な野生生物種（島しょ部）解説版”, 東京都環境局自然環境部（編）, 東京都環境局自然環境部, 東京都, 532.

執筆者名： 前之園唯史

和名： **コウビロヒライソモドキ（新称）**
 分類： 十脚目 短尾下目 モクズガニ科
 学名： *Ptychognathus insolitus* Osawa & Ng, 2006
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 該当なし

甲は幅広く楕円形に近い。眼窩外歯後方の切れ込みは不明瞭。雄では、鉗脚の指部の基部に明瞭な羽毛束を持つ。歩脚は細長い。県内では伊是名島（タイプ産地）と沖縄島に分布し、県外では奄美大島に分布する。国外の記録は台湾のみ。甲が著しく幅広いことと歩脚が細長いことにより、同属他種から容易に区別できる。河口の小石帯に生息する。比較的川幅が狭く、干潮時には河口までほぼ淡水となるような小河川を好む。河川開発による生息環境の悪化や消失、赤土流入による河床環境の悪化、農薬などの流入による水質悪化が大きな脅威となる。また、河口部に生息するため海岸開発の影響も受けやすいと考えられる。本種にはこれまで標準和名が提唱されていなかった。本種は、甲が著しく幅広いことから、標準和名として「コウビロヒライソモドキ」を提唱する。標準和名の基準となる標本には、千葉県立中央博物館海の博物館に保管されている本種のホロタイプ (CMNH-ZC 1960) を指定する。

原記載： Osawa, M. & N. K. Ng, 2006. A new species of *Ptychognathus* Stimpson, 1858 (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Varunidae) from the Ryukyu Islands, southwestern Japan. Zootaxa, 1260: 57-66.
 参考文献： 李政璋, 2015. 臺灣的擬相手蟹與折顎蟹（十足目：短尾下目：方蟹總科）兩種新紀錄. 台灣生物多樣性研究, 17(1): 49-57.

執筆者名： 前之園唯史・大澤正幸

和名： **ヨツハヒライソモドキ**
 分類： 十脚目 短尾下目 モクズガニ科

<甲殻類>

学 名 : *Ptychognathus takahashii* Sakai, 1939
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

甲幅 10 mm 程の小型種。甲は四角形に近いが、後方に向けて徐々に狭くなる。前側縁は、眼窩外歯を含めて和名の通り 4 歯になるが、眼窩外歯 (= 第 1 歯) とその直後の第 2 歯の境界は小さな窪みにより区切られているのみである。沖縄島、西表島、与那国島のほか、台湾、江ノ島、八丈島から報告されている。生息環境は、海岸の高潮線付近に直接淡水が滝のように流れ込んだり、あるいは湧き出ししたりしている場所の転石の下に生息する。

原 記 載 : Sakai, T., 1939. Studies on the crabs of Japan. IV. Brachygnatha, Brachyrhyncha. Yokendo Co., Tokyo, pp. 365-741, figs 1-129, pls 42-111, table 1.
参 考 文 献 : 仲宗根幸男・伊礼美和子, 2003. イワガニ科 Grapsidae. “琉球列島の陸水生物”, 西田 睦・鹿谷法一・諸喜田茂充 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 272-282.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

和 名 : トリウミアカイソモドキ
分 類 : 十脚目 短尾下目 モクズガニ科
学 名 : *Sestrostoma toriumii* (Takeda, 1974)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲は幅広い楕円形。背面はドーム型に膨らみ、表面には微小な小孔が散在するが肉眼では平滑に見える。甲の側縁は完縁で薄板状に縁取られる。歩脚は比較的細長い。県内では沖縄島、石垣島、西表島から報告されている。県外では、北は太平洋側で宮城県 (タイプ産地)、日本海側で佐渡島から、南は奄美大島や加計呂麻島まで採集記録がある。国外では韓国と香港から採集されている。内湾や河口の砂泥底質の干潟に生息し、アナジャコ科やスナモグリ科の巣穴内に共生することが知られている。埋め立てによる干潟の縮小や消失、護岸整備や防波堤建設による潮流の変化が本種の生存に対して脅威になると考えられる。

原 記 載 : Takeda, M., 1974. Accounts of some crabs from Mutsu Bay, with description of a new grapsid from Onagawa Bay. The Bulletin of the Marine Biological Station of Asamushi, Tohoku University, 15(1): 13-21.
参 考 文 献 : 伊谷 行, 2012. トリウミアカイソモドキ (トリウミアカイソガニ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 205.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : レンゲガニ (新称)
分 類 : 十脚目 短尾下目 モクズガニ科
学 名 : *Scutumara enodis* Ng & Nakasone, 1993
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲長は最大でも 6 mm 程度の小型種。甲は僅かに縦長で、背面は無毛・平滑である。甲の前側縁には眼窩外歯を含め 3 歯を具えるが、後方の 2 歯は不明瞭である。本種の確認記録は沖縄島、瀬底島 (タイプ産地)、石垣島に限られ、県外や国外からの報告はない。同属の *S. laniger* と *S. miyakei* は、ともにインドネシアに分布する。国内で類似する種との識別はロッカクイソガニの項を参照。比較的自然度の高い海岸の高潮線付近に生息し、堆積したサンゴ礫や転石の下に潜んでいる。海岸の埋め立てによる生息地の縮小や消失、護岸整備や防波堤建設による海岸環境の変化が本種の生存に対して脅威になると考えられる。本種にはこれまで標準和名が提唱されていなかった。本種は、甲が食器のレンゲに似ているため「レンゲガニ」の標準和名を提唱する。標準和名の基準となる標本には、リーコンチャン自然史博物館に保管されている本種のホロタイプ (ZRC 1993. 1) を指定する。

原 記 載 : Ng, P. K. L. & Y. Nakasone, 1993. *Scutumara enodis*, a new genus and species of grapsid crab (Decapoda: Grapsidae) from Okinawa, Ryukyus, Japan. Crustacean Research, (22): 1-6.
参 考 文 献 : Ng, N. K. & T. Komai, 2000. On the male of *Scutumara enodis* Ng & Nakasone, 1993 (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Grapsidae). Proceedings of the Biological Society of Washington, 113(1): 48-53.

執 筆 者 名 : 前之園唯史・成瀬 貫

和 名 : ニセモクズガニ
分 類 : 十脚目 短尾下目 モクズガニ科
学 名 : *Utica gracilipes* White, 1847
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲幅約 35 mm になるやや大型の種である。甲は平坦で、長さや幅がほぼ同じ。前側縁は前方に向かって狭くなり、3 歯を備える。後側面は平板状になる。額後方の稜はないが、胃城を中心とした Y 字形の稜と心域から鰓域に横に伸びる稜がある。河口の積み重なった石の下や、水路の感潮域上部に生息しており、国内では石垣島、西表島、宮古島、久米島、屋久島から記録がある。沖縄県からはニセモクズガニと同じヒラモクズガニ属に属するヒラモクズガニが分

布するが、前者は後者から、額後方の稜が顕著でない点と、胃域を中心とした Y 字形の稜があることから区別できる。

- 原 記 載 : White, A., 1847. Short descriptions of some new species of Crustacea in the Collection of the British Museum. Proceedings of the Zoological Society of London, 15: 84-86.
- 参 考 文 献 : 成瀬 貫, 2012. ニセモクズガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 206.
- 藤田喜久・北村崇明, 2010. 宮古島崎田川にて採集されたツノナガスマエビとニセモクズガニ. 宮古島市総合博物館紀要, 14: 115-121.
- 藤田喜久・仲宗根一哉・金城孝一・玉城不二美・上野大輔, 2012. 久米島儀間川および白瀬川における河川環境と河川動物群集の現状. 久米島博物館紀要, 12: 35-87.
- Naruse, T., H.-T. Shih, N. K. Ng & H.-L. Hsu, 2005. On two new records of varunid crabs (Crustacea: Brachyura: Varunidae) from southern Taiwan. Collection and Research, 18: 69-79.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

- 和 名 : カワスナガニ
- 分 類 : 十脚目 短尾下目 ムツハアリアケガニ科
- 学 名 : *Deiratonotus japonicus* (Sakai, 1934)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

甲幅約 10 mm の小型種。甲は横長で丸みのある六角形で、背面は平たく横に走る浅い溝が数本ある。はさみ脚・歩脚ともに短い。感潮域上部の砂礫質の場所に生息する本種は、房総半島から沖縄島の各地から報告があり、沖縄島が分布の南限の日本固有種。

- 原 記 載 : Sakai, T., 1934. Brachyura from the coast of Kyushu, Japan. Science Reports of the Tokyo Bunrika Daigaku, section B, 1(25): 281-330.
- 参 考 文 献 : Kawane, M., K. Wada, J. Kitaura & K. Watanabe, 2005. Taxonomic re-examination of the two camptandriid crab species *Deiratonotus japonicus* (Sakai, 1934) and *D. tondensis* Sakai, 1983, and genetic differentiation among their local populations. Journal of Natural History, 39(45): 3903-3918.
- 朝倉 彰・森上 霈, 2007. 千葉県河口域のカニ類. 海洋と生物, 29(4): 355-365.
- 和田恵次, 2012. カワスナガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 208.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

- 和 名 : コウナガカワスナガニ
- 分 類 : 十脚目 短尾下目 ムツハアリアケガニ科
- 学 名 : *Moguai elongatum* (Rathbun, 1931)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

甲長 8 mm に満たない小型種。甲は縦長、背面は起伏に富む。はさみ脚は非常に短い。干潮時は淡水が流れるが、満潮時には海水の強い影響を受け、底質が細砂である環境に生息している。また、マングローブの感潮域上付近近くを流れる水路脇の、砂が溜まった岸の上に穴を掘っていることがある。石垣島、西表島、台湾、中国福建省、香港、海南島から報告されている。国内には本種に似るヨウナシカワスナガニ *Paramoguai pyriforme* (Naruse, 2005) が生息しているが、本種は甲の前方が後方より極端に狭くならない点から区別できる。

- 原 記 載 : Rathbun, M. J., 1931. New and rare Chinese crabs. Lingnan Science Journal, 8: 75-104, pls.5-15.
- 参 考 文 献 : Hsueh & P.-W. & P. K.L. Ng, 2008. Two unrecorded genera and species of brachyuran crabs (Decapoda: Camptandriidae, Pilumnidae) from Taiwan, with a note on *Cancer semicylindrus* Fabricius, 1798. Raffles Bulletin of Zoology, Supplement, 19: 99-103.
- 成瀬 貫, 2012. コウナガカワスナガニ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 208.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

- 和 名 : ハサミカクレガニ
- 分 類 : 十脚目 短尾下目 ムツハアリアケガニ科
- 学 名 : *Mortensenella forceps* Rathbun, 1909
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲幅 7 mm ほどの小型種。甲は横長の丸みを帯びた台形で、歩脚は比較的長い。鉗脚は雄も左右同大である。泥砂底や砂質の干潟で、干潮時も完全に乾ききらず少し掘ると水が湧き出るような環境に見られる。タデジマユムシ、スジユムシ、スジホシムシモドキ、ヒモイカリナマコ等の巣穴内に見られるが、地表を歩いている個体も観察できる。奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島、中国 (香港、海南島)、タイ (Koh Chang) などから報告されている。

- 原 記 載 : Rathbun, M. J., 1909. New crabs from the Gulf of Siam. Proceedings of the Biological Society of Washington, 22: 107-114.

<甲殻類>

参考文献：成瀬 貫，2012. ハサミカクレガニ，“干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”，日本ベントス学会（編），東海大学出版会，秦野市，209.
小菅丈治，2009. 石垣島におけるハサミカクレガニの生態—特に複数の動物門に属する無脊椎動物の巣孔内に生息する習性—。沖縄生物学会誌，47：3-9.

執筆者名：成瀬 貫

和名：ヨウナシカワスナガニ
分類：十脚目 短尾下目 ムツハアリアケガニ科
学名：*Paramoguai pyriforme* (Naruse, 2005)
カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

甲長6 mmほどの小型種。甲は縦長の洋梨状で、背面には正中線上に稜があり、起伏に富む。はさみ脚は非常に短い。感潮域下部で、底質が砂礫や軟泥質の場所に生息する。奄美大島、加計呂麻島と沖縄島から報告されている。国内には本種に似るコウナガカワスナガニ *Moguai elongatum* (Rathbun, 1931) が生息しているが、本種は甲の前方が後方より極端に狭くならない点から区別できる。

原記載：Naruse, T., 2005. Species of *Moguai* Tan and Ng, 1999 (Decapoda: Brachyura: Camptandriidae) from brackish waters in the Ryukyu Islands, Japan, with the description of a new species. Zootaxa, 1044: 57-64.
参考文献：成瀬 貫，2012. ヨウナシカワスナガニ，“干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”，日本ベントス学会（編），東海大学出版会，秦野市，209.
Kishino, T., A. Nomoto, T. Yonezawa, S. Kimura & K. Wada, 2014. Supplemental description of a rare brackish-water crab, *Moguai pyriforme* Naruse, 2005 (Decapoda: Brachyura: Camptandriidae), with an emphasis on male morphology. Fauna Ryukyuna, 10: 1-8.
Ahyong, S. T., 2014. *Paramoguai kavieng*, a new genus and species of camptandriid crab from Papua New Guinea (Crustacea: Brachyura). Zootaxa, 3856(4): 578-584.

執筆者名：成瀬 貫

和名：ミナミムツハアリアケガニ
分類：十脚目 短尾下目 ムツハアリアケガニ科
学名：*Takedellus ambonensis* (Serène & Moosa, 1971)
カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：該当なし

甲幅甲長ともに5 mm程の小型種。前側縁に眼窩外歯を含み3歯ある。歩脚は短めで、長節先端部前後部が伸長し、尖る。甲や歩脚に黒く短い剛毛が目立つ。国内では奄美大島、加計呂麻島、石垣島、西表島、沖縄島から報告があり、基産地はインドネシアのアンボンで、他にパラオからの記録もある。感潮域下部にある水路の、底質が砂礫や軟泥質の場所に生息する。

原記載：Serène, R. & M. K. Moosa, 1971. New and few known species of Brachyura from Ambon. Marine research in Indonesia, 11: 1-18.
参考文献：成瀬 貫，2012. ミナミムツハアリアケガニ，“干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”，日本ベントス学会（編），東海大学出版会，秦野市，209.
三浦知之，2012. 奄美大島住用川河口域に生息する甲殻類と貝類の記録. Nature of Kagoshima, 38: 55-61.
三浦知之・三浦 要，2015. 加計呂麻島の海岸湿地に生息する甲殻類と貝類の記録. Nature of Kagoshima, 41: 209-222.

執筆者名：成瀬 貫

和名：ホルトハウスオサガニ
分類：十脚目 短尾下目 オサガニ科
学名：*Macrophthalmus (Paramareotis) holthuisi* Serène, 1973
カテゴリー：絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：該当なし

額は幅広く、眼窩外歯の後方に2つの前鰓歯を具える。口腔の前方中央には縦走する稜がある。眼柄は太い。掌部内面は無毛である。可動指の咬合縁には、基部付近に小さな歯を具える。その他の形態はタイワンヒメオサガニの項を参照。国内では沖縄島、石垣島、西表島から報告されている。国外からの記録はインドネシアのビアク島（タイプ産地）のみ。内湾や河口のマングローブ干潟に生息し、マングローブ林内の潮溜まりに巣穴を掘って棲んでいる。干潟の埋め立てやマングローブ林の伐採による生息地の縮小や消失、護岸整備や防波堤建設による潮流の変化が本種の生存に対して脅威になると考えられる。

特記事項：筆者は「干潟の絶滅危惧動物図鑑」において、本種が巣穴を掘る様子は観察されていないと記したが、近年の調査により、通常のおサガニ型の巣穴を掘っていることが観察された。
原記載：Serène, R., 1973. Notes on Indo-West Pacific species of *Macrophthalmus* (Crustacea, Brachyura). Zoologische Mededelingen, 46(8): 99-116, pls.I-IV.

参 考 文 献 : 前之園唯史, 2012. ホルトハウスオサガニ, “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 212.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : **メナガオサガニ**
 分 類 : 十脚目 短尾下目 オサガニ科
 学 名 : *Macrophthalmus (Macrophthalmus) serenei* Takeda & Komai, 1991
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

額は比較的狭い。眼窩外歯の後方に2つの前鰓歯を具え、眼窩外歯または第1前鰓歯の先端において甲幅は最大となる。口前部の中央は緩やかに膨らむ。眼柄は著しく長く、その全長の約4割は眼窩に納まらない。雄の鉗部の不動指咬合縁には明瞭な1歯を具え、その頂部は咬合縁の全長の3/4程の位置にある。県内では、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島から採集記録があり、県外では能登半島から九州まで分布する。国外ではインド洋・西太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布する (タイプ産地: 紅海)。底質が砂や砂礫の潮間帯下部や潮下帯に生息する。埋め立てによる生息地の縮小や消失、護岸整備や防波堤建設による潮流の変化が本種の生存に対して脅威になると考えられる。

原 記 載 : Takeda, M. & T. Komai, 1991. Japanese species of the *Macrophthalmus telescopicus* complex (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Ocypodidae). Bulletin of the National Science Museum, Series A, Zoology, 17(4): 165-171.

参 考 文 献 : Nagai, T., T. Watanabe & T. Naruse, 2006. *Macrophthalmus (Macrophthalmus) microfylacas*, a new species of sentinel crab (Decapoda: Brachyura: Ocypodidae) from western Japan. Zootaxa, 1171: 1-16.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : **リュウキュウシオマネキ**
 分 類 : 十脚目 短尾下目 スナガニ科
 学 名 : *Tubuca coarctata* (H. Milne Edwards, 1852)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

甲幅 25 mm 程度。甲の額域は狭く (甲幅の 0.05 倍)、眼後棘は側方に強く張り出し、眼柄は太く短い (眼柄の長さは幅の 7.67 倍)。眼窩下縁部の内縁に顆粒列を有する。雄の大鉗脚の掌部表面に多数の顆粒を有し、指節に1本の溝がある。本種は、琉球列島の奄美大島以南から西部太平洋域に広く分布しており、沖縄県内では、沖縄諸島の沖縄島と久米島、宮古諸島の宮古島、八重山諸島の石垣島と西表島から記録されている。河川河口部の干潟域やマングローブ域の底質が軟泥の場所に生息する。

原 記 載 : Milne Edwards, H., 1852. Observations sur les affinités zoologiques et la classification naturelle des Crustacés. Annales des Sciences naturelles, série 3, 18: 109-166.

参 考 文 献 : 吉郷英範, 2001. 日本のシオマネキ属と広島県内におけるハクセンシオマネキの分布. 比婆科学, 200: 1-12.
 藤田喜久・上野大輔, 2011. 久米島のシオマネキ類. 久米島自然文化センター紀要, 11: 93-103.
 Shih, H.-T., J.-H. Lee, P.-H. Ho, H.-C. Liu, C.-H. Wang, H. Suzuki & S.-J. Teng, 2016. Species diversity of fiddler crabs, genus *Uca* Leach, 1814 (Crustacea: Ocypodidae), from Taiwan and adjacent islands, with notes on the Japanese species. Zootaxa, 4083(1): 57-82.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : **シモフリシオマネキ**
 分 類 : 十脚目 短尾下目 スナガニ科
 学 名 : *Austruca triangularis* (A. Milne Edwards, 1873)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

甲幅 1.5 cm 程度の小型種。甲の額域は幅広く (最大甲幅の約 0.2 倍)、眼後棘は側方に良く張り出すため、菱形を呈する。甲背面および雄の大鉗脚には白色および黒色の小斑紋が散在し、和名の由来となる霜降り模様を呈する。本種は、琉球列島の奄美大島以南からインド-西部太平洋域に広く分布しており、沖縄県内では、沖縄諸島の沖縄島と久米島、八重山諸島の石垣島と西表島から記録されている。河川河口域の底質が岩盤で表面に泥土の堆積した場所、礫まじりの砂泥底質の干潟、マングローブ林内などに生息する。

原 記 載 : Milne-Edwards, A., 1873. Recherches sur la Faune Carcinologique de la Nouvelle-Caledonie, II. Nouvelles Archives du Muséum d'Histoire naturelle, Paris, 9, 155-332, pls.4-18.

参 考 文 献 : 吉郷英範, 2001. 日本のシオマネキ属と広島県内におけるハクセンシオマネキの分布. 比婆科学, 200: 1-12.
 藤田喜久・上野大輔, 2011. 久米島のシオマネキ類. 久米島自然文化センター紀要, 11: 93-103.
 鈴木廣志・勝廣光・常田 守, 2015. シモフリシオマネキの奄美大島における初記録. Nature of Kagoshima, 41: 187-189.
 Shih, H.-T., J.-H. Lee, P.-H. Ho, H.-C. Liu, C.-H. Wang, H. Suzuki, & S.-J. Teng, 2016. Species diversity of

fiddler crabs, genus *Uca* Leach, 1814 (Crustacea: Ocypodidae), from Taiwan and adjacent islands, with notes on the Japanese species. *Zootaxa*, 4083(1): 57-82.

執筆者名 : 藤田喜久

和名 : カワラピンノ
分類類 : 十脚目 短尾下目 カクレガニ科
学名 : *Nepinnotheres cardii* (Bürger, 1895)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

雄より大きくなる雌の甲幅が9 mm程に達する本種は、カワラガイの外套膜内に寄生する。宿主のカワラガイは海草藻場の砂泥底に生息している。国内では沖縄島と石垣島から報告があり、国内ではインド、タイ湾、フィリピン (基産地)、オーストラリアなどにも分布する。

原記載 : Bürger, O., 1895. Ein Beitrag zur Kenntniss der Pinnotherinen. *Zoologischen Jahrbüchern*, 8: 361-390.
参考文献 : Ahyong, S. T. & D. E. Brown, 2003. Description of *Durckheimia lochi* n. sp., with an annotated check-list of Australian Pinnotheridae (Crustacea: Decapoda: Brachyura). *Zootaxa*, 254: 1-20.
渡部哲也, 2012. カワラピンノ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 217.
小菅丈治, 2014. 石垣島におけるカワラピンノ (甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目: カクレガニ科) のカワラガイ (軟体動物門: 二枚貝綱: ザルガイ科) への寄生状況. *沖縄生物学会誌*, 52: 59-64.

執筆者名 : 成瀬 貫

5) 情報不足 (DD)

和名 : メナガオサガニハサミエボシ
分類類 : 完胸上目 ヒメエボシガイ科
学名 : *Octolasmis unguisiformis* Kobayashi & Kato, 2003
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

柄部および頭状部は赤色、殻板 (plate) は白色。柄部は頭状部より短く、角質化した plate は、頭状部の 60%以上を覆う。scutum は 2 枚の plate に分かれており、柄部に近い plate は幅広い長方形をしている。tergum には 3 つの突起がある。国外からの報告例はなく、琉球列島の固有種である可能性が高い。主にミナミメナガオサガニ *Macrophthalmus milloiti* Crosnier, 1965 の鉗脚基部付近に付着する。県内では沖縄島と藪地島から記録がある。ミナミメナガオサガニは県内の砂泥底の潮間帯～潮下帯浅部に優占する種であるが、宿主の棲息場所に必ず本種も見られるわけではないようである。こうした干潮域のカニ類の鉗脚付近を選好して付着していることから、極めて特異な生態をもつエボシガイである。そのため、干潟の埋め立てや護岸造成など、宿主生息環境の悪化による個体数の減少が懸念される。

原記載 : Kobayashi, C., & M. Kato, 2003. Sex-biased ectosymbiosis of a unique cirripede, *Octolasmis unguisiformis* sp. nov., that resembles the chelipeds of its host crab, *Macrophthalmus milloiti*. *Journal of Marine Biological Association of the United Kingdom*, 83: 925-930.
参考文献 : 加藤 真, 2012. メナガオサガニハサミエボシ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 174.
Sawada, K., R. Yoshida, K. Yasuda, S. Yamaguchi, & Y. Yusa, 2015. Dwarf males in the epizoic barnacle *Octolasmis unguisiformis* and their implications for sexual system evolution. *Invertebrate Biology*, 134(2): 162-167.

執筆者名 : 吉田隆太

和名 : オオバヌマエビ (新称)
分類類 : 十脚目 コエビ目 スマエビ科
学名 : *Caridina macrodentata* Cai & Shokita, 2006
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

甲長 4.8 mm ほどの小型種。額角は直線状で短く、第 1 触角柄部の第 2 節中央まで達する。額角上縁に大きな歯が 12～15 歯あり、そのうち後方の 2～3 歯は頭胸甲上にある。下縁には 3～5 歯ある。本種は上方を樹木に覆われた流れの早い沢に生息しており、今までに石垣島と西表島から採集されている。日本産の他のヌマエビ類に比べ、額角上縁の歯が大きいため、新称・オオバヌマエビを提唱する。

特記事項 : IUCN カテゴリー : Data Deficient (DD).
原記載 : Cai, Y. & S. Shokita, 2006. Atyid shrimps (Crustacea: Decapoda: Caridea) of the Ryukyu Islands, southern

参 考 文 献 : Japan, with descriptions of two new species. Journal of Natural History, 40(38-40): 2123-2172.
 鈴木廣志・成瀬 貫, 2011. 日本の淡水産甲殻十脚類. “エビ・カニ・ザリガニ—淡水甲殻類の保全と生物学”, 川井唯史・中田和義 (編), 生物研究社, 東京, 39-73, 121-122, 口絵 1-12.

執 筆 者 名 : 成瀬 貫

和 名 : **ガマヌマエビ (新称)**
 分 類 : 十脚目 コエビ下目ヌマエビ科
 学 名 : *Caridina okinawa* Cai & Shokita, 2006
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

1967年に沖縄島読谷村の洞窟地下水域から採集された雌1個体(甲長6.5mm)を基に記載された。額角は短く、第1触角柄部の第2節の先端付近までで、上縁に12歯、下縁に5小歯を備える。角膜が発達せず、眼は退化傾向を示している。原記載以降、標本が得られておらず、詳しい生態や現況については不明である。本種にはこれまで標準和名が提唱されていなかったため、Cai & Shokita (2006) の原記載に用いられた標本 (USNM-123426) に基づき、新標準和名としてガマヌマエビを提唱する。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー: Data Deficient (DD).
 原 記 載 : Cai, Y. & S. Shokita, 2006. Atiid shrimp (Crustacea: Decapoda: Caridea) of the Ryukyu Islands, southern Japan, with descriptions of two new species. Journal of Natural History, 40: 2123-2172.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : **クラヤミヌマエビ (仮称)**
 分 類 : 十脚目 コエビ下目ヌマエビ科
 学 名 : *Caridina* sp.
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

宮古島の1カ所の洞窟の地下水流(淡水)から記録されたヒメヌマエビ属の一種で、眼が退化傾向を示している。額角は極めて短く、第1触角柄部の第1節の先端付近までしか達しない。また、額角上縁および下縁の中央から先端付近にかけて小歯を備えるが、歯数には変異がある。日本産の既知種とは容易に識別でき、未記載種の可能性も含め、現在、分類学的研究が進められている。小卵多産種。本種が生息する洞窟の周辺では土地改良工事が行われており、今後注意を要する。同所的にアシナガヌマエビ、トゲナシヌマエビ、コンジテンナガエビが生息することが知られている。

原 記 載 : 藤田喜久, 2007. 宮古の湧水に生息する十脚甲殻類. 平良市総合博物館紀要, 11: 89-110.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : **ミヤコヌマエビ (仮称)**
 分 類 : 十脚目 コエビ下目ヌマエビ科
 学 名 : *Caridina* sp.
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

宮古島の2カ所の洞窟地下水域から採集されたヒメヌマエビ属の一種で、眼が退化傾向を示している。アシナガヌマエビに酷似するが、額角が著しく長く(第1触角柄部先端をはるかに超えて伸長し、額角長は甲長よりも長くなる)、額角上縁および下縁の歯数も多いことで容易に区別することができる。また、本種とアシナガヌマエビとは、遺伝的にも異なっていることが明らかになっている。本種が生息する洞窟地下水域は、アンキアライン(陸封潮溜り)環境であり、塩分も比較的高い。未記載種の可能性が高く、現在、分類学的研究が進められている。

原 記 載 : Weese, D. A., Fujita, Y., Hidaka, M., & Santos, S. R., 2012. The long and short of it: Genetic variation and population structure of the anchialine atiid shrimp *Caridina rubella* in Miyako-jima, Japan. Journal of Crustacean Biology, 32: 109-117.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : **チュラテナガエビ (仮称)**
 分 類 : 十脚目 コエビ下目テナガエビ科
 学 名 : *Macrobrachium* sp.
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

宮古島、石垣島、西表島から記録されたテナガエビ属の一種で、日本産の既知種とは形態および体色が著しく異なっており、容易に識別できる。第2胸脚の形態は、雌雄および体サイズにより大きく変わるが、採集された標本数も少ないため、未だ分類学的地位は定まっていない。自然環境の良く残された河川の中・上流部の瀬、あるいは湧水を起

<甲殻類>

源とする流れの早い小水路に生息する。個体数が極めて少なく、また、生息する河川環境の悪化も進んでおり、今後注意を要する種である。宮古島の生息地では、大規模な改良工事が行われ、現在では生息が確認できなくなっている。

原 記 載 : 藤田喜久, 2007. 宮古の湧水に生息する十脚甲殻類. 平良市総合博物館紀要, 11: 89-110.

執 筆 者 名 : 藤田喜久

和 名 : ハシボソテッポウエビ
分 類 : 十脚目 コエビ下目 テッポウエビ科
学 名 : *Alpheus dolichodactylus* Ortmann, 1890
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

大鉗はエドワールテッポウエビ型。小鉗は雌雄ともに毛冠状ではない。小鉗の指部は著しく細長く、指部を閉じた際には咬合面に広い隙間を生じる。第3胸脚の指節はへら状になる。県内では沖縄島で採集されている。タイプ産地は東京湾だが近年見つかっていない。国外からの採集報告はない。沖縄島では軟泥質の河口干潟で採集されている。河川開発による生息環境の悪化や消失、赤土流入による河床環境の悪化、農業などの流入による水質悪化が大きな脅威となる。また、河口部に生息するため海岸開発の影響も受けやすいと考えられる。本種と形態が酷似した複数の種が知られ (*A. malabaricus* 同胞種群)、さらにこの種群には未記載隠蔽種が含まれている可能性も指摘されている。

原 記 載 : Ortmann, A. E., 1890. Die Decapoden-Krebse des Strassburger Museums, mit besonderer Berücksichtigung der von Herrn Dr. Döderlein bei Japan und bei den Liu-Kiu-Inseln gesammelten und z. Z. im Strassburger Museum aufbewahrten Formen. I. Die Unterordnung Natantia Boas. Zoologische Jahrbücher, Abtheilung für Systematik, Geographie und Biologie der Thiere, 5(3): 437-542, pls. XXXVI-XXXVII.

参 考 文 献 : 野村恵一, 2012. ハシボソテッポウエビ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 180.

執 筆 者 名 : 前之園唯史

和 名 : リュウキュウユムシテッポウエビ (新称)
分 類 : 十脚目 コエビ下目 テッポウエビ科
学 名 : *Alpheus echiurophilus* Anker, Komai & Marin, 2015
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

頭胸甲長 13 mm に達する中型種。額角は短い。大鉗脚掌部は側扁し、指節との関節付近に横溝がある。不動指側にも明瞭な横溝がある。雄の小鉗は弱い毛冠型を呈する。第2胸脚腕節の第1分節は第2分節よりもやや長い。県内では、沖縄島と石垣島から記録がある (Anker et al., 2015)。干潟や転石地に生息するスジユムシなどのユムシ類の巣穴からのみ採集されていて、強い共生関係が示唆される。ごく近年見つけた種であるため「情報不足」としたが、生息する干潟の環境の悪化が進んでおり、今後注意を要する。

原 記 載 : Anker, A., T. Komai & I. Marin, 2015. A new echiuran-associated snapping shrimp (Crustacea: Decapoda: Alpheidae) from the Indo-West Pacific. Zootaxa 3914: 441-455.

参 考 文 献 : 同上

執 筆 者 名 : 駒井智幸

和 名 : アナモリノコギリテッポウエビ (新称)
分 類 : 十脚目 コエビ下目 テッポウエビ科
学 名 : *Salmoneus brucei* Komai, 2009
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

頭胸甲長 6.3 mm に達する小型のエビ類。甲表は平滑。頭胸甲前縁～額角にかけては三角形に突出し、眼上棘はない。鉗脚は左右異形で、腕節-長節の関節で強く折り曲げられ、たたみこむことができる。指部には顕著な剛毛を生じ、咬合縁には鋸歯状に歯が並ぶ。県下では、西表島と石垣島から記録されているが (Komai, 2009; 駒井, 未発表)、海外からの記録はない。砂干潟のスナモグリ科の巣穴から採集されており、強い共生関係が示唆される。ごく近年見つけた種であるため「情報不足」としたが、生息する干潟の環境の悪化が進んでおり、今後注意を要する。

原 記 載 : Komai, T., 2009. A new species of the alpheid shrimp genus *Salmoneus* (Decapoda: Caridea) from the Ryukyu Islands, Japan, associated with callianassid ghost shrimp (Decapoda: Thalassinidea). Crustaceana, 82: 869-880.

参 考 文 献 : 同上

執 筆 者 名 : 駒井智幸

和 名 : イバラアナジャコ (新称)
分 類 : 十脚目 アナエビ下目 アナジャコ科

学名 : *Upogebia saigusai* Sakai & Hirano, 2006
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

小型のアナジャコ類で、唯一知られる標本であるホロタイプの頭胸甲長は 11.4 mm である。額角の下面に棘はない。頭胸甲の前側突起はやや発達し、その上縁に棘を具える。眼後縁には棘が列生する。尾節の背面基部近くに顕著な横走隆起が発達する。第 1 胸脚の不動指は指節より明らかに短い。掌部の内面には強大な棘が複数の列に配置される。県下では西表島のミタラ川河口から記録があるだけで、海外からの記録はない。ごく近年見つかった種である上、採集例に乏しいため「情報不足」としたが、生息する河口域の環境の悪化が進んでおり、今後注意を要する。

原記載 : Sakai, K. & Y. Hirano, 2006. Three new species of Upogebiidae (Thalassinidea) from Iriomote Island, Ryukyus, Japan. *Crustaceana*, 79(8): 977-991.

参考文献 : 同上

執筆者名 : 駒井智幸

和名 : **サンゴカニダマシ**
 分類 : 十脚目 異尾下目 カニダマシ科
 学名 : *Enosteoides melissa* (Miyake, 1942)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

甲の背面は膨らみ、凹凸を持つ。鉗脚および歩脚は多数の軟毛を持つ。歩脚は細い。インドー西太平洋の広域から記録されているが、国内では沖縄島および西表島のみから知られている。沖縄県から記録されているパラオカニダマシ *E. palauensis* Nakasone & Miyake, 1968 およびツノカニダマシ *E. lobatus* Osawa, 2009 からは、額角や歩脚の形態、生時の色彩により識別できる。干潟の砂礫・海草域に生息するトウゾクテッポエビ *Alpheus rapax* Fabricius, 1798 が作る巣穴から主に見つかっているが、出現頻度は少ない。干潟の泥化とともに、棲み場所を提供するテッポウエビ類の個体数の減少が、本種の個体群の消失につながると考えられる。

原記載 : Miyake, S., 1942. Studies on the decapod crustaceans of Micronesia. III. Porcellanidae. The Palau Tropical Biological Station Studies, 2: 329-379.

参考文献 : Osawa, M., 2009. New records of three species of the genus *Enosteoides* Johnson, 1970 (Decapoda: Anomura: Porcellanidae) from Japan, with description of a new species. "New Crustaceans of Japan. ed T. Komai & H. Komatsu, (eds.) Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A (Zoology), Supplement 3: 157-166.

大澤正幸, 2012. サンゴカニダマシ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 187.

執筆者名 : 大澤正幸

和名 : **ヤドリムツアシガニ**
 分類 : 十脚目 短尾下目 ムツアシガニ科
 学名 : *Hexapinus simplex* Rahayu & Ng, 2014
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 該当なし

甲幅 16 mm 程になる種で、甲は横長の台形であり、甲幅は甲長の 1.5~1.6 倍ほどである。甲の前側縁は大きく窪み、後側縁は波打ち、2つの隆起を有す。甲背面は小さい穴が散在するが、比較的浅く大きい穴に背面全体が覆われたりはない。第 3 顎脚座節が内側に強く伸長する。第 1~3 歩脚長節の外側から縦長の溝を欠く。本種は、国内では英虞湾、紀伊半島、大阪湾、高知、天草、沖縄島、奄美大島、与論島、沖縄島、西表島などから記録があり、国外ではシンガポール、ロンボク島 (インドネシア)、南シナ海、台湾、中国などから採集されている。本種は、西表島では泥質~砂泥質の干潟から潮下帯に生息するツバサゴカイの棲管に共生している。本種は、本州に分布するムツアシガニ *Hexapinus latipes* (De Haan, 1835) より、上述の甲の前・後側縁の形状、及び甲背面の穴の状態と分布により区別できる。なお、渡部 (2012) が「ムツアシガニ」として記述している内容は、本種の事を示している。

原記載 : Rahayu, D. L. & P. K. L. Ng, 2014. New genera and new species of Hexapodidae (Crustacea, Brachyura) from the Indo-West Pacific and east Atlantic. *Raffles Bulletin of Zoology*, 62: 396-483.

参考文献 : 渡部哲也, 2012. ムツアシガニ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野市, 190.

締次美徳・木村昭一・木村妙子, 2016. 本州初記録のヤドリムツアシガニ (新称) *Hexapinus simplex* Rahayu & Ng, 2014. *南紀生物*, 58(2): 157-161.

成瀬 貫・渡部哲也・吉田隆太 (印刷中). ムツアシガニ類 6 種の分布と生息環境に関する追加情報、及び和名の整理. *Fauna Ryukyuna*.

執筆者名 : 成瀬 貫

和名 : **イルンティムツアシガニ**
 分類 : 十脚目 短尾下目 ムツアシガニ科
 学名 : *Mariaplax narusei* Rahayu & Ng, 2014

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 該当なし

甲幅12 mmほどの本種は、甲は横長の丸みを帯びた台形状であり、甲幅は甲長の1.7倍ほどである。第3顎脚座節は内側に伸長せず、長節より幅広い。第1~3歩脚長節の外面から縦長の浅い溝を有し、第3歩脚は全体が顆粒で覆われる。本種は西表島の船浦湾の潮間帯から採集された3個体を基に記載され、その後、外離島や鳩間島の潮下帯からも発見された。同属他種より、甲長に対する甲幅の比が大きい点と、第3顎脚の座節が長節より幅広い点から区別できる。

原 記 載： Rahayu, D. L. & P. K. L. Ng, 2014. New genera and new species of Hexapodidae (Crustacea, Brachyura) from the Indo-West Pacific and east Atlantic. *Raffles Bulletin of Zoology*, 62: 396-483.

参 考 文 献： 成瀬 貫・渡部哲也・吉田隆太 (印刷中). ムツアシガニ類6種の分布と生息環境に関する追加情報、及び和名の整理. *Fauna Ryukyuna*.

執 筆 者 名： 成瀬 貫

和 名： オオウラムツアシガニ

分 類： 十脚目 短尾下目 ムツアシガニ科

学 名： *Mariaplax ourabay* Rahayu & Ng, 2014

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 該当なし

甲幅9 mmほどの本種は、甲は横長の丸みを帯びた台形であり、甲幅は甲長の1.4倍ほどである。第3顎脚座節は内側に伸長しない。第1~3歩脚長節の外面から縦長の浅い溝を有す。雄の尾節は第6腹節とほぼ同長であり、第6節は癒合した第3~5節の約0.6倍である。本種は、大浦湾の二見から採集された雌雄1個体ずつからのみ知られている。同属他種より、雄の腹節と尾節の長さの比の違いより区別できる。

原 記 載： Rahayu, D. L. & P. K. L. Ng, 2014. New genera and new species of Hexapodidae (Crustacea, Brachyura) from the Indo-West Pacific and east Atlantic. *Raffles Bulletin of Zoology*, 62: 396-483.

成瀬 貫・渡部哲也・吉田隆太 (印刷中). ムツアシガニ類6種の分布と生息環境に関する追加情報、及び和名の整理. *Fauna Ryukyuna*.

執 筆 者 名： 成瀬 貫

和 名： ヘコミベンケイガニ

分 類： 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科

学 名： *Bresedium brevipes* (De Man, 1889)

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 該当なし

甲は横長で後方に向けてやや広がる。眼窩外歯の後方に2つの前鰓歯を具える。歩脚は比較的短い。雄の第6腹節の末端縁は、明瞭に凹み尾節の基部を囲む。国内からの記録は石垣島のみ。国外では東インド洋・西太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布する (タイプ産地：オーストラリア)。河川の感潮域最上部の河岸林に生息している。河川の護岸整備などによる生息環境の悪化や消失、堰などの人工構造物による回遊阻害が本種の生存に対して脅威になると考えられる。

原 記 載： Man, J. G. de, 1889. Über einige neue oder seltene indopacifische Brachyuren. *Zoologische Jahrbücher, Abteilung für Systematik, Geographie und Biologie der Tiere*, 4(2): 409-452, pls. IX-X.

参 考 文 献： 前之園唯史・成瀬 貫, 2016. 石垣島より採集された日本初記録のベンケイガニ科 (甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目) の2種. *Fauna Ryukyuna*, 28: 5-22.

執 筆 者 名： 前之園唯史

和 名： ニンジャベンケイガニ

分 類： 十脚目 短尾下目 ベンケイガニ科

学 名： *Labuanium trapezoideum* (H. Milne Edwards, 1837)

カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 該当なし

甲長は最大個体で約 35 mm。甲に厚みがなく、背面から見ると後方に向けて明瞭に広がる台形状。歩脚は長い。国内からの正式な記録は石垣島のみであるが、最近、西表島からも確認されている (前之園・佐伯, 未発表)。国外では東インド洋・西太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布する (タイプ産地: 不明)。河川の感潮域の直上にある滝や堰の流れの裏側、速い流れがぶつかる岩盤の水際などに生息している。抱卵雌は降河せず普段の生息場所で幼生を放ち、幼生は河川の流れに乗って海へ放出される。生息環境が特殊であるため、河川改修による流れの単調化、河岸・河床の直接的な改変により生息環境が悪化・消失しやすい。さらに赤土や農薬の流入による水質汚濁も本種の生存に対して脅威になると考えられる。

原 記 載： Milne Edwards, H., 1834-1837. Histoire naturelle des Crustacés comprenant l'anatomie, la physiologie et la classification de ces animaux. *Librairie Encyclopédique de Roret, Paris*, Vol. 1: i-xxxv, 1-468. Vol. 2: 1-531. Atlas, 1837: 1-32, pls. 1-42. Vol. 3, 1840: 1-638.

参 考 文 献： 前之園唯史・成瀬 貫, 2016. 石垣島より採集された日本初記録のベンケイガニ科 (甲殻亜門: 十脚目: 短尾下目) の2種. *Fauna Ryukyuna*, 28: 5-22.

執筆者名：前之園唯史

和名：ヒメアカイソモドキ
 分類：十脚目 短尾下目 モクズガニ科
 学名：*Sestrostoma depressum* (Sakai, 1965)
 カテゴリー：情報不足 (DD) 環境省カテゴリー：該当なし

甲は幅広い楕円形。背面はあまり膨らまず、表面を覆う小孔は明瞭。甲の側縁は完縁で薄板状の縁取りは明瞭。歩脚は比較的短い。国外からの採集記録はなく、沖縄県では奥武島（名護市）から、県外では千葉県、神奈川県、静岡県、和歌山県、愛媛県から記録がある（タイプ産地：相模湾）。採集例が極めて少ないため、詳しい生態など不明な点が多いが、県外では外洋に面した砂泥底に生息するバルスアナジャコ *Upogebia issaeffi* (Balss, 1913) やスナモグリ *Nihonotrypaea petalura* (Stimpson, 1860) の巣穴から採集されている。県内でも砂泥底の干潟で採集されているが、共生関係は明らかにされていない。埋め立てによる干潟の縮小や消失、防波堤建設による潮流の変化が本種の生存に対して脅威になると考えられる。

原記載：Sakai, T., 1965. The Crabs of Sagami Bay collected by His Majesty the Emperor of Japan. Maruzen, Tokyo.
 参考文献：Naruse, T., 2015. Description of a new genus and a new species of gaeticine crab (Crustacea: Brachyura: Varunidae) from the Ryukyu Islands, and a review of *Acmaeopleura* Stimpson, 1858, and *Sestrostoma* Davie & N. K. Ng, 2007. *Zootaxa*, 3925(2): 211-228.

執筆者名：前之園唯史

和名：タイワンオオヒライソガニ
 分類：十脚目 短尾下目 モクズガニ科
 学名：*Varuna yui* Hwang & Takeda, 1986
 カテゴリー：情報不足 (DD) 環境省カテゴリー：情報不足 (DD)

甲幅 50 mm ほどになる大型種。甲は薄く、甲長・甲幅はほぼ同じ長さ。前側縁には眼窩外歯を含んで 3 歯あり、第 3 歯間が最も甲の幅が広くなり、それより前方では徐々に狭まる。歩脚の前節指節は背幅に平圧され内縁に毛が生える。オオヒライソガニ *Varuna litterata* (Fabricius, 1798) に非常によく似るが、甲がやや厚い、雄の第 6 腹節が狭い、雄第一腹肢前縁が切れ込む、という点から区別できる。

参考文献：Hwang, J.-J. & M. Takeda, 1986. A new freshwater crab of the family Grapsidae from Taiwan. *Proceedings of the Japanese Society of Systematic Zoology*, 33: 11-18.

執筆者名：成瀬 貫

和名：ヨミノオサガニ
 分類：十脚目 短尾下目 オサガニ科
 学名：*Euplax leptophthalmus* H. Milne Edwards, 1852
 カテゴリー：情報不足 (DD) 環境省カテゴリー：該当なし

最大甲幅 24 mm。甲は方形で、甲幅は甲長の 1.2 倍。眼の角膜は小さい。口前部は狭く、中央部は幅広くくぼむ。第 3 顎脚の長節は坐節よりも顕著に短い。雄の鉗脚の不動指内縁中央部に小円鋸歯状の歯を、指節内縁基部に大白歯状の歯を備える。マングローブ域の水路の軟泥底に生息する。国外ではインド、国内では奄美大島から記録がある。現在、分布状況の把握が進められている。

原記載：Milne Edwards, H., 1852. Observations sur les affinités zoologiques et la classification naturelle des Crustacés. *Annales des Sciences naturelles*, (3)18: 109-166, pls.3, 4.
 参考文献：Kishino, T., T. Yonezawa & K. Wada, 2011. A rare macrophthalmine crab, *Euplax leptophthalmus* H. Milne Edwards, 1852 (Decapoda, Brachyura, Macrophthalmidae) from Amami-Oshima Island, Ryukyu Islands, southern Japan. *Crustacean research*, 40: 13-20.
 Mendoza, J. C. E. & P. K. L. Ng, 2007. *Macrophthalmus* (*Euplax*) H. Milne Edwards, 1852, A valid subgenus of ocypodoid crab (Decapoda: Brachyura: Macrophthalmidae), with description of a new species from the Philippines. *Journal of Crustacean Biology*, 27: 670- 680.

執筆者名：藤田喜久